CUC
CHIBA UNIVERSITY OF COMMERCE
千葉商科大学 総合研究センター
CUC Research Institute

ISSN 1342-0542

2026/OCT.
No.62

CUC VIEW & VISION

《特　集》

千葉商科大学の教養～特集②言語文化編～

千葉商科大学総合研究センター

CUC The Institute of Economic Research Chiba University of Commerce VIEW&VISION

2026/OCT. No.62

目　次

巻頭言：大学と知性 …… 1
千葉商科大学基盤教育機構 教授　基盤教育機構長 学長補佐　**大矢野　潤**

特　集：千葉商科大学の教養～特集②言語文化編～

特集の狙い …… 2
千葉商科大学基盤教育機構 准教授　**影浦　亮平**

外国語と「未知」を楽しむ：好奇心から始まる探索 …… 4
千葉商科大学基盤教育機構 教授　**山内　真理**

ドイツ語から広がる多言語世界 …… 14
千葉商科大学基盤教育機構 非常勤講師　**小松　真帆**

世界最古のアイドル、トロイアのヘレネー再考 …… 20
千葉商科大学基盤教育機構 商経学部 非常勤講師　**橋本　克己**

多言語社会がやってきた！―グローバル社会における外国語とのつきあいとは― …… 24
千葉商科大学基盤教育機構 非常勤講師　**日高　美奈子**

ことばが意味を為すとき：*Instruments of a Beating Heart* 試論 …… 30
千葉商科大学基盤教育機構 准教授　**大勝　裕史**

言語場論からみる日中文化の差異―中国語教育への文化的アプローチ― …… 36
千葉商科大学基盤教育機構 非常勤講師　**王　瑞来**

イベント報告（ユネスコスクール） …… 43
千葉商科大学基盤教育機構 准教授　**影浦　亮平**

プロジェクト報告

女性労働力参加とケア責任をめぐる制度と労働観 …… 45
千葉商科大学商経学部 教授　**奥寺　葵**

第12回会計・税務研修会開催報告 …… 48
千葉商科大学大学院会計ファイナンス研究科 教授　**中村　元彦**

人工知能の進展と企業経営課題の解決をめぐって …… 51
千葉商科大学大学院政策研究科 客員教授
千葉商科大学基盤教育機構 非常勤講師　**寺野　隆雄**

講演「遠藤隆吉先生と神道」と学生向け『遠藤隆吉著作選集』刊行に向けた選定作業：遠藤隆吉研究所2025年度の成果 …… 54
千葉商科大学総合政策学部 教授　**朽木　量**

「サステナビリティ」の様相―ウェルビーイング概念の可能性に着目して …… 58
千葉商科大学人間社会学部 教授　**猪熊　ひろか**

定常的プロジェクト：ガバナンスおよびサステナビリティの研究の報告 …… 61
千葉商科大学総合政策学部 教授　**磯山　友幸**

日本におけるルーラルツーリズムの発展に向けた条件整理に関する研究 …… 65
千葉商科大学人間社会学部 教授　**山田　耕生**

遠藤隆吉における「共知」の思想と社会学―「人情と社会」への視座― …… 69
千葉商科大学人間社会学部 教授　**荒川　敏彦**

環境マネジメント・コントロール研究の現状と課題―昨年度の業績を中心とした成果報告― …… 73
千葉商科大学商経学部 教授　**安藤　崇**

ポストパンデミックにおける中心業務地区の再構築―バンクーバー・グランビル・ストリートの歩行者空間化を事例に― …… 77
千葉商科大学総合政策学部 教授　**榎戸　敬介**

相互に学び合う国際関係を通じた島嶼型持続可能観光モデルに向けて：フィジーと奄美大島との比較研究 …… 84
千葉商科大学総合政策学部 准教授　**藤田　輔**

評論　市街地再開発地域のまちづくり―その現状と課題、新たな方向性― …… 88
千葉商科大学中小企業経営研究所 客員研究員　**前田　進**

総合研究センター出版物情報 …… 94
編集後記 …… 95
千葉商科大学総合研究センター長 サービス創造学部 教授　**安藤　和代**

巻頭言

大学と知性



千葉商科大学基盤教育機構 教授　基盤教育機構長、学長補佐
大矢野　潤
OYANO Jun

プロフィール
慶應義塾大学大学院理工学研究科博士後期課程／政策情報学会、日本ソフトウェア科学会、情報処理学会、電子情報通信学会各委員／市川市市政戦略会議前委員
専門；コンピューティングサイエンス

われわれは普段、「知性とは何か」をあまり深く考えない。日常生活では、考えなくてもそれほど困らないからである。賢い人を賢いと言い、そうでない人をそうでないと言っても、おおむね話は通じる。

しかし、大学は研究と教育を通じて知性を扱う機関である。AI（人工知能）が急速に社会へ普及しつつある今、知性とは何かを、改めて考える必要があるのではないだろうか。

ここで、アラン・チューリングが1950年の論文「Computing Machinery and Intelligence」で提示した「模倣ゲーム」、後にいわゆるチューリングテストと呼ばれるようになった考え方を振り返ってみたい[1]。チューリングは、相手の姿を見ず、文字による応答だけを手掛かりとして、その相手が人間か機械かを判定するゲームを考えた。

大学もまた、答案やレポート、発表や対話といった限られた応答から、学生の理解や知性を判定してきた。しかし今日、その応答の向こう側にいるのは、学生だけとは限らない。その受け答えに、AIが介在するようになったからである。

問題は、相手が人間かAIかを見破ることではない。学生とAIが協働して生み出した応答から、その学生自身が何を知り、何を理解し、何を身につけたのかを判断しなければならないことである。

私たち大学教員は、教育を通じて学生の知識、理解、思考力を育てることを職務としている。したがって、学生の知性がどれほど育ったかを確かめる必要がある。しかし、知性を直接測ることはできない。私たちは、試験答案やレポート、発表や質疑応答を通じて、その背後にある知識、理解、思考力を推定してきた。

生成AIは、この推定作業を難しくする。提出された成果物が優れていることと、学生自身の知性が高まったこととが、必ずしも一致しなくなったからである。ここで、AIの使用を単なる不正と断定するのは適切ではない。AIの使用を禁止すれば、AIが普及した現実の社会で必要となる能力を測ることができない。一方で、AIを駆使して作られた成果物からは、学生本人に何が身についたのかが見えにくくなる。

AIが人間の知的活動を学び、人間がそのAIを使って新たな知的活動を行う。教える側と教えられる側、評価する側と評価される側の境界も、しだいに曖昧になっている。そこでは、知性を測るために整備してきた地盤そのものを見直す必要がある。

ここで、2013年にカール・ベネディクト・フレイとマイケル・A・オズボーンが発表した、通称「雇用の未来」と呼ばれる論文にも触れたい[2]。この研究は、米国の702職種について、コンピュータ化される可能性を推計したものである。

私は以前、ある会議でこの論文を引用し、機械学習によって雇用に地殻変動が起きるという点では、その予測の本質は妥当であるが、変化の影響が現れる順番は、論文に示されたとおりにはならないのではないかと述べた。さらに、機械学習によって職業の自動化可能性を予測する仕事そのものもまた、機械学習の対象となり得るとも指摘した。

予測や自動化を支える側にいると思われていたソフトウェア開発の領域も、今では生成AIによる大きな変化に直面している。「雇用の未来」では、一部のソフトウェア開発職は比較的淘汰されにくい側に位置づけられていた。しかし、現在、その予測がそのまま当てはまっているとは言い難い。予測する側、支える側もまた、変化の外側にはいられない。そして今、大学もこの地殻変動の中にいる。

私にも先生がいる。その先生は最終講義で、次のように語った。

「われわれは、大きなコンピュータを相手にしてきた。これからの人は、目に見えないほど小さなコンピュータを相手にしなければならない。これからの人は、大変ですね」

おそらく、IoTのような世界を想定しての言葉であったのだろう。私は、その言葉に続けて、こう言いたい。

私たちは、コンピュータにアルゴリズムを与え、その働きや成果について得た知識を学生に教えてきた。これからの教員は、多くの知的作業において自分を上回るコンピュータと、そのコンピュータを道具として使う学生を相手にしながら、なお学生自身の知性を育て、その成長を確かめなければならない。

大変であり、同時に大切な仕事である。

1　Turing, A. M.（1950）“Computing Machinery and Intelligence,” *Mind*, Vol. LIX, No. 236, pp. 433–460.
2　Frey, C. B. and Osborne, M. A.（2013）“The Future of Employment: How Susceptible Are Jobs to Computerisation?”, Working Paper, Oxford Martin Programme on Technology and Employment, University of Oxford.

特　集

千葉商科大学の教養〜特集②言語文化編〜

特集の狙い



千葉商科大学基盤教育機構　准教授

影浦　亮平

KAGEURA Ryohei

プロフィール

1981 年愛媛生まれ。京都大学卒業後、ストラスブール大学（フランス）で修士課程、博士課程を修了。博士（哲学）。稲盛財団、京都外国語大学、クエンカ大学（エクアドル）等を経て、21年から現職。専門は哲学・倫理学。

今号は言語と文化とのつながりについて多角的に検討する「言語文化編」であり、「商大の教養」シリーズの第二弾となる（第一弾は「哲学・思想編」だった）。言語と文化の関係について検討にするにあたって、言語はともかく文化についてコンセンサスをつくっておいたほうがよいように思われるので、少し付言しておきたい。ここではカルチュラルスタディーズの分野で一般に採用される文化の理解を紹介しておきたい。もともと文化という言葉は高級文化を指し、文化度が低いとされた大衆とは区別されるエリートの生活を表していた。しかしながら、レイモンド・ウィリアムズによって文化は、変わっていく儀礼や出来事、大衆の日常までを意味するものに拡大された。文化は特定の物質や嗜好のことを指すものではなく、私たちの生活の実践ないし行動を指すものとなった。

このように理解される文化ないし日常行動と、言語が結び付いているということは、語学学習者であれば日々体感することである。私は本学でフランス語の授業も担当しているので、フランス語教育を例に取り、フランス語教育の中で最初に習うことになる挨拶表現を見てみたい。フランス語圏で人に会うと、まずは「Bonjour」（「おはよう」「こんにちは」に相当する）という挨拶で始まり、次に「Ça va ?」（「元気ですか」、英語の「How are you?」に相当する）という体調を慮る表現が来る。日本語文化圏だと、1か月ぶりに会う人間に対してであれば、挨拶の後に「お元気にしていますか」と聞くことはあり得るだろうが、毎日会う人間にいちいち体調を聞くのは不自然である。しかし、フランス語文化圏においては、それが極めて自然なことなのである。ここには文化の違いがあるのであり、語学学習は必然的に多文化学習にもなるのである。

また言語学者ソシュールの視点についても触れておきたい。言語はわれわれの世界の認識そのものであり、その認識に基づいてわれわれは行動し、文化が生じていくことを踏まえると、言語そのものが文化を生成するという見方を取ることもできる。言語による世界の認識は世界のあり方に対

して恣意的であるというのは、ソシュールが提示した重要な視角である。たとえば日本語の「水」と英語の「water」という言葉に着目してみたい。日本語では熱い状態の「水」はもはや「水」とは呼ばず、「湯」という言葉を対応させる。しかし、英語ではお湯は「hot water」であり、直訳すると「熱い水」となる。日本語の場合は、水という物質を熱い状態と冷たい状態で区別し、それに対応して水と湯という言葉を対応させている。それに対して、英語の場合は、このふたつの状態を区別しない。その結果として、「water」という言葉しか存在しないのである。このように、日本語と英語を比較した場合に、日本語の場合は水の状態に応じて別の言葉を用意しているが、それは必ずしもそうでなければならないということはないということがわかる。これが、ソシュールが指摘する恣意性というものである。そして、こうした性質の言語から生成される文化もまた恣意的な性質を持っているということになる。

ここで再び、レイモンド・ウィリアムズの文化の定義に戻ると、文化は人間の実際の行動と紐づいている。文化は人間の実際の行動を生み出すものであり、逆に言えば、行動を生み出さない文化は文化たり得ない。文化には人間を動かす力があるのだとすれば、それは政治的なものでもあり得る。こうした文化の政治性を批判的に分析するのは、カルチュラルスタディーズの中心的な作業のひとつである。ここでは、深刻な例をひとつ挙げておきたい。経済学者アマルティア・センが「失われた女性たち (missing women)」として着目した事例である。この事例には持参財文化が関係している。結婚の際に妻方の家族から夫方の家族に財産を渡す習慣がそれであり、インド、バングラデシュや東ヨーロッパに多く見られる文化風習である。実際には金銭であることが多く、この渡される財産を持参財ないし持参金 (dowry) と言う。このような文化が女性にもたらす帰結は極めて深刻である。貧しい家庭にあっては、将来的な持参財の支払いを逃れるために、女児が産まれるや否や殺害するという嬰児殺しが横行する。すなわち、持参財文化と貧困が結合することにより、嬰児殺しという帰結が生じているのである。しかし、先ほどの文化の恣意性の議論に立ち返れば、持参財文化は絶対にこのような文化でなくてはならないという理由はないのであり、カルチュラルスタディーズの立場からはこうした文化に対し批判的な見方を向け、場合によってはこうした文化に対して変化を求めるものとなる。[1]

今回の特集「言語文化編」の狙いはしたがって、恣意的で多様な形であり得、それゆえに常に変わり得る言語と文化、そしてそれらの関係、そしてそれらが生み出す人間の行動あるいは政治性をそれぞれの題材から見ていき、われわれの言語と文化に対する理解を深める一助となるというものである。

1　ここで取り上げた言語の恣意性や持参財文化の問題のトピックについては、『地球市民のための SDGs』（影浦亮平・辰巳遼著、晃洋書房、2025 年）で詳しく解説しているので、関心がある方はそちらも参照されたい。

外国語と「未知」を楽しむ：好奇心から始まる探索



千葉商科大学基盤教育機構　教授
山内　真理
YAMAUCHI Mari

プロフィール
大学で、英語・異文化コミュニケーションに関わる授業を担当している。言葉の仕組みを探り、言語習得のプロセスを自己観察することを楽しんでいる。専門は英語教育。

1　はじめに

筆者は新しい言語を学ぶのが「好き」である。ただ食指が動くに任せて手を出し、楽しんできただけで、どこがどう好きなのかを突き詰めようとしたことはなかった。そこで本稿では、筆者自身の学習経験を手がかりに、外国語を学ぶ楽しさと意義を、「未知」との付き合い方という観点から考えてみたい。

外国語に触れることは、未知の音や語彙、文法、表現に出会うことである。「なぜこうなるのだろう」「これはどういう仕組みなのだろう」と疑問をもち、確かめながら理解していく過程には、探索することそのものの楽しさがある。しかし、そもそも、なぜ人間は未知のものに出会うと、「知りたい」「分かりたい」と感じ、それを探索しようとするのだろうか。本稿では、好奇心と探索をめぐる議論にも触れながら、この問いについて考える。

母語とは異なる言語に触れることは、母語を通して無意識に身につけてきた世界の見方や「当たり前」に気づき、それを相対化する機会にもなる。筆者自身がさまざまな外国語に触れる中で経験してきた、こうした気づきや探索を振り返るとともに、生成 AI をはじめとする現在のテクノロジーが、「ちょっと気になる」を実際の探索へ移す行動コストを下げ、関心の赴くままに探索を進めることを容易にしていることについても考えてみたい。

2　母語による見方を自覚する

人間は、限られた認知資源で効率よく生活するため[1]、経験にもとづいて世界を理解し、予測可能な状態を維持しようとする。そのため、慣れ親しんだ世界を安全だと感じ、新奇なものには不安を抱きやすい[2]。一方で、新しい知識や環境を探索しようとする好奇心もまた、人間に備わった重要な特性である[3]。人間の認知には、このように、安定を維持しようとする働きと、未知を探索しようとする働きが共存している。この二つの方向性は、心理学、認知科学、神経科学など、さまざまな分野から論じられてきた（吉田・田口, 2025; 谷口, 2024; 乾・門脇, 2024; 乾・阪口, 2021; 本多, 2005）。

安定を維持する働きの一例が「恒常仮定」である。これは、外部からの刺激が同じであれば、そこから得られる知覚経験も同じだろうという無意識の想定である（本多, 2005; 町田, 2025）。母語で世界を認識するとき、その処理は空気のように意識されず、予測可能で、自動化されている。母語話者同士のコミュニケー

1　私たちの記憶には情報をカテゴリーに分類するスキーマがあり、そこで整理された情報をもとに、外界を見ている。脳で処理できる容量には限りがあるので、リソースの負荷をなるべく減らすために起こる現象である。この思考の「節約」は「ステレオタイプ」と呼ばれる（八島・久保田, 2012）。

2　マズローは、子どもの「安全欲求」を示す兆として「ある種乱れのない日常やリズムの、一般に安全で、秩序があり、予測可能で、組織化された世界を好む」傾向を挙げている。その一方で、事実への好奇心・探索・欲求が「しばしば個人の安全に多大な犠牲を払っても追求される」ことを指摘し、5 つの基本欲求（生理的、安全、社会的、承認、自己実現）の考え方が部分的であることを認めている（乾・門脇, 2024; Maslow, 1943）。

3　谷口（2024）が紹介するウィリアム・ジェームズの「好奇心」の議論では、新奇な対象への接近と探索を動機づける好奇心は、「新奇な対象からの回避を動機づける不安と拮抗する」ものと捉えられている。

ションでは、同じ言葉を使っている以上話し手と聞き手はその言葉を同じ意味で理解しているはずだ、という想定も働きやすい。たとえば、教員が「8割の出席が単位取得の必要条件である」と説明しても、学生がそれを「8割出席すれば単位がもらえる」という意味に受け取ることがある（今井・秋田, 2023）。この間違った解釈は、それ自体は意味が通じてしまうため、自分の理解に問題があることに気づきにくい。さらに教員と同じ日本語で、同じ「必要条件」という語を共有しているため、自分の無自覚の解釈が教員の意図とずれていることにも気づきにくいのである。

とはいえ、自分の解釈が相手の意図とずれている可能性がある、と承知していたとしても、無意識の前提から自由になれるわけではない。言葉の解釈を1つに決めながら、同時にその解釈を疑うことは難しい。1つの解釈を選ぶとそれ以外の解釈が背景化されるからだ。このことは、ルビンの壺における図と地の反転現象からも分かる。有名な「ルビンの壺」は、中央の白い部分に注意を向ければ「壺」に、その両側に注意を向ければ「向かい合う二人の顔」にも見える多義図形である。私たちは、同じ図が壺にも二人の横顔にも見えることを知っている。しかし、そう分かっていても、二つの見方を同時に知覚することはできず、実際の知覚では、その都度どちらか一方が前景化する。

同様に、言語を理解したり、言語で世界を表現したりするときにも、私たちは可能な意味や世界のあり方をすべて同時に捉えるのではなく、どこかに注意を向け、その都度一つの解釈を成立させる。スロービンはこれを「話すための思考」と呼び、言語が選択的注意を方向づけると論じている（町田, 2025; Slobin, 2003; 1987）。

たとえば、オリオン座の写真だけを見せられれば、まずは「オリオン座」が一つのまとまりとして図になるだろう。ここで What are they? と尋ねられると、英語話者は、they と are に反応して自動的に「複数のもの」へ注意を向け、stars と答える。一方、単複の区別が義務的でない日本語の処理習慣が働くと、「写真に写っているもの」を問われていると解釈し、図として前景化している「オリオン座」をそのまま答えとしやすい（町田, 2025: 114 -117）。

このように、言語の違いは、同じ対象のどこに注意を向けるかという無自覚な習慣にも影響する。日本語と英語のように言語間距離が遠い言語を比べる場合は特に、世界の捉え方の違いに否応なく気づかされる。外国語を学ぶことは、新しい見方を知ると同時に、普段は無自覚な自分の見方を意識する機会にもなる（町田, 2025）。

3 未知を探索する楽しさ

経験にもとづいて世界を理解し、予測可能な状態を維持しようとする働きが新奇な対象を避けさせる一方、好奇心は未知を理解しようとする接近・探索行動を起こす。好奇心に駆動された探索では、外界の情報を集め、既存の知識を使って「こうしたらどうなるか」という仮説を立て、それを実行・確認して不確実性を減少させていく（乾・門脇, 2024; 乾・阪口, 2021）[4]。何に「ワクワク」するかは個人ごとに異なるが、筆者の場合、その典型が外国語であった。

3.1. 子どもの頃の英語学習

筆者が初めて触れた外国語は英語である。1年後に海外転勤になるかもしれないからと、『NHK ラジオ基礎英語』のテキストと初めてのラジカセを与えられた小4女子は、そのまま英語にはまり、録音も活用しながら毎日英語学習を続けた。まず面白かったのは音である。school の語末の [l]、bed の語末子音 や girl の母音、pin–pen–pan の聞き分けなど、日本語の音韻体系をそのまま適用できないところが面白く、「このLは“ル”より“ウ”か“オ”に近い」といった「仮説」を立てながら、聞こえた通りに再現しようとすること自体が楽しかった。英語の綴りと音の関係にも、cut/cute のような対からパターンを見つけ「読める」語が増えていく楽しさもあった。

音と並行して惹かれたのは、日本語と英語での、語彙の意味範囲や語順、構文を含む表現パターンの違いである。I have two sisters. という簡単な文を見ても、日本語とは異なる親族語彙の構造や、have が「持っている」とは一対一対応ではないという違いが面白かった。語彙構造の違いの例を挙げておく。(1a) のように、日本語では複数の表現を使い分けるのに英語では一つの語で間に合うケースもあれば、(1b) のようにその逆もある。語句の意味範囲は、日英では、まずズレていると思っていい。また多対多の場合もあり、

4 好奇心に駆動された探索は、知識や技能の獲得につながるため、間接的に、個体の環境適応性を向上させる（谷口, 2024）。なお、新奇な対象に好奇心をもち、探索行動を通じて理解度をあげようとする行動は、ドーパミンの働きで重みづけされる（乾・門脇, 2024; ; 乾・阪口, 2021）。

発話レベルや誤形成など、比較の観点を加えると「対応」関係はどんどん複雑になる（4節も参照）。

(1) a. | *wear* | 対 | 身につける | 着る | 履く | かぶる | つける | はやす |
b. | 泣く | 対 | *cry* | *weep* | *sob* | *whimper* | *bawl* | *wail* |

振り返れば、日本語にもとづく予測が外れるたびに、自分なりの仮説を立て、それがうまく当てはまることを楽しんでいたのだろう。既存の知識では説明できない現象に出会うと不確実性が生じるが、新しいパターンを発見すれば、次に出会う英語の音や意味をより正確に予測できるようになる。「読める・聞き分けられる・分かる」ものが増えていくこと自体が、次の探索を促していたと言える。英語に触れたきっかけは、海外転勤の可能性や教材の提供という外的なものだったが、学習を続けるうちに、「分かる」こと自体が、学習を続ける内的な動機になった。具体的な目的や実利（英語を話す、将来の仕事で英語を使う、など）には意識が向かず、好奇心に駆られて探索を続けていたという意味で、この頃の学習は「子どもならでは」のものだったように思う。

ただし、新奇なもの全てに好奇心が生じるわけではない。「どうやって理解すればいいか分からない（仮説が立たない）」場合や「理解するためにやることが大変そう（実行できなさそうという予測できる）」場合は、好奇心は生じにくく、探索も始まりにくい[5]。たとえば、もしローマ字習得前だったら、先に述べたような面白さを感じられただろうか。あるいは、当時は意識していなかったが、たとえば1日20分のラジオ講座ではなく1回2時間かかる課題だったらそもそも取り組んだかどうか怪しい。またテキストが入手困難だったら続かなかったかもしれない。探索行動を実行しやすい環境だったからこそ好奇心が発動したとも言える。

一方、簡単すぎて不確実性がほとんどなければ、新奇さが失われて飽きてしまう。筆者の場合も、学習が進み、英語の音や表現がある程度予測できるようになると、未知や新奇性は減っていった。新しい仮説を立てて確かめる余地も少なくなり、探索から得られる「分かる」楽しさも薄れていく。当時の筆者は、英語学習に実利的な価値を見出していたわけでもなかったため、不確実性が減るとともに、英語への興味も低下していくことになる[6]。

3.2. 大人の言語探索

英語に対する「ワクワク」がいったん枯渇した後、筆者はドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、中国語などに次々と手を出すようになる。英語の経験から、学ぶと楽しいという予測にも自信があり、どうアプローチするかも見通しが立っていたという状況では、自然な流れとも言える。英語に触れたときのように、新しい音、文字、語順、構文に出会い、ある言語で得た仮説を別の言語に適用して確かめることを楽しんだ。

とはいえ、繰り返しになるが、新奇なもの全てに好奇心が生じるわけではない。限られた認知資源で効率よく生活できるよう、脳は省エネ志向であり、資源を無駄にしそうな行動にはブレーキがかかる。脳にとって最も魅力的なのは、行動コスト（難易度）と天秤にかけたとき、得られる世界の理解（不確実性の減少）が最大になる（と予測される）行動選択である[7]。この行動コストにも注目して、大人の探索行動（学習）を見ていこう。

低コスト＋新奇性（好奇心）

まず、上述の6言語をなぜ選択したのかと考えると、「アクセスしやすかったから」に尽きる。全て、当時のNHK語学講座でカバーされており、大学でもイタリア語・スペイン語以外は授業が提供されていた[8]。

この6言語中、フランス語・スペイン語・イタリア語は、それ以外に比べて、基本構造が似ていてサクサク入る楽しさ（既存の知識が適用できる快感）があった。それが動機づけになった反面、新鮮味が薄れるのも早かった。

ドイツ語は、それ以外に比べて文構造が新奇すぎ、理解しようとして詳細な文法書を参照してしまったことで、初期はかえって回避傾向が強まってしまった。

ロシア語と中国語は、基本的な文構造の新奇性は小さかった。ロシア語はキリル文字に集中することに

5 「できそうだと思えないことはやる気にならない」という状態は、教育の分野では、self-efficacy（自己効力感）という概念で説明される。

6 2年目は『基礎英語』（2周目）と『続・基礎英語』を並行して、3年目は『続・基礎英語』（2周目）と『英会話』を並行して、学習した。新奇さ・不確実性・分からなさを求めたものと見なせる。このやり方で小学生の間は興味が持続した。「英語が分かる」以外の価値・目標がセットされていない状態で中学に進み、英語への興味は枯渇気味だった。

7 ここでいう「行動コスト」も自由エネルギー理論では統一的に算出できるらしい。興味深いのだが、あいにく、情報理論の精密な理解は筆者の能力を超えている（行動コストが高すぎる）。

8 全て履修したが、いろいろ手を出すより英語に力を入れたほうがいいのではという「アドバイス」も受けた。合理的な「理由」ができたらなあ、とひそかに思っていたことを思い出す。

なったが、中国語は、声調に苦労しただけでなく、見て意味が分かることが多く、気づくと音声練習不足の状態になっていた。

言語ごとにこのような差はあるが、意外なところで仮説が適用できる（知識が使える）快感は味わえていた。音声を例にすると、接近音と摩擦音が「近い」のかもと気づいて嬉しかった覚えがある。スペイン語の llamar は、ヤ行音のような硬口蓋接近音 [jaˈmaɾ]、またはジャ行音のような有声硬口蓋摩擦音 [jaˈmaɾ] で発音される。中国語の rìběnrén（日本人）を聞いたとき摩擦が含まれている印象があり、この印象通り、r の発音が [ɻ]（有声そり舌接近音）か [ʐ]（有声そり舌摩擦音）であると確認できて嬉しかった。同時に、スペイン語の接近音と摩擦音を思い出し、接近音と摩擦音は「近い」のかも[9]、という仮説が立つのが楽しかった。

高コスト＋新たな価値

あるとき、英語教育ゼミの担当教授から、ゼミ生で分担して、外国語教育に関するロシア語論文を1本読む課題が出された。久しぶりの外的なきっかけである。課題でなければ、辞書を引くのも覚束ないのに論文に取り組もうという気には絶対ならなかっただろう。教授によれば、この課題の意図は辞書が引けるほどアルファベットに習熟していない生徒の気持ちを体感することであった。「人間は一度習熟すると、未習熟のときにどうだったかを覚えていないものだから」と説明された。紙の辞書を引くには、字形と順番を覚えている必要があり、キリル文字に少し触った程度の筆者にとって、単語1つ見つけるのが、実際、本当に大変だった。しかし、それ以上に衝撃的だったのが、教授の言う通り、アルファベットでも同じような苦労を経験したはずなのに、その記憶が全くなかったことである。

あまりに衝撃的で、これ以降、アルファベットでない文字を読めるようになりたいという内的な動機が新たにできた。新しい文字を見てワクワクし、読めるようになって喜び、もう「読めなかったときのことは思い出せない」ことを再確認して喜ぶという、新たな楽しみが加わった。ロシア語、韓国語、ギリシャ語、ヒンディー語、ヘブライ語、アラビア語、タイ語は、文字が学習動機の一つになっている。

デジタルツールによるコスト軽減

上で挙げた非アルファベット文字の言語のうち、タイ語の学習がもっとも進んでいない。文字自体は非常に興味深い。タイ文字はデザインが楽しいだけでなく、以下に示すように、子音＋母音で構成される音を表記するのに母音＋子音の順序で書いたりする。この表記パターンもあったかという発見の宝庫である。

- ไทย (タイ)；[t^{h}**aj**˦], [t^{h}**ai**˦]
- ไป (パイ / 行く)；[**paj**˦], [**pai**˦]
- ไม่ (マイ / ～ない)；[**maj**˨˩], [**mai**˥˩]
- ไฟ (ファイ / 電気)；[**faj**˦], [**fai**˦])

興味はあっても、タイ語は行動コストの点でそれ以外の6言語との違いが大きい。執筆時点で、タイ語だけが Duolingo でカバーされていない。タイ語以外は Duolingo コースがあり、通常レッスンの他に、図1に示すような文字学習教材がある。図1左は、文字をタップして音を確認する教材で、図1右は、文字や単語を見分けたり聞き分けたりするレッスンである。初めてアラビア文字にトライしたときは手書きの文字練習に挫折したが、この手軽な学習は楽しく継続できた。タイ文字の手書き練習も少しやってはみたが、すぐに、Duolingo にコースができたらやるだろうなあと願うだけになった。

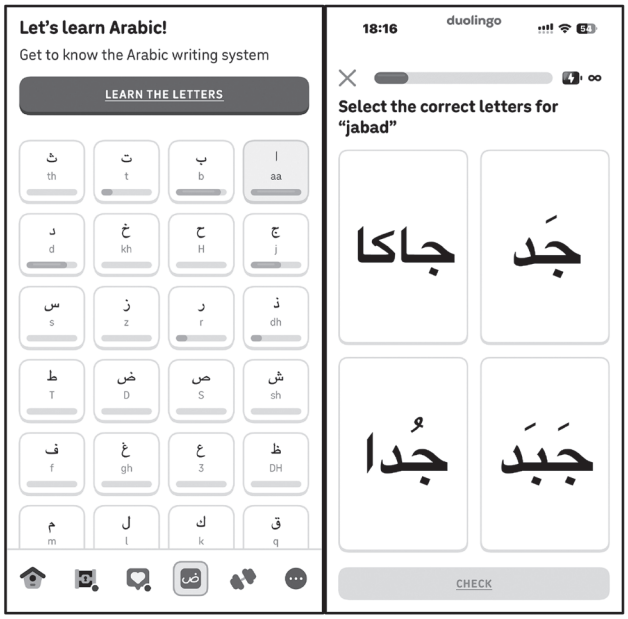


図1 Duolingo アラビア語コースの文字学習レッスン

このように振り返ると、好奇心に駆動されてさまざ

9 ちなみに、最近トルコ語の r も、語末では「シュ」のように聞こえることに気づいた。確認したところ、語末では [ɾ̞] (無声化した歯茎摩擦化弾き音) か [ɻ̊] (無声化した歯茎摩擦接近音) になる。やはり接近音と摩擦音は近いようだ、と喜んでいる。

まな言語探索を楽しんでいる、と自認していたが、好きなものを選択したようでいて、実は（予測される）行動コストによってそもそもの行動選択の幅が決まっていた。好奇心は「少し手を伸ばせば分かりそうな未知」と結びついていると言えそうである。

AIによるコスト軽減と探索可能性拡張

ここでは、生成AIの活用により探索の行動コストが下がり、好奇心駆動型の学習が促進される事例を見ておく。従来、分からない箇所を調べるには辞書や文法書の見方を知り、必要な説明にたどり着く必要があった。生成AIを活用することで、学習中に気になった箇所をその場で質問し、理解したいだけ深く掘り下げたり、関連知識のネットワークを広げたりできる。ここで紹介するAIの役割は以下の3つである。

表1 AIによる探索促進・学習サポート

機能	学習場面
練習問題生成	既存教材では手薄な内容、または自分の水準・好みに合わせたクイズ生成させる。想起練習を反復する。即時フィードバックをもらう。ニーズに合わせてカスタマイズする。
知りたいタイミングで深掘り	Duolingoや読書で出会った目標言語の言語項目について、意味解説、語法・文法解説、関連表現提示、言語面以外の背景情報・関連情報などを求める。知りたいこと・気になったこと・確認したいことなどを聞く。好奇心ベースでやりとりする。
言語使用場面の設計	旅行先や交流場面を想定し、自分の言語知識と目的に合わせた会話例や関連情報を段階的に作らせる。意味解説、語法・文法解説、関連表現提示、言語面以外の背景情報・関連情報などを求める。知りたいこと・気になったこと・確認したいことなどを聞く。好奇心ベースでやりとりする。

図2は、ChatGPTに作ってもらったタイ文字を練習するインタラクティブクイズである。Duolingoのタイ語コースを待つだけでなく、AI活用でなんとかできるのでは、と思いついて試してみた。微調整をしながら作った1問1答式クイズはなかなか良かった。1回分10問（4文字の反復練習）しか試していないが、手軽さと成果（覚えられた実感）は嬉しいものだった。

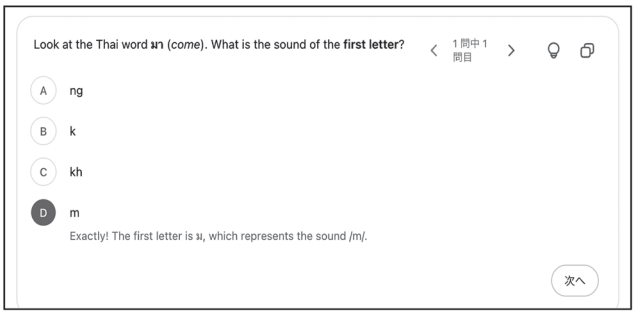


図2 ChatGPT作成インタラクティブ文字練習クイズ

次に「知りたいタイミングで深掘りする」事例を紹介する。Duolingoトルコ語コースで(2)の例文に出会ったときのことである。küçük（small）-bir（a）-köpek（dog）の語順に注意を引かれた。文の意味は分かるのでスルーして次に進んだが、レッスン終了後、はっきりさせたくなったので、ChatGPTに「なぜこの語順なのか」と聞く。やりとりを通して(3a)(3b)のような語順による意味の違いを確認した。(3)の構造から思いついた仮定を確認していく中で、varが日本語の「いる・ある」に似ていること、I have a dogを表現するトルコ語の構造を見ていて、ロシア語・フィンランド語を思い出し、表2に示すような構造の違いを整理できた（筆者にとっては極めて楽しい時間になる）。このように、気になることをその場でどんどん掘り下げていく、あるいは広げていくことができるのがAI活用学習の大きな利点の一つだと思う。

(2) Bu küçük bir köpek.
THIS SMALL A DOG（This is a small dog.）

(3) a. Küçük bir köpeğ-im var.
SMALL A DOG-MY EXISTS/THERE IS
（I have a small dog.）

b. Bir küçük köpeğ-im var.
ONE SMALL DOG-MY EXISTS/THERE IS
（I have one small dog.）

表2 所有表現の構造

言語	所有表現	グロス	語順
英語	I have a dog.	I + HAVE + dog	SVO
ロシア語	У меня есть собака.	at me + EXISTS + dog	SVO
フィンランド語	Minulla on koira.	at/on me + IS + dog	SVO（基本語順）
トルコ語	(Bir) Köpeğim var.	(one) dog-my + EXISTS	SOV

こうしてAI活用が学習方法（探索行動）の選択肢として定着すると、以前なら「まだ早い」と手をつけないだろう言語素材にもトライしたくなる。筆者は、とある経緯で興味を持った *La Società Segreta dei Salvaparole* [The Secret Society of the Word-Savers]（Galiano, 2022）という小説を読んでみる気になった。AIサポートを受けながら「読む」作業の中で気に入ったのは、本の中で気になった文をピックアップして、自分の解釈があっているかを確認するやり方である。(4a)は本文＋自分の解釈の組み合わせで、「大体こうかな」と文の意味を確認するプロンプト、(4b)は本文＋部分の確認（これは動詞？これは過去分詞＋to

save ？）の組み合わせで、一部を確認するものである。このように短い「質問」でも、説明・補足・関連情報がたっぷり返ってくるので、学びが多い。時間が許す限り、気分のままに深掘りするのは、かなり楽しい。

(4) a. Voi lo sapete che cos' è una cabella?
Maybe: You know what a cabella is?
b. E indovinate perché: perché è una delle parole che non sono ancora riuscito a salvare.
indovinate: a verb?
riuscito a salvare: past participle + to save?

最後に、個人向けに「カスタマイズ」した言語使用場面を設定する事例を紹介する。目標とする習熟度レベルや関心のある状況（場所）などを設定し、練習用の会話集を作ってもらう使い方だ[10]。以下は、バリ島で、観光客として、インドネシア語で現地の人と会話するという想定で、様々な場面設定での会話練習用教材を ChatGPT に作成してもらった例である。(5a) の依頼に対する回答の一部が (5b) である。ありそうな場面の会話を出してくれている。(6a) は、そこまでのやりとりから興味を持った「お供物」に関する会話場面をイメージした質問であり、(6b) がその反応の一部である。補足情報や注意事項を述べた上で、作成した会話が続いた。

(5) a. バリ島で観光客が遭遇しそうな場面をいくつか設定して、インドネシア語での会話例を作ってみてください。
- 観光客：日本人女性・インドネシア語は少し分かる・バリ語の知識はほぼない
- 現地の人：バリ人
- ちょっとしたバリ語を教えてもらうやりとりを含む
b. Warung で食事を注文する
観光客：Permisi. Ini apa?　すみません。これは何ですか？
店の人：Ini nasi campur Bali. Ada ayam, sayur, telur, dan sambal. これはバリ風ナシチャンプルです。鶏肉、野菜、卵、サンバルが入っています。
観光客：Pedas sekali?　すごく辛いですか？
店の人：Lumayan pedas. Kalau tidak suka pedas, sambalnya sedikit saja.　けっこう辛いですよ。辛いのが苦手なら、サンバルは少しだけにしましょう。
観光客：Ya. Terima kasih. はい。ありがとうございます。
店の人：Sama-sama.　どういたしまして。
観光客：Kalau bahasa Bali, "terima kasih" apa? バリ語では「ありがとう」は何と言うんですか？
店の人："Suksma."「スクスマ」です。
観光客：Suksma! スクスマ！
店の人：Ya, bagus!　はい、上手です！

(6) a. お供物（チャナン）についてですが、その場で出会った人に、いろいろ質問したりしてみても良いものでしょうか？
b. はい、かなり自然に質問できると思います。ただし、チャナン（canang sari）は単なる飾りではなく、日常的な宗教実践の一部なので、「興味を持って尋ねる」のはよいけれど、供えている最中の人を邪魔しないくらいの距離感がよさそうです。(...) [会話例に続く]

このように、生成 AI の活用により探索を続ける行動コストが下がり、学習中に気になった箇所を自分のタイミングで質問し、自分が理解したいだけ掘り下げ、自分の興味の広がりに応じて知識のネットワークを広げることができる。これにより、従来であれば行動コストが高すぎて探索行動がストップする（あるいは始まらない）ようなところまで、行動選択の可能性が拡張する助けにもなる。

4　言語の比較から得られる気づき

最後に外国語「学習」から少し離れ、言語同士を比べることから得られる学びについて述べておきたい。町田 (2025) は「英語は話せるようにならなければ意味がない」という認識を退け、単語一つ、表現一つを知ることにも発見があると述べる。筆者は、自分が使いたい水準に合わせて「話す」練習をカスタマイズすることは十分に「楽しめる」行動だと考えるが、同時に、ある言語の一部を知るだけでも十分に「面白い」という点では、町田 (2025) と同意見である。とりわけ言語同士を比較すると、単独の言語を見ているだけでは意識しにくい、世界の区切り方や表現形式の違い、文

10 授業でも使っているタスクである。使う場面や内容を自分好みにカスタマイズした会話教材作成は、自分ごと化しにくい状況でのモデル会話に比べるとイメトレ効果も高いと思われる。

化的前提が可視化される。

語彙が切り取る範囲

日本語と英語のサイズ表現は、複雑な「多対多」の対応関係にある。この複雑な対応関係をアガサ・クリスティ作品の『スタイルズ荘の怪事件』(矢沢訳)／The Mysterious Affair at Styles からの用例 (7) を用いて示す。

(7) a. やれやれ。広い屋敷に住んでいても快適とは限らないわけだ。
Ah, my friend, one may live in a big house and yet have no comfort.
b. わたしは狭い部屋を見回しながら感嘆の声をあげた。
I exclaimed, as my eye travelled round the small room.
c. おいしげった草むらの小道を突っ切ったほうが、くねくねと続く自動車道を通るより近道になる。
One could save time by taking a narrow path through the long grass, which cut off the detours of the winding drive[11].
d. (…) あなたは書斎の細長い窓のすぐ外のベンチで本を読んでいらしたそうですね。
(…) that you were sitting reading on the bench just outside the long window of the boudoir.

(7a) から分かるように、部屋などが「広い／狭い」と言うとき、英語では big (large) ／ small を使う。英語の wide (broad) ／ narrow は幅に注目する含意が強い。したがって (7c) の narrow は人が歩くための小道 (path) の幅が小さいことを指すだけだが、「狭い」にすると空間の余裕のなさや窮屈さなども含意してしまう。サイズを表現するなら「細い」になるだろう。矢沢訳の「小道」はこれ単体で、舗装されていない細い通り道が浮かぶ。すでに「小」が含まれており、サイズ表現を加えたりしないほうがスッキリしている。

日本語の「太い／細い」は紐状のものの直径のサイズも指し、対応する英語は thick ／ thin である。(7d) の the long window についても、英語と日本語では形状の捉え方が異なる。細長い形状は、英語では幅に注目する narrow ではなく、long で表すことができるが、日本語で「長い窓」と言うと違和感がある。「細長い」(矢沢訳) や「縦長の」のような表現の方がしっくりくる。日本語では、2点間の距離に注目する「長い」も (紐状のものの) 直径に注目する「細い」も、単体ではこの形状の窓を表現するのには使いにくい。

慣用表現と文字通りの意味

(8) は The Hobbit (J. R. R. Tolkien 著) と仏訳版 (F. Ledoux 訳)、および邦訳版 (山本訳) からの例である。山本 (2023) の議論で扱われている箇所のみ引用している。英語の “Good morning!” (8a) は、挨拶であると同時に文字通りの「良い朝」も指せる。その二重性を利用して、” he meant it” は「言葉通り『良い朝だ』と言った」と解釈できる。(8b) の “Bonjour!” も同様である。挨拶と「よい一日」の二重性を生かして、“Et il était sincère.” が「本心から『良い日』と言った」という意味で解釈できる。これに対して、日本語の「おはよう」には同じ二重性がない。(8c) の山本訳は、あえて「グッドモーニング」とすることで二重性を補い、「まさにこの “グッド” という言葉のとおり、気持ちの良い、素敵な朝だった」のように、「グッド」を経由して「よい」につなげる工夫をしている。二重性を補う工夫をしていない (8d) は、前後のつながりがよく分からない文章になっている (山本 , 2023)。なお (8d) 後半は筆者による「直訳」である。「とても緑だった」の不自然さと比べるまでもなく、(8c) の「草の緑が目にしみます」は、巧いなあと感心する。

(8) a. “Good morning!” said Bilbo, and he meant it. The sun was shining, and the grass was very green.
b. “Bonjour!” dit Bilbo. Et il était sincère. Le soleil brillait et l’herbe était très verte.
c. 「やあ、グッドモーニング」ビルボは声をかけました。まさにこの “グッド” と言う言葉のとおり、気持ちよい、とても素敵な朝でした。お日さまがキラキラと輝き、草の緑が目にしみます。
d. 「おはよう」とビルボは言った。そして彼はそれを意味した。太陽は輝き、草はとても緑だった。

11 「くねくねと続く自動車道」は、個人的に若干ひっかかりを覚えた。この違和感を分解すれば、筆者が「自動車道」と聞いてまず浮かぶのが高速道路だからだろう。「自動車道」という単語は、筆者はほぼ「東北自動車道」などのつながりでしか聞いたことがない。「自動車道」から喚起されるイメージと「くねくねと続く」がしっくりこないのである。もちろん、drive (または driveway) は高速道路ではなく、家に続く (車庫に入るまで) 私有の道路のことであり、くねくねしていても普通である。念のためつけ加えると「誤訳」と言いたいわけではもちろんない。ここでは立ち入らないが、山本 (2023) の翻訳論は非常に興味深い。

文化的前提

語の選択には、文化的前提が隠れていることもある。(9) は L.M. Montgomery の *Anne of the Green Gables* の一場面である。居間の宗教画に心を奪われていた Anne は、たしなめる Marilla に対し、絵の中の1人の子どもと自分を重ね、想像の中のキリストのふるまいを自分ごとのように語る。Marilla が、キリストについて、「馴れ馴れしく・身近な事柄のように」(familiarly) 話すことは irreverent (尊敬をかくこと) だと叱る箇所が (9) である。

(9) "Anne," said Marilla, wondering why she had not broken into this speech long before, "you shouldn't talk that way. It's irreverent–positively irreverent."
Anne's eyes marveled.
"Why, I felt just as reverent as could be. I'm sure I didn't mean to be irreverent."
"Well I don't suppose you did–but it doesn't sound right to talk so familiarly about such things…"

山本 (2023) によれば、irreverent という語は rude や not respectful enough とは違って日常的な言葉ではなく、より文体的・宗教的な含みが強い。当時のキリスト教文化では、神についてみだりに口にしてはいけないという戒律が子どもにも教え込まれており、Marilla にとって、irreverent は戒律を教わったときのそのままの言葉だと言う。暗にこめられたこのキリスト教文化の前提は、単に「尊敬が足りないわよ」「不遜だわ」と訳すだけでは、日本人には見えにくい。以下の (10) は、こうした文脈を明示的に示し、「読者が [暗意を] 読み取るという原作の構造を再現することは諦めたものの、そこで意味されていることはきちんと伝えよう」と意図したバージョンである (山本, 2023: 244)。

(10)「それは不遜なことよ」と、マリラは小さいころ教会で教わった言葉を思い出しながら言った。

このように表現の選択には、それぞれの言語の構造だけでなく文化的前提も関わる。これも、どちらか一方の言語で読書をしているだけでは意識されにくいように思われる。上で挙げた言語構造に関する違いも含めて、翻訳書を読む、あるいは外国語で書かれた原著を読む場合は、その外国語と母語を比較対照するモードになりやすい[12]。いずれにも、二つの言語を行き来する過程が内在しているからだ。

とはいえ (少し横道にそれるが)、最初に述べたように、同じ母語を使う話者同士なら、発信側が意図した意味と受け手側が解釈した意味が必ず一致すると想定するのは「恒常仮定」であり (2節)、違う人間である以上、程度の差はあれ「ズレ」はある。例として、政治学者が PTA 会長になり、任期前に「会長の方針」を確認したいと呼び出され、次々と質問を投げかけられたときの心の反応 (岡田 , 2022:48-49) を (11) に示す。ここで取り上げられている質問を解釈できるかどうかは、PTA 活動に保護者として関わったことがあるか、このとある小学校の PTA と同様のローカル・ルールになじみがあるかなど、個人のそれまでの経験知によって左右される。詰め寄られる会長同様、筆者も全く解釈できなかった。日本語は全て分かるが、「ポイント」がそもそも分からないし、「3、4年の人たちも仕事をやらなくなっちゃう」とのつながりも、「補欠を増やす」と何がまずいのかも「さっぱりわからない」のである。

(11) まだ何も始まっていない PTA 活動について、「もう保護者平均14ポイントも取ってるから、5、6年生のママたちだけじゃなくて、3、4年の人たちも仕事やらなくなっちゃうのに、どうして役員の補欠を10人も増やしたんですか？ (…)」なんて尋ねられても、こっちはいったいそれの何が不都合で、何がどうなる不安で、どうしてこの人たちがこんなに強く負のオーラを出しているかがさっぱりわからない。

このように、母語話者どうしでも、前提や背景を共有していない場合は、言葉は意図通りには伝わらないこともある。話を戻すと、母語だけの場合に比べると、異なる言語が関わる場合は、文化的前提が違う可能性を想定しやすく、ずれに気づきやすい。言語間の比較対照という視点を通すことで、その背景にある価値観や常識が可視化されやすいのである。

12 注 (11) も参照。

目標志向行為と好奇心駆動型探索

こうした比較からの気づきは、その外国語を自分が使う技能の向上には直結しない（かもしれない）。「使えるようになる」ための学習・練習は、望む効果／効用が得やすい（と思われる）アプローチを実行する目標志向行為であり、好奇心駆動型探索とは求めるもの／得られる可能性があるものが異なる。「使えるようになる」ための学習の場合、実際に自分が使っている場面を想定して、どのように使える状態でありたいのかが具体的にイメージできているほど、的を射た行動計画を設定しやすく、成長実感も持ちやすい（嬉しい）と思う。

さらに言うと、物語を「読む」というのは、ストーリーを楽しむという目標を志向した行為であり、読んでいる最中は、ここで見てきたような「細部」には気づかないか、気づいても流してしまうと思われる[13]。細部が気になるという好奇心に駆られて、実際に探索行動を選択するかどうかは、上で述べた行為コストに加えて、並行して行っている目標志向行為との天秤にもかけられると言える。

実は、この節をまとめている途中で『赤毛のアン』（松本侑子訳，2019）を読んだ。上で見た（10）の箇所の翻訳が気になったからだが、Kindle がなかったら、読んで確認するという探索行動は選択しなかっただろう。

確認中、眺めていると訳註が多いことに気づいた。註に飛びながら、紙の本と比べて註と本文の行き来が楽だと気づく。テクノロジーが探索コストを下げる例がまた見つかったなどと思いながら、結局、ストーリー展開が気になって（註にも感心しつつ）1冊読み通すことになった。

ストーリーを楽しんでいる間、アンが暗誦する『乙女の誓い』についての註の詳しさが目を引いた。註の最後に「ただし自費出版の詩をアンが読めたかどうかは不明」とあるのを見て、訳註というより研究結果のようだと感じた。が、それはいったん棚上げして読み終える。読了後スクロールすると、8ページにわたる「主な参考文献」があり、訳註は「訳者によるノート――『赤毛のアン』の謎解き――」と題されている。「訳者あとがき」を見ると、実際に「研究」だった。

この「訳者あとがき」にもとづいて、訳者松本侑子の好奇心が長年の探索行動をへて研究成果につながった過程をまとめてみよう。14歳で村岡花子訳『赤毛のアン』に魅了され、繰り返し愛読し続けた松本は、自ら翻訳することになって原書を精読し、古風な詩句や芝居の台詞など、多数の引用が織り込まれていることに気づく。そこから「これはどこから来た言葉なのか」という出典探しが始まった。インターネット以前には海外から引用句辞典を取り寄せ、ハーバード大学図書館や英国図書館にも出向く。パソコン通信でシェイクスピア全集を入手し、英米文学や聖書の CD-ROM も集める。古書店で入手した古い詩集を一頁ずつスキャンしてテキスト化も行う。「出典が見つかるたびに心がおどる」探索を続け、その成果が世界初の註釈付『赤毛のアン』へと結実した。その後も原書の精読と現地調査を重ね、2000年の旧版から2019年の新版へと研究を深めていく（松本侑子訳『赤毛のアン』「訳者あとがき」より）。

注目したいのは、松本は、最初から「研究をしよう」としていたわけではないという点だ。まず作品愛があり、作品で描かれている世界を理解したいという好奇心があった。愛読を続けているうちに原書に出会い、英語表現を理解したいという好奇心・内発的な欲求が生まれ、それに突き動かされた探索が研究成果につながる。「知りたい」という好奇心、そして「見つかるたびに心がおどる」という好奇心の充足が、探索コストの大きさを上回ったわけである。

探索コストが高いと言ったが、テクノロジー面に注目すると、パソコン通信、フロッピーディスク、CD-ROM、スキャナ、OCR といった当時の新技術を総動員している。これらが使えず、海外と郵送でやりとりしたり自分で出向くしかなかったとしたら、と想像すると、テクノロジーによる探索コストの軽減は、探索行動の選択・実行を促す大きな要因になると言える。

5 おわりに

本稿では、外国語を学ぶこと・外国語に触れることについて、母語とは異なる言語の音や語彙、文法、表現、そしてその背後にある文化的前提に触れ、自分が無意識のうちに「当たり前」としていたものに気づく機会という側面に注目した。外国語に触れると、自分にとって当たり前だった世界の切り分け方が揺さぶられる。そこに「なぜだろう」「面白い」という好奇心が生まれる。その好奇心を追いかけてみると、思いがけ

13 院生時代の言語の用例集めを思い出す。用例を探していると「読む」モードに入ってしまう。そのときは潔く用例探しを諦めて最後まで読んでから、用例探しを再開していた。

ないところまで行くことがある。これは外国語に限った話ではない。到達点があらかじめ決まっていない好奇心駆動型の探索だからこそ、当初は予想もしなかった発見に出会うことがある。外国語を学ぶことや読書などを通じて外国語に触れることは、そうした探索を促す好奇心を生む、身近な機会の一つだと言える。

一方で、何かに好奇心を感じることと、実際に探索行動に移すことの間には、行動コストがある。調べるために多くの時間や労力、場合によっては金銭が必要であれば、「ちょっと気になる」程度の疑問はそのまま消えてしまうことも多いだろう。しかし、デジタル化された資料や検索エンジン、そして生成 AI をはじめとする現在のテクノロジーを活用することで、そのコストは大きく下がる。テクノロジーが好奇心を生み出すわけではないが、「ちょっと気になる」を「ちょっと調べてみる」へと移す敷居は、以前よりもずっと低くなっている。考えてみると、本稿で『赤毛のアン』の訳者のエピソードを書くことになったのも、小さな好奇心がきっかけである。確認したことが使えるかどうかは別にして、電子書籍はすぐに入手できる。「ちょっと見てみよう」と入手したことで、松本氏自身が長年にわたって「知りたい」を追いかけてきた経緯に行き着いた。好奇心駆動型探索について書いていた筆者自身が、「ちょっと気になる」に任せた探索の途中で、その格好の例に出会ったことになる。

好奇心を追いかけたからといって、いつも大きな成果が得られるわけではない。何も見つからないこともあれば、寄り道をしただけで終わることもある。それでも、新しいことを一つ知る、別の問いが生まれる、それまでとは少し違って世界が見えるようになる、といった小さな変化もまた、探索から得られるものだろう。ときには、最初には想像もしなかった大きな発見につながることもある。人間には、分からないものに出会うと、「知りたい」「分かりたい」と感じ、それを探索しようとする性向がある。もちろん、日々さまざまな目標をもち、時間やコストも考えながら行動する私たちが、好奇心だけに任せて行動するわけにはいかない。それでもときには、外国語を学んだり外国語に触れたりする中で（あるいはそれ以外の何かとの出会いの中で）「なんだろう」「面白い」と感じたものを、役に立つかどうかをいったん脇において、少し追いかけてみてはどうだろうか。好奇心を追いかけた先に何があるかは、追いかけてみるまで分からない。それもまた、探索の楽しさなのだと思う。

参考文献

乾敏郎・門脇加江子（2024）『脳の本質：いかにしてヒトは知性を獲得するか』中央公論新社
乾敏郎・阪口豊（2021）『脳の大統一理論：自由エネルギー理論とは何か』岩波書店 .
本多啓（2005）『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会
今井むつみ・秋田喜美（2023）『言語の本質』中央公論新社（中公新書）
町田章（2025）『AI 時代になぜ英語を学ぶのか』文藝春秋（文春新書）
Maslow, A.（1943）A Theory of Human Motivation, Psychological Review, 50（4）, 370-396.
岡田憲治（2022）『政治学者、PTA 会長になる』毎日新聞出版
Slobin, D.（1987） Thinking for Speaking. *Proceedings of the Thirteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society,* 435-445
Slobin, D.（2003） Language and Thought Online: Cognitive Consequences of Linguistic Relativity, in D. Gentner & S. Goldin-Meadow（Eds.）*Language in Mind: Advances in the Study of Language and Thought*, pp. 157-192. Cambridge, MA: MIT Press.
谷口忠大（編）（2024）『記号創発システム論』新曜社
山本史郎（2023）『翻訳論の冒険』東京大学出版会 .
八島智子・久保田真弓（2012）『異文化コミュニケーション論：グローバル・マインドとローカル・アフェクト』松柏社
吉田正俊・田口茂（2025）『行為する意識：エナクティヴィズム入門』青土社

引用文学作品

Christie, A.（1920）*The Mysterious Affair at Styles*. Agatha Christie Ltd（a Chorion company）.
クリスティ、A., 矢沢聖子（訳）（2003）『スタイルズ荘の怪事件』早川書房
Montgomery, L.M.（1908）*Anne of the Green Gables*. L.C. Page & Co. of Boston.
モンゴメリ , L.M., 松本侑子（訳）（2019）『赤毛のアン』文藝春秋（文春文庫）
Galiano, E.（2022）*La Società Segreta dei Salvaparole* [The Secret Society of the Word-Savers] Salani Editore.

ドイツ語から広がる多言語世界



千葉商科大学基盤教育機構　非常勤講師
小松　真帆
KOMATSU Maho

プロフィール

小松真帆（こまつまほ）上智大学大学院文学研究科ドイツ文学専攻博士後期課程単位取得満期退学。翻訳に D･ダムロシュ『世界文学とは何か』（国書刊行会、2011 年）［共訳］、研究報告に「オラトリオ『…そして死者はみな安らかに死んだ…』― V･ヴェルトリープと戦後オーストリアの声」（「オーストリア文学」第 39 号（2023 年））など。

はじめに

新しい言語を学ぶということは、新しい世界と出会うということだ。日本では初めての外国語としてたいてい英語を学ぶことになると思うが、英語を学ぶことによって広がる世界はきわめて新鮮で、自分の生きている世界とかくも違うのかと驚いたのではないだろうか。さらに学習が進むと、英語にはラテン語やフランス語からの語彙が多いと聞いてそれらの２言語に近づこうとした学習者もいるだろう。ひとつの言語からさらに他の新しい言語、そしてさらに…というように、言語への興味は尽きることがない。新しい言語を学ぶことによって驚くべき新しい世界への扉が開かれるからである。

もし言語をきちんと学ぼうとするならば、できる限り基礎をきちんと固めることが重要だ。文法というものは細々とした規則や例外から成り立ち、「覚える」「身につける」を前提としているため敬遠されがちなようだが、堅固な構造を持たない建物は容易に揺らぎ、さらなる階を積み上げることができない。文法とはまさにその堅固な構造である。そのため、さらに先まで学習したいと考えるなら文法を疎かにしないことが肝心だ。とはいえ、面白さがなければ挫けそうになるのも人情である。面白いからこそ「もっと学びたい」というモチベーションが生まれるのであり、その意味で面白さは言語学習において疎かにしてはならない。基礎と面白さの両輪をうまく回しながら学習を進めることが理想である。

1980 ～ 90年代、大学で選べる外国語は主に英語、フランス語、ドイツ語、中国語の4つだった。家族に中国語とフランス語の学習経験者がいたため、自然とドイツ語選択に流れつつあったまさにその時、「ベルリンの壁」が崩壊した。その歴史的意味を当時はまだよく分かっていなかったが、世間にはいわゆるドイツブームのようなものが巻き起こり、私はドイツ語選択を決意した。ドイツ語とはそれ以来の付き合いになるが、なかなか難しい言語でちっとも上達しないという気持ちのままでいる。それでもドイツ語が開いてくれた「多言語世界」への扉を出入りしながら、今でもその面白さに驚嘆し、飽きることなくドイツ語と付き合い続けている。そこで今回は、ドイツ語によって開かれたその魅力をいくつか紹介したいと思う。

1　日本に定着したドイツのもの

日本のドイツ語学習者の数ははっきりしないが、ドイツ語検定（独検）の受検者数を見ると、例えば大学の必修科目で初級文法を週2回で2年ほど学んだレベルに相当する３級受検者の数は、約20年前と比べて半分以下となっている。これには若者世代の人口減少が第一の要因として挙げられるに違いないが、他の言語を学ぶ選択肢が広がったことも要因ではないかと思

う。大学で学べる外国語（特に第二外国語）は今日、韓国語、スペイン語、ロシア語などからも選べるようになっており、どれも人気が高いようだ。ドイツ語履修者が減るのは寂しいような気もするが、言語の選択肢が増えたことは素晴らしい。ドイツ語文学の翻訳出版についても状況は似たようなものであるらしく、今日ではますます多くの言語による作品が日本語に翻訳され、読者を獲得しているようだ。多言語世界が広がっているという事実が何より頼もしい。

さて、学習者数は減少傾向にあっても、世間一般のドイツ文化への関心は決して低くはない。本格的なドイツパンのお店やドイツビールの飲めるビアホールなどがよく話題にのぼる。そんな中、ドイツ語の授業で取り上げると反応がいいのは「バウムクーヘン」と「オクトーバーフェスト」である。

まずは「バウムクーヘン（Baumkuchen）」、木の年輪をかたどった焼き菓子で、「ケーキの王様」とも呼ばれる。日本ではドイツの代表的な焼き菓子と見なされているが、本国においては主にドイツ東部など限定された地域の伝統菓子と考えられている。長く受け継がれてきた道具を使って職人が地元のお店で焼き上げるもので、店頭に並ぶ季節も秋からクリスマスの頃と決まっているらしい。そのため、日本へ来て初めてバウムクーヘンを食べたというドイツ人は多いようだ。日本のバウムクーヘンはふんわり、しっとりとした食感が特徴で、さらに味にも色々なものがあり、コンビニからデパ地下さらには専門店まで広く販売されていて、ドイツ本国の在り方とはかなり異なる。現在ではよく知られるようになってきたようだが、バウムクーヘンが日本へ伝わったのは第一次世界大戦の頃である。ドイツ租借地であった青島で菓子店を営んでいたカール・ユーハイムが、捕虜として連れて来られた日本でバウムクーヘンを焼いたのが最初だという。そのバウムクーヘンが初めて披露されたのは現在「原爆ドーム」と呼ばれている「広島県物産陳列館」で、1919年のことだった。日本にはバウムクーヘンの有名店がいくつもあるが、何といっても元祖はユーハイムだというのはこれが理由である（ちなみにユーハイムは生ケーキも美味しい）。

次に「オクトーバーフェスト（Oktoberfest）」、文字通りに訳せば「十月祭り」。これはドイツ南部バイエルン州の首都ミュンヘンで、通常9月中旬から10月初旬に開催される「世界最大のビール祭り」と言いたいところだが、ドイツ語では「世界最大の民俗祭（Volksfest）」と説明される。この祭りの歴史は古く、1810年10月に、王太子ルートヴィヒ・フォン・バイエルンとテレーゼ・フォン・ザクセン＝ヒルトブルクハウゼンの結婚を祝うために開催された5日間の競馬大会に端を発している。この競馬大会の会場となった広大な原っぱに（「テレージエンヴィーゼ（Theresienwiese ＝テレーゼの草地）」、約42万㎡の空き地）、今日ではビール醸造所ごとの巨大テントやメインステージ、子供のための移動遊園地などが設置され、大量のビールとそれに合う食事が提供される。2026年の第191回オクトーバーフェストは、16日にわたる開催期間中、来場者740万人、消費されたビールの量670万リットルという規模だ。そして、この名称は「ドイツビールの祭り」の代名詞として世界各地へ伝播した。日本では、本家から公式認定を受けているという「日本オクトーバーフェスト実行委員会」によって2003年に横浜赤レンガ倉庫前の広場で初開催され、その後会場を変えながら今日まで続いており、春（ＧＷ頃）と秋（本来の会期）の年2回の開催が定着している。その他にも同名のビール祭りは日本各地において年々増え続けており、大変な人気を博しているようだ。

以上「バウムクーヘン」も「オクトーバーフェスト」も、ドイツでの在り方とは異なる様相を呈してはいるものの、日独交流の懸け橋として立派な役割を果たしていると言えるだろう。そして日本でおなじみの「ドイツのもの」から本場のドイツ語世界を探ってみることに面白さがある。この辺りからドイツ語文化に親しみを持ち、いずれは恒常的なドイツ語学習へと進んでもらいたいと願いながら、授業であれやこれやを紹介している。

2　ドイツ語から開かれるスラヴ語世界

ドイツはヨーロッパの中ほどに位置している。そしてヨーロッパでは古くから人々が各地へ移住していたため、現在ドイツ語を話す地域にお隣のスラヴ語圏から来た人たちが多いことはごく自然な事態である（逆も同じ）。同じインド・ヨーロッパ語族とはいえ、ゲルマン語派のドイツ語とスラヴ語派の言語（ロシア語、

ウクライナ語、ポーランド語、チェコ語など）は語彙や文法において互いに異なる（ちなみにハンガリー語はウラル語族）。それでも長い年月を経ながら両者は互いに影響を与え合ってきた。ここではドイツ語圏でおなじみのお菓子がお隣のスラヴ語圏では何と呼ばれているのか、その由来とともに追ってみたい。以下に挙げるお菓子は、実際にオーストリア（や南ドイツ）では日常的にお目にかかる類のものである。

ひとつめは「パラチンケン（Palatschinken）」。これはドイツ語圏であるオーストリア、特にウィーンのお菓子として知られている。フランスのクレープのようなものだが、カッテージチーズとレーズンをくるくると巻いて粉砂糖をかけたものが定番で、デザートや軽食として食される。この名称はそもそもドイツ語っぽくないため面白くて気に入っていたのだが、スラヴ語圏でも似たような名称で呼ばれているようだ。もとはラテン語の「プラチェンタ」に由来し、チェコ語・スロヴァキア語・セルビア＝クロアチア語、ブルガリア語・アルバニア語では「パラチンカ」「パラチンキ」などと呼ばれている。ルーマニアで「平たい菓子」という意味の「プラチンタ」がハンガリー経由で「パラチンタ」となりオーストリアに伝わったとも、チェコを経由して伝わったとも言われている（Duden のオーストリア語辞書では「ルーマニア語・ハンガリー語由来」とある）。ちなみにロシア語では似たようなクレープのことを「ブリヌイ」と呼ぶのだが、先に紹介したスラヴ語派の言語には類似性が見られない。ところが、エストニア語（ウラル語族）「ブリーニド」、ラトビア語（インド・ヨーロッパ語族バルト語派）「ブリナス」、リトアニア語（バルト語派）「ブリナイ」はロシア語の影響下にあるようだ。ちなみにスラヴ語派のポーランド語では「ナレシニキ」のように全く違うのはなぜだろう。

ふたつめの「シュトゥルーデル（Strudel）」もオーストリア・南ドイツのお菓子として知られている。何層もの薄いパイ生地で具材をぐるぐる巻いてオーブンで焼いたもの。リンゴとレーズンを煮たものを巻いた「アプフェルシュトゥルーデル（Apfelstrudel）」が代表格だが、カッテージチーズ、ナッツやけしの実をそれぞれ単品で巻いたものもある（ひき肉やホウレン草などを巻いた食事タイプもある）。このお菓子はハンガリー語で「アルマーシュ・ズトルーデル」（「アルマーシュ・レーテシュ」とも）、チェコ語で「ヤブレッチュニィ・シュトゥルーデル」（「ヤブレッチュニィ・ザーヴィン」とも）など「リンゴ」の部分は異なるが「シュトゥルーデル」自体はほぼそのまま。この語はそもそもドイツ語で「渦状のもの」、「ねじれた巻貝状の形」を指す。このお菓子の断面はまさしく渦巻き状になっているため納得の名称だ。だがこの「シュトゥルーデル」、もともとトルコ伝来のお菓子なのだという。1541年、オスマン帝国軍がハンガリーのブダを陥落させた際にこのお菓子がもたらされ、その後ハンガリー経由でオーストリアに伝えられたと言われている。サイズは違うが、確かに薄いパイ生地はバクラヴァを思わせる（バクラヴァ自体は中近東から中央アジアにみられるお菓子）。Duden のオーストリア語辞書ではこれも「ルーマニア語・ハンガリー語由来」とある。

以上のように名称と由来を追ってみると、スラヴ語圏をぐっと身近に感じることができる。そして、オーストリアとスラヴ語圏のつながりを考えるうえで、いわゆるハプスブルク帝国の存在は大きい。帝国の首都ウィーンを中心に、今日のチェコ、スロヴァキア、ポーランド、ウクライナ、ハンガリー、ルーマニア、セルビア、クロアチア、スロヴェニアなど広大な領土を支配下に置いていた。多民族（多言語）ゆえに中央集権の基盤が安定せず、民族独立運動が盛んになるとその基盤はさらに揺らいだが、20世紀まで国家としての体裁を何とか保ってきた。この帝国における多言語間の交流の中で、お菓子そのものも名称も各地に伝わり、そこで定着していったのだろうと想像できる。また、中でも東欧地域には、各地での迫害から逃れてきた素朴で敬虔な東方ユダヤ人（アシュケナージ）の文化が栄えた。イディッシュ語と呼ばれる混成語と居住地域の言語を使用して暮らしていた彼らは、オーストリア帝国領内にあっては首都ウィーンを中心とするドイツ語文化も積極的に受け入れていた。そして彼らの移住とともに、イディッシュ語に浸透したドイツ語の語彙は世界各地に広がっていった。「シュトゥルーデル」も海を越え、今日ではヘブライ語やアメリカ英語にも定着している。

3 小説の中の多言語世界

さて次は、小説における他言語的な表記について取

り上げてみたい。日本ではまだ翻訳が出ていないのだが、ヴラジーミル・ヴェルトリープ（母語はロシア語）というドイツ語作家の作品における他言語的な面白さを紹介する。彼は幼い頃両親に連れられ故郷の町レニングラードを後にして、それから約10年のあいだ第二の故国を求めて親子でイスラエル、アメリカ、ヨーロッパ各地をさまよった末、最終的にオーストリアのウィーンで暮らすことになった。移民家族でよくあると言われることだが、英語やその土地の言語を素早く身に付けるのは子供である。ヴェルトリープも同様に、新しい言語の習得が不得意な両親に代わって移民局での事務手続きの通訳や書類の翻訳を担うことになった。10年にわたる放浪を描いた小説にはもちろん様々な言語や文化が表出するが、それらは執筆言語であるドイツ語で表現されている。読者はドイツ語を理解できることが前提であるため、身近なオランダ語やイタリア語、英語は作品において原語のまま表記されることがほとんどだが、ヘブライ語には様々な工夫が施されている。例えばオーストリアでのエピソードで、イスラエルから移住してきた子供たちが、「聖なる言語」ヘブライ語での神への祈りの一部をドイツ語に置き換えて茶化す場面がある。ヘブライ文字による表記ではほとんどの読者にはおそらく理解することが難しいため、ここではドイツ語の発音規則に基づいたラテン文字による音声表記が採用されている。ドイツ語を経由してヘブライ語に近づくという、読者にとって興味深い経験だ。また、オーストリアを走る列車の車内放送で流れる英語のアナウンスにおいても、ヴェルトリープはドイツ語のアクセントを聞き逃さない。リンツに到着することを告げるアナウンスはこんな具合だ「Läjdieß änd Schäntlmään, wie will schoatli bi erreiwing et Linz.（レイディース・エント・シェントルメエーン・ヴィー・ヴィル・ショアトリィ・ビ・エライヴィンク・エト・リンツ）」。ヘブライ語の時と同じように、ドイツ語の発音規則に基づいた音声表記でつづられた英語の文は、ドイツ語アクセントの英語を知る者にとっては、にやりとせずにはいられない一文だ（人のことは言えないが）。

幼い頃に出国したためにソ連時代の記憶はヴェルトリープ自身にはほとんどないようだ。だが、ベラルーシやウクライナに暮らしていた親戚の中で語り継がれてきたさまざまな記憶が彼の作品の背景となっている。その大半は、独ソ戦が展開された一帯に実在する場所であり、第二次世界大戦中の恐怖の記憶、「ユダヤ」であるがゆえに差別され脅迫され殺害された一族の記憶だ。また、レニングラードで少女時代を過ごしていた彼の母親は、ドイツ軍によって包囲されたレニングラードの様子をヴェルトリープに語って聞かせた。それを彼はドイツ語で表現するのである。その描写は即物的でありながら人々に寄り添う温かみを内包し、この歴史をドイツ語の物語として読者に届ける意味をヴェルトリープが重視していることは間違いない。母語あるいは家族間での使用言語と異なる言語で執筆することはもちろん容易なことではないが、これを成し遂げている作家はえてして言語そのものへの関心が高く、まさに多言語の仲介者といった趣がある。ヴェルトリープは自身の多言語的な体験をドイツ語小説として書くことで、ドイツ語そのものを豊かにしていると言える。

ところで、ドイツには「シャミッソー賞」という文学賞が存在する。賞の名前の由来となったアーデルベルト・フォン・シャミッソーは1781年にフランスで生まれたが、大革命により幼い頃に家族とともにベルリンへ亡命した。軍人として対ナポレオン戦争に参加したのち、ベルリン大学で自然科学の研究を始め、1814年に『ペーター・シュレミールの不思議な物語』という作品を発表、自然科学研究と並行して作家活動を開始した。大革命から対ナポレオン戦争、さらに自由主義運動や民族独立運動が高まる1830年代にかけて、ドイツ（国家として統一するのはまだ先）とフランスの関係が困難な時期にあって、双方の仲介役として活躍したとされる。ドイツのボッシュ財団は1985年、このシャミッソーの名を冠した賞を設立し、ドイツ語を母語としないながらもドイツ語で文学作品を執筆する作家にこの賞を贈ることとなった。途中2012年に定義の見直しが行われ、ドイツ語圏の現代文学に見事な言語芸術的影響を与えた作家が対象となるというように修正が施されたのち、2017年を最後にボッシュ財団がこの賞の終了を宣言したものの、別の団体により引き続き継続されて、今日まで約40年にわたりドイツ語文学における新しい多言語＝多文化世界の影響を称えてきた。多和田葉子は1996年、上記のヴェルトリープも2001年にこの賞を授けられている。過去の受賞者リストはそのまま、ドイツ語文学と多言語

世界の豊かな出会いを称えていると言えるだろう。

4 ドイツ映画

最後に、最近のドイツ映画をトルコとの関連から取り上げたい。だがその前に、ドイツとトルコの関係について少し触れておこう。第二次世界大戦の戦後復興の過程において、ドイツ（西ドイツ）では1960年代から労働力不足による移民受け入れ政策が採られ、南欧やトルコから積極的に労働移民を受け入れた。彼らは国家間で取り決められた協定に基づき、本来ならば期限付きのガストアルバイター（外国人労働者）としてドイツへ入国したのだが、中でもトルコ系移民は次第に家族を呼び寄せて、契約終了後もドイツに住み続けることを選び、ドイツ各地でトルコ系コミュニティを生み出した。残念ながらその人たちの全員がドイツ社会への統合に成功したと言えるわけではないが、現在のドイツ社会でトルコ系住民は重要な地位を占めている（かつてドイツのファストフードと言えばどんな街角にもあるソーセージスタンドだったが、今日ではトルコ系移民によってもたらされたケバブ店が双璧を成す。本格的でボリューミィ、野菜もたっぷり採れるので大人気となり、ベルリンには長い行列のできるケバブの名店がいくつもある。ちなみにドイツ語でケバブは「ドネル（Döner）」）。

映画との関連では、30代にして世界三大映画祭主要賞の受賞を果たし、現在でも精力的に映画を撮り続けているファティ・アキン監督を紹介したい。1960年代に移民としてドイツへ渡った両親のもとハンブルクで生まれた彼の作品は、トルコとドイツの共生をめぐる問題をテーマにしたものが秀逸だが、これまでにオスマン帝国軍によるアルメニア人虐殺や、ドイツの移民排斥主義者が起こしたテロ事件といった素材にも果敢に挑んでおり、最新作ではついにナチ・ドイツ時代のある家族を中心に据えるなど、常に意欲的な作品を作り続けている。今年2026年に日本公開されたこの最新作『白パンと独裁者』（原題は『アムルム（Amrum）』）では、ドイツ北部の北フリジア諸島に属する「アムルム」という島が舞台となり、そこで話されている北フリジア語が島民の言葉として採用されている。フリジア諸島はオランダ北西部とドイツ北部にまたがり、主にそこで話されるフリジア語の話者数は40万人ほどとされている（北フリジア語はドイツのシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の北海沿岸で話されており、話者は１万人未満）。この言語は英語に似た特徴を残しつつ、オランダ語との類似点も多いという興味深い言語だが、映画では北フリジア語とドイツ語を話す島民と、戦禍を逃れてハンブルクから移ってきた主人公の一家の対立が描かれる。言語的にも政治的にも、また生きていくうえでも島民とは異なる立場にあるために、島民と衝突し、破綻し、再び立ち上がろうとする家族の姿が、この島の美しくも容赦ない自然を背景に映し出される。ドイツ語をベースにしながらも、多言語的な要素が豊富に取り込まれているアキン監督の作品世界はドイツ映画の新しい側面を提示している。

トルコとの関連でもうひとつ紹介したいのは『アルマンヤ―ようこそドイツへ（Almanya―Willkommen in Deutschland）』（2011年）という作品。「アルマンヤ」はトルコ語で「ドイツ」という国名を指す語であり、邦題では『おじいちゃんの里帰り』（日本公開2013年）。ガストアルバイターとしてトルコのアナトリアにある小さな村からやって来たおじいちゃんはいまやドイツで年金暮らしとなり、成長した４人の子供たちも家庭を持つなりしてすっかりドイツに馴染んでいる。ドイツ生まれの末子アリはドイツ人女性と結婚し、息子チェンクは小学校に通っているが、そのチェンクがある日「自分はドイツ人なのか、トルコ人なのか」という問題を抱えて学校から帰って来る。その頃おじいちゃんは皆に内緒でアナトリアに小さな家を買ったと報せ、ドイツ国籍を取得して意気揚々のおばあちゃんを尻目に、買った家を見に家族みんなでトルコへ旅行する計画をもち上げるのだが、家族皆が大反対。それぞれが抱える問題は家族の中でどのように理解し合えるのか、祖父母の故郷であるトルコの村で子供たちや孫たちは何を見出すのか、監督のヤセミン・サムデレリと妹の実体験を基に、先の気になるストーリーがテンポよく展開されていく。興味深いのは、ドイツへ来たばかりの母子がドイツ人の暮らしをはじめは不潔で不可解と感じるが、しばらくドイツで暮らしたのちにトルコの村へ帰ってみると、かつて慣れ親しんでいたはずのそこでの暮らしにはもはや戻ることはできないと、言葉を発さずとも家族皆で感じる取る場面だ。先進的とか後進的とかいうことばかりではなく、誰に

とってもいま暮らしているところが自分の場所なのだというメッセージである。また、言語的に興味深いのは、トルコからドイツへ来たばかりの家族が不可解なドイツ語と格闘する場面、そして先に言語を習得してドイツ文化に馴染む子供たちを理解できずに両親が断絶を感じる場面である。ドイツ語とトルコ語の切り替えに関しては映画ならではの工夫がなされている。家族とは、故郷とは、自分とは何か、映画の最終部に挿入されるサルマン・ラシュディの一節が作品を省察的な次元へと引き上げている。映画の中ではっきりとした答えは提示されないが、自分がいま置かれている場所で、受け継がれた生としっかり向かい合おうという気持ちが湧いてくる、そんな作品だ。

おわりに

多言語世界への扉を開いてくれるのは、もちろんドイツ語に限ったことではない。どんな言語もそこから他の多くの言語へと開かれているものだ。政治的に経済的に異なる言語の侵略を受け、支配され、沈黙させられてきたという悲劇的な歴史を含め、言語というものは何らかの形で他の多くの言語の影響を受けている。

新しい言語を学ぶということは、新しい世界と出会うということだ。その言語の背景にはそれまで自分が過ごしてきた日々の中では想像も及ばなかった歴史や慣習、文化や暮らしが存在する。それらと出会うことによって、柔軟な学習者はものの見方を組み替えて新しい視野を手に入れるかもしれない。当然だと考えていた常識はただの偏見だったのだと気づくかもしれない。ものの見方や生き方自体が変わることだってあるかもしれない。

歴史の荒波の中で、言語はぶつかり合い、形を変えてきた。新しい言語、さらに多言語の世界に向き合うということは、歴史と文化の織りなす豊かな海原に漕ぎ出ていくということだ。世界には３千から７千もの言語が存在すると言われている。それぞれのやり方でぜひ多言語世界の面白さを発見してほしい。

世界最古のアイドル、トロイアのヘレネー再考



千葉商科大学基盤教育機構　商経学部
非常勤講師
橋本　克巳
HASHIMOTO Katsumi

プロフィール
1985 年　早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学
2024 年　千葉商科大学名誉教授

主要訳書：ナダール『私は写真家である』（大野多加志との共編訳）、筑摩書房、1990 年。ジュリー・マネ『印象派の人びと』、中央公論社、1990 年。ティフェーニュ・ド・ラ・ロッシュ『ガリジェーヌ物語またはダンカンの覚書』（野沢協との共訳）、法政大学出版局「ユートピア叢書」『啓蒙のユートピア 2』、2008 年。

はじめに

「傾国の美女は誰か」と問われれば、現代人の多くは楊貴妃やクレオパトラの名を挙げるだろう。しかし、彼女たちよりも古く、圧倒的な影響力をもって語り継がれてきた「最古のインフルエンサー」が古代ギリシアに存在する。スパルタ王妃ヘレネーである。

本稿は、神話学者リンダ・リー・クライダーのヘレネー論をはじめ、考古学者ベタニー・ヒューズ、古典学者ルビー・ブロンデル、英文学者ローリー・マグアイアら21世紀初頭の女性研究者によるモノグラフに依拠する。彼女たちの共通課題は、ホメロス以降2500年にわたり「男性のペン」によって書き継がれてきたヘレネー像――淫乱な悪女か、かよわい犠牲者か――を解体し、その背後に隠された知性と権力の実像を掬い取ることにあった。

ヘレネーの特異性は出生時から群を抜いている。彼女は、白鳥に変身した最高神ゼウスとスパルタ王妃レダの交わりで産まれた「卵」から孵化したとされる[1]。この誕生譚は、彼女が神々の意図を帯びて地上に遣わされた半神半人の存在であったことを物語る。叙事詩『キュプリア』断片によれば、彼女の誕生は、ゼウスが立案した「増えすぎた人類の人口削減計画」の要であった[2]。ゼウスは大地ガイアの重荷を軽くするため、一国の王女の姿を借りた「最も美しい大量破壊兵器」を世に放ち、英雄たちを殺し合わせる口実としたのである。少女時代にはその美貌ゆえ英雄テセウスに誘拐されるなど[3]、彼女の人生は常に男たちの欲望と暴力の渦中にあった。

スパルタ王妃ヘレネーの存在が世界を二分する大戦へと発展した契機が「パリスの審判」である。不和の女神エリスが投げ込んだ黄金の林檎をめぐる争いで、トロイア王子パリスはアプロディテが提示した「世界で最も美しい女」を選んだ。彼は政治的野心や軍功ではなく、抗いがたいエロスの衝動に従った。パリスはスパルタ宮廷を訪れ、王メネラオスから神聖な「クセニア（客人の歓待）」の掟に従い手厚く迎えられたが、この掟を破り、メネラオスの留守中に莫大な財宝と最愛の妻ヘレネーを奪い去った。ヘレネーは幼い娘ヘルミオネを置き去りにして遁走し、ギリシア全土を震撼させた。かつての求婚者たちが立てた「テュンダレオスの誓い」に基づき、アガメムノンを総大将とする連合軍が結集。「ひとりの女の美貌が千隻の船を出航させる」[4]こととなった。

古代ギリシアにおいて、女性の美とは常に恐怖と隣り合わせであった。最初の女性パンドラが「美しき災い（καλὸν κακόν/kalon kakon）」[5]として創造されたように、ヘレネーもまたその系譜の頂点に立つ。後世のイブへと連なる「宿命の女（ファム・ファタル）」の原型であるが、その非難の背後には古代から続くミ

1　アポロドーロス『文庫』III.10.7（高津訳 1994 年）。Perseus 所収 Frazer 訳（1921 年）参照。
2　『キュプリア』断片 1（Davies 1989: 33; Hughes 2005: Intro, n.4）。呉茂一『ギリシア神話（下）』206 頁参照。
3　アポロドーロス『文庫』摘要 1.23。
4　クリストファー・マーロウ『フォースタス博士』の台詞に由来（Maguire 2009 参照）。
5　ヘシオドス『神統記』585、『仕事と日』57-58（廣川訳 2022 年、松平訳 1993 年）。

ソジニー（女性嫌悪）の構造が横たわっている。本稿は、神話と歴史、フェミニズム批評の重層する地平から、欲望の写し鏡とされてきたヘレネーの実像と、青銅器時代の政治家としての彼女の姿を再発見する試みである。

I. 武装としての美

ルネサンスから19世紀のラファエル前派、ハリウッド映画に至るまで、西洋の芸術が描き続けてきたヘレネー像は「浮気女」か「かよわい悲劇のヒロイン」に大別される。ローリー・マグアイアが指摘するように、彼女はつねに「受動的な景品（passive prize）」[6]であり、男たちの欲望や恐怖を投影する「空白のスクリーン」[7]に過ぎなかった。しかし、ベタニー・ヒューズらが最新の考古学的知見から描き出した後期青銅器時代（ミケーネ文明最盛期）のヘレネーの実像は、こうした幻想を覆す。青銅器時代のスパルタにおいて、彼女は奪われるだけの「トロフィー」ではなく、権力闘争を生き抜く実務的で手ごわい「政治家」であった。

はじめに指摘したいのは、「ヘレネーという絶対的な王位継承権を持つ女と結婚したからこそ、メネラオスはスパルタの共同統治者になれた」[8]点である。権力の源泉は彼女の血脈にあり、夫メネラオスは「政治的配偶者」に過ぎなかった。次に指摘したいのは、彼女の「美しさ」は単なる外見的魅力ではないということだ。古代ギリシアの「カッリステイア（美の競技）」[9]が示す通り、完璧な外貌は「神の恩寵の証」であり、宗教的・政治的リーダーシップの絶対条件であった。ヘレネーの美貌とは、民衆をひれ伏させ他国の王を畏怖させる「神聖な政治的武装」であった。

ヒューズの研究から浮かび上がるヘレネーの姿は威圧感に満ちている。オリーブオイルを塗り込み、数百枚の黄金ディスクを縫い付けたリネンをまとい、顔には真紅の幾何学紋様を描き、太く隈取られた目は感情を排した仮面と化していた[10]。それは非人間的で無機質な「歩く黄金の偶像」である。みずからの美を強固な鎧として着こなし、神の威光を放ちながら政治の最前線に立っていた「生きた権力機構」――これこそがヘレネーの真の姿であった。ルネサンス絵画が描く楚々とした手弱女（たおやめ）の姿はそこにはない。

II. エロスの引力と地政学的亡命

武装した権力機構としてスパルタに君臨していたヘレネーが、なぜすべてを捨てて異国の王子と出奔したのか。その謎を解く鍵はエロスの恐るべき本質にある。

スパルタ宮廷に到着したトロイア王子パリスは、アプロディテから授かった「マクロシュネ（machlosyne）」という魔術的オーラを放っていた。古代において神が与える美や魅力とは、人間の理性を麻痺させる「暴力」でもあった。古代ギリシア語におけるエロスは「リュシメレース（四肢を解き放ち打ち砕くもの）」、「タケーロス（融解させるもの）」と表される。ヘレネーがいかに強固な政治的武装をまとっていようとも、パリスの眼差しはその四肢から理性の力を奪い去った[11]。それはポリスの内部に野生のカオスを招き入れるバタイユ的な意味の「至高の蕩尽」であった。

しかし、ヘレネーは無力に拉致されたわけではない。ヒューズが提示するのは、この出奔が愛欲の逃避行ではなく、冷徹な「地政学的亡命」、すなわち「より巨大な権力への主体的な乗り換え」であったという仮説である。青銅器時代のスパルタが粗野な軍事国家であったのに対し、トロイアはダーダネルス海峡を支配し東方のアナトリアやヒッタイトとも結ばれた要衝・コスモポリタン都市であった。発掘された線文字Ｂ粘土板によれば、ミケーネ文明の王妃は羊毛産業や香油生産を管理する国家的な「最高経営責任者」であったという。ヘレネーは、一人娘ヘルミオネをスパルタの跡取りとして残しつつ、アドラステやアイトラら[12]腹心の侍女と莫大な財宝を周到に船に積み込んで渡海した。これは新世界帝国の中心でみずからの宮廷を大規模に再構築しようとする政治的アクションとも解釈できる。

ヘレネーが後世「無力な犠牲者」や「悪女」というクリシェに押し込められた決定的な転換点はホメロスの叙事詩にある。リンダ・リー・クライダーが看破したように、ヘレネーは本来、豊穣を司る地母神であったが、ホメロスは『イリアス』の男性中心のドラマを成立させるため、彼女から神性を剥奪し「色褪せた女神」

6 Maguire（2009）, ch. 2.
7 *ibid.*
8 Hughes（2005）, ch. 10.
9 Hughes, *op.cit.*, ch. 16.
10 ミケーネ文明期の壁画に見られる装飾・化粧法に準拠（Hughes, *op.cit.*, ch. 10）。
11 Hughes, *op.cit.*, ch. 16, 21.
12 ホメロス『イリアス』III.144、アポロドーロス『文庫』摘要 1.23。

「人間の女」へと格下げした[13]。これに対し、紀元前7世紀の女流詩人サッポーは、詩（断片16）において「最も美しいものとは『その人が恋い焦がれるもの』だ」と高らかに宣言し、自分の意志でアプロディテに導かれ海を渡ったヘレネーを革命的ヒロインとして讃えた[14]。かくして、能動的な生命力を取り戻した女王はトロイアへと乗り出したのである。

III. トロイア戦争の真の構造

エーゲ海を渡ったヘレネーという起爆剤が堅牢な城壁内に持ち込まれた瞬間、トロイアの比類無き繁栄は暗転する。この大戦の背後には、神話的企てと人間の剥き出しの欲望という二重の層がある。

神話的次元において、この戦争がゼウスによる「人口削減計画」であったことは先述した通りである。ヘレネーという導火線に火がついた時点で、神々と人間が交わる英雄時代の終焉は決定づけられていた[15]。一方、地上の男たちの行動原理は経済的・地政学的欲望に突き動かされていた。ヘロドトスが『歴史』冒頭で美女誘拐劇を「国家間の略奪と報復の連鎖」と冷徹に分析したように[16]、ギリシア軍にとってヘレネー奪還は標的に過ぎず、真の目的はトロイアの莫大な富と海峡の覇権獲得にあった。「絶世の美女を取り戻す」というロマンチックな口実の裏には、新興軍事国家集団（ミケーネ）による富裕な交易国家（トロイア）への帝国主義的侵略の意図があったのである。

IV. アンビバレントな自我

開戦から十年、『イリアス』が描くヘレネーはステレオタイプを拒絶する。そこには高い知性と引き裂かれた自我を抱えるひとりの女性の苦悩がある。

『イリアス』第3歌の「城壁からの観閲τειχοσκοπία（teichoskopia）」で、スカイア門の上に立ったヘレネーを見た長老たちはその美しさに息を呑む[17]。しかし彼女自身はみずからを「恥知らずな牝犬」と蔑み、過去の選択を深く悔やんで涙を流していた。眼下のギリシア軍陣容を正確に解説する言葉には政治的知性が宿る一方で、彼女の心は孤独と絶望に苛まれていた。また、同歌でアプロディテが不甲斐なく逃げ帰ったパリスの寝室へ行くよう命じた際、ヘレネーは「いっそあなたが彼の妻にでも、それとも女奴隷にでもおなりなさい！」と神に対し激しく反逆する[18]。結局、アプロディテの冷酷な脅迫[19]に従う他なかったが、ここに彼女の悲劇――おのれの愚かさを自覚する知性を持ちながら、神の暴力と肉体の次元に屈服せざるを得ないディレンマ――が浮き彫りとなる。

さらにトロイア陥落前夜、メネラオスの回想によれば[20]、ヘレネーは木馬の周囲を回り、中に潜むギリシア将兵の妻たちの声を完全に模倣して呼びかけたという。ここで現れるのは「薬を操る魔女（ファルマキス）」としての顔である[21]。彼女は味方なのか敵なのか？ 彼女は近づく者を錯乱させる「エロスとエリス（愛欲と不和）」のブラックホールとして、城壁の上に佇んでいたのである。

V. 幻影（エイドロン）と不在

アイスキュロスは『アガメムノン』において、ヘレネーの名に隠された言葉遊び（ヘレナウス＝船を滅ぼす女、ヘランドロス＝男を滅ぼす女、ヘレプトリス＝都市を滅ぼす女）を通じて、彼女を「破壊の概念」として定義した[22]。また、妻に逃げられたメネラオスが館の彫像や夢の中の幻影に苦しむ姿を描き出した[23]。

この幻影こそ、古代ギリシアにおける「エイドロン（εἴδωλον / eidolon: 幻影、分身）」である。ジャン＝ピエール・ヴェルナンが指摘するように[24]、エイドロンとは単なる錯覚ではなく、「不在の者をそこに現前させる」半ば実在する恐るべき分身であった。人間はヘレネーの現実の肉体ではなく、彼女が放つ「絶対的自由と美のエイドロン」に取り憑かれ、みずからを

13 Clader（1976）, pp.5, 81–83.
14 Sappho, fr. 16（Campbell 1982）.
15 ヘシオドス『仕事と日』106–201 行。
16 Herodotus, Histories 1.1–3.
17 Homer, Iliad 3.156–158（松平訳 1992 年）。
18 ホメロス『イリアス』第 3 歌 399–412 行。
19 同上、414–417 行。
20 Homer, Odyssey 4.271–289（松平訳 1994 年）。
21 ホメロス『オデュッセイア』第 4 歌 219–232 行。
22 Aeschylus, Agamemnon 681–690.
23 *ibid.*, 414–426（呉訳 1985 年）。
24 ヴェルナン『ギリシア人の神話と思想』（2012 年）第 11 章参照。

滅ぼしたのである。

むすび

古代ギリシア文学は、ここで劇的な反転を遂げる。詩人ステシコロスはヘレネー誹謗の詩で失明し、撤回詩『パリノーディア』で「あなたはトロイアへ行かなかった」と歌い直して視力を回復した伝承が残る[25]。エウリピデスはこの伝承を演劇的トリックに昇華させ、戯曲『ヘレネー』において、トロイアにいたのは女神ヘラが雲から作った「エイドロン」であり、本物のヘレネーはエジプトで貞節を守っていたと設定した[26][27]。

英雄たちが10年の歳月と無数の命を懸けて奪い合っていたのは、雲で作られた空っぽのアバターに過ぎなかった。トロイア戦争とは、実体のないイメージをめぐる虚構の殺し合いだったのである。この「不在のエイドロンをめぐる戦争」という構図は、高度情報化社会を生きる現代のわれわれの現実を不気味なほど正確に予見している。

現代のわれわれは、ディスプレイを通じてSNSのアバター、AIが生成するディープフェイク、アルゴリズムが増幅するイデオロギーという名の無数の「エイドロン」と対峙している。ボードリヤールは現代を「シミュラークル（オリジナルなきコピー）」の時代と鋭く指摘したが、3000年前の英雄たちもまたシミュラークルの狂気に呑み込まれていた。他者が作った「空白のスクリーン」に自らの欲望を投影し、幻影を奪い合うわれわれは、パリスやメネラオスの末裔に他ならない。

青銅器時代に生きたヘレネーは、黄金で身をかため国家の富を動かす冷徹な政治家であり、理性を無化する野性そのものであった。彼女はこれからも、われわれが勝手に作り上げた「理想の美女」というスクリーンを内側から引き裂きつづける。情報空間に無数の幻影が飛び交うアバターの時代において、ヘレネーの放つ魅惑的で危険なエイドロン[28]は、歴史の彼方でいっそう鮮烈に明滅し続けるだろう。

25 ステシコロス『パリノーディア』断片 192; プラトン『パイドロス』243a-b。
26 Euripides, Helen 31–36（中村訳 1986 年）。
27 ヘロドトス『歴史』第２巻 112–120 節（松平訳 1971 年）。
28 ギリシア語「εἴδωλον / eidolon」は英語の idol、フランス語の idole の語源となっている。

参考文献

※ ギリシア古典の引用は Perseus Digital Library を通じ Loeb Classical Library 等の標準校訂版を参照した。
Aeschylus（1926）*Agamemnon*, trans. H. W. Smyth（Harvard University Press / 邦訳：呉茂一訳『ギリシア悲劇 I』ちくま文庫 , 1985）.
Apollodorus（1921）*The Library*, trans. J. G. Frazer（Harvard University Press / 邦訳：高津春繁訳『ギリシア神話』岩波書店 , 1994）.
Blondell, R.（2013）*Helen of Troy: Beauty, Myth, Devastation*（Oxford University Press）.
Campbell, D. A.（ed.）（1982）*Greek Lyric, Vol. I*（Harvard University Press）.
Clader, L. L.（1976）*Helen: The Evolution from Divine to Heroic in Greek Epic Tradition*（E. J. Brill）.
Euripides（1938）*Helen, trans*. E. P. Coleridge（Random House / 邦訳：中村善也訳『ギリシア悲劇 IV』ちくま文庫 , 1986）.
Herodotus（1920）*Histories*, trans. A. D. Godley（Harvard University Press / 邦訳：松平千秋訳『歴史』岩波文庫 , 1971）.
Hesiod（1914）*Hesiod, the Homeric Hymns and Homerica*, trans. H. G. Evelyn-White（Harvard University Press / 邦訳：廣川洋一訳『神統記』岩波文庫 ; 松平千秋訳『仕事と日』岩波文庫）.
Homer（1924）*The Iliad*, trans. A. T. Murray（Harvard University Press / 邦訳：松平千秋訳『イリアス』岩波文庫 , 1992）.
Homer（1919）*The Odyssey*, trans. A. T. Murray（Harvard University Press / 邦訳：松平千秋訳『オデュッセイア』岩波文庫 , 1994）.
Hughes, B.（2005）*Helen of Troy: Goddess, Princess, Whore*（Jonathan Cape）.
呉茂一（1979）『ギリシア神話（下）』新潮文庫 .
Maguire, L.（2009）*Helen of Troy: From Homer to Hollywood*（Wiley-Blackwell）.
Vernant, J. P.（1965）*Mythe et pensée chez les Grecs*（邦訳：『ギリシア人の神話と思想』国文社 , 2012）.

多言語社会がやってきた！

―グローバル社会における外国語とのつきあいとは―



千葉商科大学基盤教育機構　非常勤講師
日高　美奈子
HIDAKA Minako

プロフィール

鹿児島県生まれ。清泉女子大学西語西文学科卒。早稲田大学第一文学部独文学科卒、同大学大学院文学研究科独文学専攻修士課程修了、同大学院博士後期課程満期退学。早稲田大学比較文学研究室助手。専門は外国語教育。

外国語の氾濫

長年言語に携わっていると、日々様々な外国語表記が気になって仕方がない。昨今、テレビをみていても、町を歩いていても、外国語に出会わない日はない。ニュースや討論番組では、「この英語、どれほどの視聴者が理解しているだろうか？」と思うような語が日本語に混ざって頻繁に使用される。店名にも映画名やドラマ名にも、英語に限らず様々な外国語が使用されている。IT 関係の用語は言わずもがなで、日々新しい語を耳にするが、私自身まったく追いつけていない。これは訳せばかえって意味がわからなくなるし、訳す必要もないだろう。実ににぎやかにいろんな言語が使用され、楽しいと思うこともある一方で、日本人は比較的外国語が苦手だと思っていたが、いつからこんなに外国語好きになったのだろうか？と不思議に思うこともある。

外国語が身近になり、気軽に使えるようになったのはいいことではあると思うが、用法や文法的な間違いもとても多い。看板につづりの間違いなどみつけると、思わず笑ってしまうが、それと同時に「なぜ看板にする前に確かめないのか！」と疑問に思うことしばしば。看板、名刺、飲食店なら箸袋、持ち帰り用の紙袋、ナプキン等々様々なものに間違ったまま印刷し、後から間違いに気づいても、もう修正不可能になってしまうだろう。修正するとなったら、大変な費用がかかる。もう気づかないふりをするしかないのだろう。外国語であれば、間違いに気づく者もそう多くはないだろうし、気づいたとしても、私のようになかなかそれを指摘できないでいる者も多いだろう。

単なる間違い

しかし、なぜ習ったこともない言語をきちんと確かめず使用したり、ちょっと調べればわかるような英単語のつづりを間違ったまま使用したりというようなことが起こるのだろうか。長年抱いていたこの疑問について考え、これを改善することはできないだろうか、あれこれ考えをめぐらせてみようと思う。

外国語を使用している様々な店名、映画名、建物名など実際の例をいくつか挙げながら、まずはそれぞれの問題点を指摘してみたい。

ガレージ○○ Garege ○○？

小さな町のバイパス沿いの修理工場の看板 「ガレージ○○ Garege ○○」。言うまでもなく「ガレージ」の正しい表記は「Garage」である。カタカナの「ガレージ○○」だけでいいものを、英語表記があった方がかっこいいということなのか、わざわざアルファベットで店名を表記し、きちんと確かめもせず、間違ったつづりになってしまっている。しかもでかでかと２か所。

猿が温泉に入ることで人気になった観光地で発見した料金表には、「大人 Adurt」。「大人」の正しいつづり

は「Adult」だ。こちらの観光地は１９９７年の長野オリンピックを機に世界に知られるようになり、今や年間２５万人以上が訪れ、中でも外国人観光客に人気だ。私が英語のつづりの間違いを発見したのはもう１０年ほど前になるが、さすがに今は新しい看板になり訂正されているようだ。

スペイン料理店の店名 「ファミーラ Famílla」。手書きの黒板には「Famiila」。

スペイン語で「家族」は familia で、famílla という単語も famiila という単語も存在しない。どうやらスペイン語の familia と paella を合わせた造語らしいが、「ll」はラ行ではない。「ll」は、スペイン語では「l」とは別の独立した複文字であり、発音は「ジャ」か「リャ」に近い。スペイン語の授業では、なかなかこの文字の発音が定着せず、ラ行で発音する学生が多いので、「ll の発音、ラ行脱出ゲーム」なるフラッシュカードを作って集中的に練習する。それなのに、スペイン料理店で「ファミーラ」。がっかりだ。看板と手書きの黒板の店名のつづりが異なるのも気になる。

文法的間違い

英語以外のヨーロッパの言語をタイトルや商品名などに採用する場合に多いのが、名詞を修飾する際の性・数一致の法則を無視した間違いだ。

ドラマ「グランメゾン東京」というドラマがある。このドラマは、後に映画化されるほど人気だったようだ。映画のポスターには、日本語の「グランメゾン東京」と並んで、フランス語表記「Grand Maison」がでかでかと表記されている。おや？何か足りない。フランス語を少しでもかじったことがある者であればすぐに気づく間違いである。フランス語には女性名詞と男性名詞があり、名詞を修飾するときは、その名詞の性・数にそろえるという規則がある。maison は女性名詞なので、grande とするべきなのだ。grande の de は日本人にはほとんど聞き取れないほどの音なので、カタカナ表記は、「グラン」でもいい、というよりむしろその方がフランス語の発音に近いだろう。しかし、「Grand Maison」は明らかな間違いだ。メジャーなテレビ局の連続ドラマで、映画になるほど人気で、しかも映画版はパリが舞台だ。制作過程で相当な数の人々が関わっているはずだが、なぜ誰も気づかなかったのだろう。

バブル時代に建てられたマンション名によく用いられた「ベル・シャトー」（意味：美しい城）なども同じ例だ。「ベル belle」という形容詞を「シャトー château」という男性名詞に修飾させているのだが、château は男性名詞なので belle という形ではなく、beau とし、正しくは「ボ・シャトー beau château」となるべきだ。フランス語で「美しい」をひくと、紙の辞書であれば、まず男性形の beau が出てきて、beau の項目の中に女性形は belle と表記されている。しかし、男性形、女性形の概念がわからなければ、何のことかわからないだろう。おそらく、音だけでどちらを採用するか決めたのだろう。「ボ」より「ベル」の方が軽く、柔らかい印象を与え、マンション向きということで採用されたのだろうか。まさに音重視、印象重視の例だ。言語の意味も文法も配慮していない。

マンション名に関しては、不動産会社のサイトによると、リーマンショックを境に、「シャトー」や「キャッスル」などという、意味を考えるとひいてしまうような命名は減り、「レジデンス」や「ハウス」などわかりやすい名に変わってきているようだ。外国人入居希望者や投資家が増えたためだという。グローバル化により、少しずつ意味を考えるようになったということか。

本来の言語の発音を無視した、あるいは適当に採用した語も少なくない。ドイツ語教師として、ここ数年気になって仕方がない菓子名がある。ドイツのクリスマス菓子「シュトレン」である。原語では「Stollen」とつづる。o の次に l が二つ続くので、o は短い音だが、最近よく目にするのが、「シュトーレン」と o を長音にした表記だ。目にする度気持ち悪い。ドイツやオーストリアと言ったドイツ語圏で修業した職人さんが経営する菓子店では「シュトレン」と表記されているが、そうでない場合は「シュトーレン」になっている。一度「正しくはシュトレンですよ。」と指摘したことがあるが、「何をいっているのだろう？」という反応だった。

万国共通？

日本に限らず、海外における命名にも同様の本来の言語の用法や音を無視する傾向はみられる。すぐに思い浮かぶのが、アメリカで誕生したハーゲンダッツである。２０年以上前のこと、教師になってはじめて

受け持ったクラスの学生に「先生、ハーゲンダッツはどうしてハーゲンダッツなんですか？なぜハーゲンなのにHa のaの上にウムラウトがあるんですか？」という質問を受けた。「ウムラウト」というのはドイツ語の変音記号で、a の上に「ウムラウト」という記号があると、「ア」ではなく日本語の「エ」に近い音に変わる。国立大学の教育学部の学生で、外国語に強い関心があり、いくつかの言語を学習していたようだ。今や良い教師になっていることだろう。本当なら「自分で調べてみなさい。」と言った方が教育的には正しかったのだろうが、私もまだ若く、知的好奇心をくすぐられ、自分で調べてしまった。まずはパッケージにあったハーゲンダッツジャパンのお客様相談室に電話で問い合わせた。しかし答えは「特に意味はありません。」というものだった。「特に意味がないはずはない！」と、次はアメリカ本社のお客様相談室にメールで問い合わせた。実に丁寧な返事が返ってきた。「ハーゲン」はコペンハーゲンのハーゲンで、乳製品といえばデンマークというイメージがあるから、それにちなんだ名前をつけた。ダッツは、北欧語らしい雰囲気を醸し出すためになんとなくつけたそうだ。a の上にデンマーク語のコペンハーゲンの a にはないウムラウト（変音記号）をつけたのも北欧語らしい雰囲気を醸し出したかったからだという。なんだか、名前のつけ方は日本人もアメリカ人も変わらないな、という印象を持った。

英語圏の逆襲か？

また、イギリスには「Superdry」という名のアパレルブランドがある。この会社が発売して世界的ヒットとなったTシャツには「Superdry 極度乾燥（しなさい）」というロゴがプリントされている。「Superdry」という社名は、日本のビールメーカーの「スーパードライ」というビールにちなんでいるそうだ。この会社を立ち上げた2人のイギリス人が日本を旅行中に、様々な商品に英語が使われていることに気づき、大量の商品のパッケージを集めてみた。そうすると、多くの商品に「スーパー」という語がついていることに気づいたそうだ。一番印象に残ったからか、ビールの「スーパードライ」を自社名にすることに決めたということらしい。その後、サッカー選手だったベッカムをはじめ、俳優レオナルド・ディカプリオやケイト・ウィンスレットらがこのブランドのTシャツを着たことで世界中に広まったというわけだ。「Superdry」のTシャツのロゴにはこの他に、「堅い天候の会社」、「極度のガソリン」、「自動車潤滑」、「日本の財」等日本人にとっては意味不明なものがある。どれも自動翻訳を利用したものだと言う。イギリス人のデザイナーはこれらを「かっこいい！」と感じたのだろう。

こうした国内外を問わず広がる変な「外国語」に疑問を持つことが非常に多い。なぜ決定する前に調べないのだろうか？と思わざるを得ない。今や自動翻訳や生成AIで簡単に様々な外国語に翻訳できる。精度も日々向上している。ただ、今回挙げた例が世に出た時、生成AIはまだ普及していなかった。自動翻訳はあったが、しばしばおかしな訳をすることがあり、注意しながら使わなければならなかった。しかし、マーケティング業界ではどうやらそのような正確性は必要ないようだ。

文化距離

マーケティングや経営学、異文化コミュニケーションといった分野で用いられる用語に「文化距離」という用語がある。異なる国同士や異なる社会の間における、言語、宗教、価値観、社会規範などの違いの大きさを表す用語だ。この「文化距離」が、商品や企業や店に命名する場合に重要な要素となるらしい。自国との文化距離が大きければ大きいほど、つまり違いが大きければ大きいほど、消費者に大きなインパクトを与えるというのだ。先に挙げたSuperdryというブランドは、「極度乾燥（しなさい）」というおかしな日本語から、日本人には怪しげに思えるが、日本以外の国、非日本語圏では異国情緒あふれる魅力的な印象を与える。ちなみにSuperdryの店舗は、世界６５か国以上に展開しているが、日本にはないそうだ。理由は商標の問題らしいが、もしあっても変な日本語がプリントされたTシャツがそう売れるとは思えない。これこそが「文化距離」を利用した戦略らしい。

確かにマーケティング戦略としての「文化距離」というものを考えれば、外国語を利用した命名の場合、消費者や視聴者へ狙い通りのインパクトさえ与えられれば、文法や本来の単語の意味など配慮する必要はないのかもしれない。私のように、おかしな外国語をみつけてはあれこれ難癖をつけていると、野暮なことを

言う「うるさい昭和のおばさん」と言われるだろう。

英語に関して言うと、企業名や商品名にとどまらず、「ジャパングリッシュ」と名前がつけられるほど多くの和製英語が日本語になっている。単語をつなぎ合わせて新たに生み出された語（マナーモード、サラリーマン等）、英単語を省略して作った語（ミス、アポ等）、元々の英単語とは異なる意味で使われている語（コンセント、スマート等）、英単語と日本語を組み合わせて作った語（ドタキャン、ガラケー等）などに分けられる。和製英語はもはや英語ではなく、英語ネイティブには通じない日本語だ。ドイツには「Denglisch」、ラテンアメリカ諸国には「Espanglish」と言って、英語をドイツ語やスペイン語に融合させることはあるが、ほとんどの場合意味は変わらないし、語形も英語のつづりをそのままドイツ語やスペイン語の語形に入れ込んでいる。日本語の場合は、外国語をカタカナにしてそのまま使うこともあるが、意味を変えたり、日本語とつなぎ合わせたり様々な形で取り入れている。日本語は孤立語であり、文字も固有であり、外国の様々な言語との違いは大きいにもかかわらず、様々な外国語を多様な形で取り入れているのは興味深いと思う。

日本語の文字はそもそも輸入品だ。日本人は、４・５世紀に漢字を取り入れ、漢字を日本語の音表記のために利用した万葉仮名、さらにひらがな、カタカナを作っていった。カタカナは時を経て外来語を表記するために用いられるようになった。そもそも文字は輸入したものが元になっており、カタカナの存在が外国語を取り入れやすくしている。「T シャツ１枚千円」となるとアルファベット、カタカナ、アラビア数字、漢字、漢数字と実に５種類の文字が混在している。こんな言語があるだろうか。文字だけではない。飲食店で「ご飯」を注文するとき、洋食の店なら「ライス」、和食の店なら「ご飯」と使い分けている。最近では若者が「ご飯が食べたい」という時、「コメ食いたい」と言うこともある。同じものでも場面によって使い分けている。

他国には類をみない文字遊び

日本人は昔から文字を使って楽しんでいた。偏とつくりを組み合わせて辞書にはないでたらめな漢字を創作する「嘘字」、絵や文字の組み合わせから、ある言葉（地名や道具など）を当てる謎解き「判じ物」、文字の足し算・引き算による謎かけ「当て字」等々。「嘘字」の例では、金偏に母で「へそくり」、「判じ物」には、箱の絵の中に「ね」という文字が書かれ「箱根」、「当て字」は現代でも居酒屋でよくみかける「春夏冬中」で「商い中」。

明治維新による文明開化で西洋から新たな技術や道具や文化、思想が入ってきて、新たな言葉が必要になり、日本語に翻訳したり、外国語をそのままカタカナで表記したりすることになった。

ここで、現代と異なる面がある。

漢字を導入したのも、漢字を利用して音だけを表す万葉仮名を作り、さらにひらがなやカタカナを作ったのも、江戸時代に嘘字や判じ絵などで遊んだのも、文明開化で外国語を翻訳したのも皆その時代の知識人だ。今のような恵まれた学習環境もない中、外国語を習得した知識人だけが外国語を翻訳し、新しい概念をとりいれるべく切磋琢磨してきた。

しかし、ひとは今や未知の言語までも自由に使うようになった。

今や自動翻訳で瞬時に未知の外国語に翻訳してくれるし、生成 AI などという便利なものも登場した。「外国語などもはや学習する必要はない。」などと言い切る向きもある。果たして本当にそうだろうか。

現代の外国語の授業は、昔のように与えられたテキストを翻訳して終わりというようなものではない。今や会話中心で、異文化コミュニケーションを学びながら、異文化理解を深めていくものである。英語文化圏については、常日頃から接する機会は多いが、それでも英語の授業を通じてさらに理解は深まっていく。英語以外の文化圏については、そもそも知る機会が少ない。自分が好きなスポーツを通じて、趣味を通じて、そのスポーツや趣味が盛んな国に興味を抱くことはあるが、なかなかその国の言語に触れる機会はない。

外国語を学ぶということ

長く大学でドイツ語やスペイン語の授業を担当してきたが、その言語圏の文化や習慣を知るための課題には学生は大いに関心を示す。日本ではどうだろうと自分の国についてもっと知ろうとする学生もいる。高文

脈文化の代表とされる日本語を母語とする学生たちが、低文脈文化の最たる文化圏であるドイツやスイスの言語を知るとき、言葉できちんと意思を伝える方法、大切さを同時に知ることになる。

またスペイン語圏は２０以上の国々にわたり、同じ言語を共有しながら、異なる歴史、文化を持つことに、学習者は驚く。日本とはまったく異なる歴史、文化、習慣を持つ国々の人々と接するとき、どのように振舞えばいいのか、戸惑うのである。授業を通して、まずは違いがあることを知り、理解することが必要だ。言語に関しては、自らが言語の習得に苦労すればするほど、日本語を勉強し、日本で働く外国人への理解も深まり、ひいては寛容の精神も生まれるだろう。外国人観光客を相手にする仕事では、情報伝達ができればいいので、生成 AI や自動翻訳機があれば事足りるだろう。しかし、大学で外国語を学ぶということは、目標言語の習得にとどまらず、異文化を知り、異文化に生きる人々を理解し、コミュニケーションを図ることができるようになることを目的とする。単に外国語を翻訳して相手に言いたいことが通じればいいということではない。仕草や目線やイントネーションなど場面に応じた振る舞いまで学び、それを実際にやってみることで異文化理解を深めていく。

何もすべての人に様々な外国語を学習しろと言っているわけではない。そんなことは無理だし、その必要もない。ただ、せめて大学で学ぶ機会を得た人々には、外国語を学ぶ機会を持ってほしいと願う。英語は義務教育ですべての人が学ぶ機会はあるが、それ以外のヨーロッパの言語せめて一つ、アジアの言語一つは学んでほしい。そうすれば、外国語を一色単にせず（授業後のアンケートでしばしばあるのが、「英語と違っていて驚いた」というものだ）、それぞれ異なる文法、発音があることを知るだろう。何かに命名する機会があった時に、「きちんと調べなければ！」と思い至ってくれるのではないか。「間違っていないだろうか？」と疑念を抱くことができる人こそ教養のある人と言えるのではないか。そうした教養を積めるのは大学においてだけではないか。

スペイン語の授業で

私のスペイン語の授業では、ある場面の会話を導入するときには、その場面で必要な単語は、学習者に調べさせるのではなく、あらかじめ用意する。学習者は、それらの単語を使って会話を部分的に入れ替えながら用法や表現を学ぶ。なぜ調べさせるのではなく、単語を選んで用意するのか。スペイン語圏は１自治国と２０か国と広範囲に及ぶ。スペインとラテンアメリカのスペイン語圏では語彙や文法が異なる場合があるし、ラテンアメリカ諸国の間でも異なる場合がある。スペインでは普通に使われる単語でも、ラテンアメリカ諸国では公然と言うことがはばかられる意味である単語もあり、また同じ物でもスペインとラテンアメリカ諸国では異なる単語を使う場合もしばしばある。学習者に調べさせてから、その違いを確認させる方法もあるが、週１回の大人数の授業ではその時間はない。ある時、外国語を学ぶことが大好きな学生が、私が用意した単語リストを使わず、無料のオンライン辞書を使って単語を調べたことがあった。「ワンピース」を「una pieza」としていた。スペイン語では、「vestido」だ。「ワンピース」自体が和製英語だからか、「una」は英語の「one」、「pieza」は、「piece」だ。生成 AI に限らず、最近のオンライン辞書や自動翻訳も以前と比べるとかなり精度が良くなっているが、それでもたまにこういったおかしな変換をしてくることがある。その言語に精通した者であればすぐに気づくが、オンライン辞書や自動翻訳や生成 AI が提示した結果を、多くの学生は疑うことなく鵜呑みにしてしまう。こういう傾向を自動化バイアスというのだそうだ。言葉があるくらいだから、相当この傾向は広がっているのだろう。私の授業では、生成 AI は使っていいことにしていて、必ず結果を読み、検証することとしているが、それを実行させるのは容易ではない。パソコンやスマホがない時代に育ったアナログ世代の私も、まだ恐る恐るではあるが、生成 AI を使っているが、その結果は必ず検証する。そうすると意外に正しくない情報が混ざっている。間違いを指摘すると「申し訳ありません！」ときちんと謝罪し訂正してくれる。なかなか素直だ。アナログ時代に培われた知識があれば、間違った結果を間違いと判断できるだろうが、デジタルネイティブ世代は、どのようにして間違いを発見するのだろうか。

グローバル社会で

異なる文化、異なる言語話者が行き交うグローバル社会では、起業した会社名や新しい商品名や建物名や服のロゴに外国語を使用するとき、その単語や文がどんな意味やニュアンスをもち、その言語のネイティブの人々にどのような印象を与えるのかを考える必要がある。もはや「文化距離」を利用して、販売する国で知られていない言語であれば、間違っていても、おかしな使い方をしても構わないという戦略は通用しなくなるのではないか。外国語を命名やロゴに使用する場合は、その言語を使用する国で、その単語や表現がどのようなニュアンスで用いられているのか、つづりは正しいか、文法的に正しいかをきちんと調べて使わなければならない。その言語のネイティブの人たちが不快な思いをしたり、疑問を呈したり、理解できないような表現は避けるべきではないだろうか。そんな堅苦しいことを言っていたら、おもしろい命名もロゴもできなくなってしまうと心配する人もいるだろう。しかし、最低限の決まりごとを守ってこそ質の高い、誰にとってもおもしろい命名やロゴができるのではないか。

人々がますます生成ＡＩを使うようになれば、今以上に未知の外国語を本来の日本人的遊び心を持って、気軽に使うようになるだろう。大学における外国語教育は、そのための基盤づくりに重要な役割を担うことになる。

The first thought image is goosebumps.
——Byung-Chol Han, *Non-Things*

ことばが意味を為すとき：*Instruments of a Beating Heart* 試論



千葉商科大学基盤教育機構　准教授
大勝　裕史
OHKATSU Hirofumi

プロフィール

早稲田大学大学院文学研究科英文学コース博士課程修了。専門は映画研究。主著に『アメリカ映画史入門』（三修社、2024 年、ジョージ・キューカー、プレストン・スタージェス、マーティン・スコセッシ、『タクシー・ドライバー』、戦争映画の項目を執筆）、『映画史の論点：映画の〈内〉と〈外〉をめぐって』（ミネルヴァ書房、2023 年、第 3 章「第二次世界大戦戦闘映画『特攻大作戦』と西部劇『ワイルド・アパッチ』：ヴェトナム戦争中のロバート・アルドリッチ」執筆）、『映画とイデオロギー』（ミネルヴァ書房、2015 年、第 7 章「ヴェトナム帰還兵映画としての『タクシー・ドライバー』：ヴェトナム戦争の徴候、反復、アレゴリー」執筆）。

1. はじめに：日本的でもグローバルでもなく

日本の義務教育の最大公約数的な基盤をなすのは公立小学校である。日本の学校制度において、小学校の修業年限は6年間と最も長い。学校基本調査によれば、在籍児童者数で見ると、国立・公立・私立小学校に通う児童のうち、公立小学校に通う児童の割合は、昭和30年から令和までほとんど変わらず98～99% 程度である（学校基本調査）。このように公立小学校の教育は、国民的にほぼ共通の経験と言っても過言ではない。小学校は教科だけでなく集団生活も学ぶ場である。日直、掃除、給食の準備と片付けといった日々の仕事に加えて、合唱・合奏祭、運動会、学芸会といった全員参加の年次イベントもある。

Instruments of a Beating Heart（Ema Ryan Yamazaki, 2024）は、令和時代の日本の小学校生活に密着した短編ドキュメンタリーである。この短編は、コロナ禍で制約を受けた学校生活を記録した長編ドキュメンタリー『小学校 それは小さな社会』（山崎エマ監督、2024年）から、一つのエピソードを取り出して編集した作品である。長編では対面とオンラインの授業、給食、運動会、合奏といった様々なエピソードが描かれているが、短編は「悦びの歌」の合奏というエピソードに焦点を絞っている。演出上の特徴として、この作品にはナレーションも BGM もキャプションもない。ここから作り手の意図があからさまに介入してこないような印象を受けるが、むしろこの非介入的な演出こそが、子どもたちの世界への観客の「没入感」を生み出すという作り手の意図である（山崎 103）。日本人の観客にとっては、教室の世界に没入することは、同時に、記憶を辿ることでもあるだろう。私たちはスクリーンに登場する小学生を通して、小学生だった頃の自分を見出せるはずだ。先生が生徒を「さん」付けで呼んだり、コロナ禍で全ての生徒と先生がマスクを着用していたりと、小学校も時代の変化を如実に反映してはいるが、確かに感じられるのは、昭和の時代から保持されてきた日本の初等教育の原風景である——前方には黒板と教卓があり、側面には校庭の見える大きな窓が設置され、中央には木とスチールでできた机と椅子が並べられた教室、椅子と床との摩擦音、子どもたちのざわめき、チャイム。こうした小学校の風景は、とりわけ日本人の観客に対してノスタルジアを喚起するだろう。

だが他方で、この短編ドキュメンタリーは日本人向けのノスタルジア映画ではない。実際この短編は、英語のタイトルと字幕が付いた、グローバルに公開された作品である。さらに受賞こそ逃したものの、アカデミー賞短編ドキュメンタリー賞にノミネートされてもいた。日本を内側から知る者が海外で発表した作品が、グローバルな評価を経由した上で日本に紹介されるという流通経路は、単に輸出された作品でも輸入された

作品でもなく、監督の山崎エマが述べるように、まさに「逆輸入」された作品なのである（AdverTimes）。逆輸入という視点こそ、この作品の中核にある眼差しである。日本と欧米を往還する山崎の経歴が、この作品に特有の中間的な視点を可能にしているように思われる。山崎はイギリス人の父と日本人の母との間に生まれた、いわゆるハーフである。彼女は大阪の公立小学校を卒業した後、中高は日本のインターナショナルスクールで学んだ。その後、アメリカの大学に進学し、卒業後もアメリカで映像制作のキャリアを積んでいた。山崎はアメリカで働いているときに、自分が当たり前だと思っていた仕事への姿勢――「出勤時間に遅れない、責任を持って与えられた役割をまっとうする、他の制作チームと協力し、少しでも良い物を作るために自分のベストを尽くす」といったこと――が、アメリカ人の同僚から賞賛される長所であることに気づいたという（山崎 66）。山崎はその自分の強みが、日本で過ごした小学校時代の教育により形成されていたことを悟る。こうして日本の初等教育は、映画が追求すべき価値のある主題として再発見された。グローバルなオーディエンスにとっては驚くべき日本の初等教育は、日本人にとっては当たり前のものである。ハーフの監督にとって、日本に住んでいた頃には当たり前だったものが、渡米してから当たり前ではないものとして再発見されているのだ。

しかしながら本稿では、この短編が描き出す日本的な初等教育の原風景をこれ以上は探究しない。日本的なものは本稿の関心事ではない。グローバルな視点であれ、国内的な視点であれ、文化本質主義的な観点に立つのではなく、作中で児童が発する「心臓のかけら」という詩的表現に着目することで、人間が発することばについての哲学的な寓話としてこの短編を読み解いてみたい。

2. ひとりひとりの「一つの」心臓

小学校一年生が春に入学してくる新一年生を歓迎するために「悦びの歌」を演奏することになる。児童たちの最初の関門はオーディションである。希望する楽器の奏者になるには、オーディションを受けて選ばれなければならない。ここで一人の児童に焦点が当たる。彼女は最初に大太鼓のオーディションでうまく演奏できずに落選する。落胆した彼女は教室に戻ってきて机で泣いてしまう。結局、彼女は次のオーディションに合格して、シンバルを担当することになった[1]。各パートの担当者は選抜された代表であるので、音楽の先生が厳しく指導する。練習不足で合同練習に臨み、リズムを間違えたシンバルの子は、先生に叱られてまたもや泣いてしまう。落ち込む彼女を、他の生徒や特に担任の先生が寄り添ってケアしたこともあって、最終的には見事に演奏できるようになる。本番の演奏に臨もうとする児童たちが待機している時に、シンバルの子が言う。「ねえ、私たちって何なんだろうね…心臓の一部」。すかさずもう一人の子が興奮気味に付け加える。「私たちは心臓のかけらで、みんなが揃ったらこんな形（手でハート型を作る）になる。で、一人こんな形でズレたら、もう心臓はできないよ。」シンバルの子が再び言う。「私たちは過酷な楽器だよ。」

「心臓のかけら」という表現に私は驚嘆した。これが小学一年生の発することばなのか。「心臓」という単語が思い浮かんだのは、本番前の緊張で、心臓の鼓動が早まるのを子どもたち自身が実感していたからだろう[2]。心臓の鼓動は、短編のタイトルが示唆するように、規則的なリズムを生み出す演奏のメタファーでもあるだろう。このように心臓ということばは、本番前の緊張感と予期される演奏のグルーヴ感、すなわち子どもたちの生身の感覚を鮮やかに表象しているのだ。「かけら」もまた児童の身体感覚の表象として興味深い。「一部」（part, piece）よりも「かけら」（欠片、fragment）の方が、元の全体性が既に失われており、それぞれの形が異なる断片としてのあり方を含意する。あるいは、個々のかけらは、別々の全体に属していたかもしれない――ちょうど子どもたちに個別の身体があるように。したがってかけらの集まりは、元の全体の復元ではない不安定で一時的な構造体にしかならない。考えてみれば、児童たちが演奏する楽器は、打楽器、鍵盤楽器、管楽器など様々である。バラバラな楽器の音色が、楽曲という法の下で、誤って誰かが音やリズムを外した途端に不協和音となってしまう、綱渡りのような調和を成立させるのだ。つまり、合奏

1　シンバル担当者が決まるオーディションでも、選抜の必然として、他の児童が落選していた。落選した児童はやはり教室に戻って泣いてしまう。ここで驚くべきことに、他の男子児童が、自分が応援していた子の落選を気の毒に思って、泣いてしまう。競争原理や自己責任論は、児童たちの感情や価値観には、まだ深く根を下ろしていないようだ。

2　英単語 heart は、身体器官としての「心臓」と精神としての「心」という二つの意味を併せ持っている。日本語では「心臓」は身体的なものであり、「心」は精神的なものだと区別されているが、例えば「心臓に毛の生えた」のような慣用句では心臓が心のメタファーとして用いられている。作中では、音楽の先生が指導中に「心を揃える」という表現を使っていたが、児童たちは「心」ではなく「心臓」の語しか使っていない。

とは常に不調和と隣り合わせの調和なのである。かけらの集まりとしての心臓という儚くて脆い構造のイメージには、間違えずに演奏することへの不安混じりの願いが、投影されているのかもしれない。

児童が瞬時に閃いた「私たちは心臓のかけら」という文は、矛盾の上に成り立っている。文意としては、合奏するとき「私」はかけら（＝部分）になり、「私」の集合である「私たち」は心臓（＝全体）になるということだ。しかし部分と全体の論理から考えれば、心臓は身体（全体）を構成する一つの器官（部分）なのだから、身体の集合である「私たち」が、一つの身体を構成する要素である心臓になるはずがない。しかしここでは、論理的な矛盾こそが詩的には真実を表象しているのだ。合奏が、諸要素が集まって一つの形を作る構造なのだとすれば、「心臓のかけら」として表象された合奏の体験はジャック・デリダが「構造の遊び」と呼ぶものに深く関わっているだろう（デリダ 590）。デリダによれば、基礎付けられた中心は、構造の遊び（中心が構造を逃れて、構造を不安定にしてしまう動き）を抑圧しながら、構造をより安定的に組織化する。例えば、コンパスで針を中心に固定することで円を確実に描くことを考えてみよう。この場合、中心は円という構造の内部にあり、動くことを禁じられる。しかしデリダが強調するのは、本来、中心は構造を組織化しながらも、同時に構造の遊びも可能にしているということだ。したがって「中心は逆説的にも構造の中にあるとも、構造の外にあるともいうことができる」（デリダ 590）。このように「中心を持つ構造という概念は…矛盾した仕方で一貫性を保っているのである」（デリダ 590-91）。

「私たちは心臓のかけら」という文に表象された合奏体験は、〈矛盾した一貫性〉を保つ構造を示唆している。もし合奏が「基礎付けられた中心」（内部にある唯一の固定点）により構造化された構造であるとすれば、それは楽譜という法や先生の指揮に、ただ忠実に従うだけの規律された身体動作の集合になってしまう。確かに合奏は楽譜や指揮に従うものだが、他方で解放の契機も含んだ経験である。心臓に喩えられた合奏は、あたかも心臓が私の内部と外部に同時に存在しながら同じ鼓動を打つような、個々の身体の境界が後退して身体を共に分かち合うような体験に他ならない。言い換えれば、ひとりひとりの心臓という器官＝楽器（instrument）が、同調・共振する（synchronize）ことで、一つの心臓という器官＝楽器を形成するような体験である。しかも、心臓という器官＝楽器のシンクロは、演奏する前から緊張感として既に始まっている。演奏前の緊張においても、演奏そのものにおいても、心臓は児童の内部で小さな鼓動を打ちながら、その外部で他の児童の心臓と繋がって大きな鼓動を打つのである。デリダが言うように、まさに心臓（中心）は児童の身体（構造）の内と外に同時にあるのだ。

「私たちは心臓のかけら」という詩的なことばは、いったいなぜ児童の口から出てきたのだろうか。私は先に「心臓のかけら」という表現に驚嘆したと述べた。同じように、児童たちも合奏という美的経験を予期して驚き震えていたのではないだろうか。プラトンは「哲学（求知）」の始まりは「驚異の情」による他ないと述べた（プラトン 57）[3]。プラトンは「驚異の情」が哲学、すなわちロゴスによる思考を開始させると考えたが、児童たちは「驚異の情」から詩的なことばを紡ぎ出したのだ。児童たちのボキャブラリーには抽象的で難解な単語はないだろう。だから彼女たちは、使い慣れた具体的で日常的な単語を器用に、あるいは慣用的ではない仕方で組み合わせることで「心臓のかけら」という詩的表現を作った。美的経験、すなわち何かを美しいと直感すること、あるいは感覚を揺さぶられることは、その整然と概念化されない直感をことばへと向かわせる。ここで我々はもう一つの言語的な事実に注目したい。美的経験を表象する児童たちのことばは、聞き手のない呟きではなかった。「心臓のかけら」には、他者の存在に対する意味作用があるのだ。

3. ことばが意味を為すとき

本稿の元になった原稿は学会発表のために用意されたものである[4]。発表の際にオーディエンスの方から、「心臓のかけら」という表現も生成 AI は学習するのではないかというコメントを頂いた。確かにその通りだろう。「心臓のかけら」という表現と、それが意味を持つ文脈との関係を AI は学習できる。しかし特定の表現とその表現が使用される抽象的な文脈を知ることは、辞書が単語の意味とその用法を詳しく記述することと根本的には差がない。単語の「意味」と想定されるものを言語的に説明したところで、言語を言語で置

3 哲学（philosophy）の語源はギリシア語 philosohpia、すなわち愛を意味する接頭辞 philo に知恵を意味する sophia を組み合わせた語である。哲学とは元々「知恵の愛求」（love of wisdom）、すなわち「求知」である。

4 本稿は、2025 年 3 月 2 日に中央大学茗荷谷キャンパスで開催された言語教育エキスポでの発表「ことばの身体性と交響性：AI 時代の映画教育」で言及した一つのエピソードを、さらに深く考察したものである。発表時に頂いたコメントから大いに思考を刺激された。ここに感謝申し上げる。

き換えているに過ぎず、言語的な循環のうちに捕えられたままである。しかし言語が記号としてあるだけでなく、我々の身体や存在に触れているかのように感じられる瞬間が確かにある。例えば、日本語では強く感銘や衝撃を受けることを（心に）「刺さる」と言うことがある。ことばであれ経験であれ、何かが刺さってしまうと、多くの場合、驚異の情と同じように、私たちはその何かについて考えざるをえなくなってしまう。考えるとは無意識に言語が動き出し、その何かを言語的に表象することと不可分である。児童たちは何かが刺さって、心臓の鼓動という実感を通して、すなわちまさに生きた文脈において「心臓のかけら」という表現を閃いた――記号接地（記号の意味が実感、身体感覚として把握されること）のこれほど格好の実例があるだろうか。このことと、AIが「心臓のかけら」という表現と意味を抽象的な文脈において知ることとは、天と地ほどの差がある。

ことばが言語の牢獄から逃れ出て、存在に触れるのはどんな時だろうか。それは、ことばが生きた文脈において使われる時であり、ことばが静的に意味を持つというよりも、動的に意味を為す時であるだろう。ことばは文字通りに「行為する」ことがある。「心臓のかけら」ということばが発せられた状況を思い出したい。「心臓のかけら」は本番前の待機中に発せられたことばであり、また掛け合いの成果だった。ここで我々は、ジュディス・バトラーを補助線とすることで、「私たちは心臓のかけら」という文の意味作用、言い換えれば、意味がいかにして他者に作用するのかを明らかにしたい。バトラーは言語哲学者J・L・オースティンの言語行為論を参照して、現実的な効力を持つ、すなわち行為する言語について考察している。バトラーが特に注目するのが、オースティンの言う「発話内行為」と「発話媒介行為」である。発話内行為は「語ることが同時におこなうことになる発話」であるのに対して、発話媒介行為は「一連の結果を誘発する発言」である（バトラー 35-36）。バトラーは時間性に着目することで、同時に効力を発揮する「発話内行為」と、事後的に何らかの結果を引き起こす「発話媒介行為」とを区別している。

バトラーはルイ・アルチュセールの呼びかけと主体化の理論を、発話内行為として鮮やかに読み直している。アルチュセールは、権力の呼びかけ（interpellation）が権力に従う従属＝主体（subject）を生み出すと指摘した[5]。アルチュセールが示す寓話的な例では、警官から「こら、そこのお前」（Hey, you there）と警呼されると、たとえ何も悪いことをしていない人であっても、ドキッと身体が反応してしまう（バトラー 44）[6]。恐らくその理由は、警呼により人は、法の下で生活し、法を犯しうる市民だと、すなわち法と権力に従属する主体として自覚させられてしまうからだろう。こうして呼びかけの瞬間に、人は権力に従属する主体として存在させられてしまうのだ。バトラーが注目するのは、警官による呼びかけのことばが、オースティンの言う発話内行為として、「ある種のアイデンティティ」を同時に生み出すということである（ibid.）。つまり呼びかけとは「主体を生み出す声」なのである（ibid.）。

バトラーは、呼びかけのもう一つの事例としてヘイトスピーチ（hate speech）を考察している。ヘイトスピーチ（hate speech）は、特定の「主体を従属的な位置に構築する」呼びかけである（バトラー 37）。単なる悪口とは異なり、しばしば社会的な権力勾配を背景にしている憎悪表現は、名指される特定カテゴリーに属する少数派を劣等な主体として構築することで、発話主である多数派を優等な主体として確証する。この意味で、憎悪表現は二重の主体化を行うと言える。だが他方でバトラーは、憎悪表現には発話内行為だけでなく発話媒介行為としての可能性も含まれていることを示唆している。バトラーによれば「クィア」（queer）という侮蔑語は「当初の目的とは正反対の意味となって引用され、逆の効果を演じる可能性をもつことを示している」（バトラー 33）。「クィア」は元々、異性愛規範から逸脱するとみなされた者を名指す侮蔑語だったが、名指される側が元の意味を、自分たちの存在を肯定する意味へと修辞的に組み替えてきた歴史がある。発話者の意図を、名指され貶された者が批判的に転用して、自己肯定的な意味へとズラしてしまったのだ。この時点で「クィア」は発話媒介行為として、事後的に、原初の意図に反する応答を引き起こしたと言えるだろう。

ここで我々は、呼びかけの三つ目の事例として「心臓のかけら」という表現を考察することができる。第一に、前述の二つの呼びかけと同様に、発話内行為として主体あるいはアイデンティティを生み出す。アイデンティティとは言語的な自己表象（私は～である）

5　フランス語のsujetにも英語subjectにも、名詞「主体」と形容詞「従属している」という二重の意味がある。

6　“Hey, you there.”を「おい、そこのお前」と訳してしまうと、あまりに威嚇的な含意が強いので、「ちょっと、そこのあなた」くらいが中立的であると思われる。もう少し穏当な警呼の例を挙げるならば、車やバイクを運転する人なら誰しも、路上で警察車両に呼び止められた時に、あるいは突如サイレンが鳴り響いた時に、気付かぬうちに交通違反をしたかもしれないと不安になった経験があるはずだ。

である。「私たちは心臓のかけら」という文もまた、集合的な自己表象（私たちは〜である）だった。それは、ひとりひとりの子どもを「心臓のかけら」として、合奏する子どもたちを「心臓」として、すなわち共同的な主体として言語的に存在させているのだ。この文は一種の宣誓文として、あるいは魔術的な呪文のように、本番に臨もうとする児童たちを「心臓のかけら」、すなわち合奏する共同主体として先取り的に力付け、存在させていたのだ。この呼びかけが警呼とも憎悪表現とも異なるのは、従属的な主体よりは解放的な、脱中心的な共同主体を存在させていること、また慣習的な表現ではなく、むしろ驚異の情に触発されたことばの慣用的ではない詩的な組み合わせであることによる（憎悪表現は使い古された陳腐な決まり文句である）。子どもたちは「心臓のかけら」と呼びかけることで、「心臓のかけら」という主体になった、すなわち「心臓のかけら」を生きたのである。

第二に、「心臓のかけら」は呼びかけであると共に、それ自体が応答でもある。それは、まさに呼びかけと応答の組み合わせである掛け合い（call and response）の産物だったのである。ここで我々は二つの呼びかけを相対的に区別しようとしている。すなわち、主体を生み出す声としての呼びかけ（発話内行為としての）と、事後的な応答を誘発する掛け合いのなかの呼びかけ（発話媒介行為としての）である。シンバル担当の児童から演奏者の子どもたちに宛てて語られた心臓の「一部」ということばに対して、演奏者の一人が心臓の「かけら」と応答した。「心臓のかけら」ということばは、先に論じたようにその場にいる演奏者全員へと開かれた主体化の呼びかけであると同時に、直接的にはシンバルの子への応答だったのである。あるいは、そもそも合奏に対する、それ自体は非言語的な驚異の情が原初の呼びかけとなって「心臓の一部」や「心臓のかけら」という言語的な応答を引き出したとも考えられる。このように「心臓の一部」が呼びかけとなり、「心臓のかけら」という応答は引き出された——より正確に言えば、応答を引き出したことで事後的に呼びかけが成立した。

興味深いことに、「心臓のかけら」という応答は、今度は呼びかけ（発話媒介行為としての）となって教室の外にも響いてしまっている。この映像作品 *Instruments of a Beating Heart* もまた、児童のことば「心臓のかけら」に呼びかけられて、映画的な言語で応答している。さらに言えば、この拙論もまた、子どもたちのことばとこの短編映像に呼びかけられ、その応答として書かれた。このように、掛け合いは呼びかけと応答の連鎖反応であり、時間と空間を超えた共同の詩作あるいは合奏のようなものでもあるだろう。あるいは、呼びかけとは、存在に仕掛けられた精度の低い時限爆弾のようなものかもしれない。いつどこで爆発（＝応答）が生じるのか分からず、最後まで不発であるかもしれず、不意に爆発した時点で実は仕掛けられたことが発覚するような爆弾である。

4. おわりに

果たして生成 AI は応答するだろうか。技術革新により回答の精度は上がっても、応答はしないだろう。生成 AI は問いかけに対して即座に何らかの回答をする。反社会的、反道徳的な質問とみなして AI が回答を拒否する旨を伝えてくる場合もあるが、ユーザーの入力に対して AI が全く無回答であること、つまり完全に沈黙することは、エラー以外では考えにくい。しかし人間と人間の間の呼びかけと応答は、本質的に偶発的な関係である。応答は意図的に引き起こせず、その内容も予測不能である。ある発話に対して、誰も応答しないこともあれば、「クィア」の場合のように、長い年月を経て事後的に、批判的な応答が生じる場合もある。ある発話に誰かが応答してしまったときにはじめて、遡って発話は呼びかけとなる。その意味で、我々のことばは応答の不測不可能性、すなわち他者の他者性にいつも晒されている。

我々のことばは音楽のようなものだ。奏でられたことばの音色は、誰の存在にも響かないこともあれば、誰かの存在に響くこともある。児童のことばとこの短編は、偶然にもそれを鑑賞した私の存在に響いた。このように拙論として応答してしまった以上、それらは呼びかけになったのである。偶然にも、この小論が届いてしまった人の心（あるいは心臓）には、どんな音色が響くのだろうか[7]。

7　私はこの小論を、いつの日か大人になった、今はまだ映画の児童と同じ小学一年生の娘に宛てるような想いで書いたことを、最後にこっそりと告白しておく。

参考文献

AdverTimes「『日本の“あたりまえ”は、なぜ世界に届くのか』長久允×山崎エマ、二人の監督が語る“個人的な視点”の力」2026 年 5 月 22 日
https://www.advertimes.com/20260522/article544780/
Byung-Chol Han, *Non-Things: Upheaval in the Life World,* translated by Daniel Steuer, Kindle ed., Polity, 2022.
Instruments of a Beating Heart. Directed by Ema Ryan Yamazaki, 2024. *YouTube,* uploaded by New York Times Opinion, 24 Nov. 2024,
https://www.youtube.com/watch?v=DRW0auOiqm4
『学校基本調査』「小学校の学校数、在籍者数、教職員数（昭和 23 年～）」e-Stat.
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/file-download?statInfId=000031852316&fileKind=0
ジャック・デリダ「人間科学の言説における構造、記号、遊び」『エクリチュールと差異』谷口博史訳、法政大学出版局、2022 年。
ジュディス・バトラー『触発する言葉：言葉・権力・行為体』竹村和子訳、Kindle 版、岩波書店、2026 年。
プラトン『テアイテトス』田中美知太郎訳、岩波書店、Kindle 版、1966 年。
山崎エマ『それでも息子を日本の小学校に通わせたい』新潮社、2026 年。

言語場論からみる日中文化の差異

――中国語教育への文化的アプローチ――



千葉商科大学基盤教育機構　非常勤講師
王　瑞来
WANG Ruilai

プロフィール

史学博士。1982 年、北京大学中文系古典文献专业を卒業。1990 年に来日し、学習院大学東洋文化研究所研究員に就任。2001 年より千葉商科大学の非常勤講師を務め、中国を中心とする歴史・文化および中国語を教える。河南大学講座教授などを歴任。これまでに中国語・日本語による著書・古籍整理書 34 部、学術論文 350 篇余を刊行している。

はじめに
漢字文化圏内の日本の独自的位置づけ

東アジア地域において長期的に形成された漢字文化圏の歴史的変遷を俯瞰すると、近代以降の政治的・社会的変革の波の中で、多くの地域が次第に漢字体系から離脱する過程を経験してきた。ベトナムはフランス植民地統治期にラテン文字を基盤とするクオックグール文字を公式表記体系として採用し、植民地政府の統治戦略と西欧文化浸透の推進により、漢字の使用範囲は現在寺社の額縁や古典文献研究の専門領域に限定されるに至っている。朝鮮半島においては15世紀にハングル文字が創製されたものの、長期にわたり知識人層の公式表記手段として漢字が機能してきたが、近代の民族意識の高揚と共にハングル文字の普及が加速し、漢字の使用領域は大幅に縮小し、現在も漢字教育の存続をめぐる学術的論争が継続している。

こうした歴史的潮流の中で、日本は明治維新以来、戦後期の一時的な漢字制限論議を経た後も、一貫して漢字を自国の言語体系の中心的構成要素として維持し続けてきた唯一の国家であると考えられる。日本が漢字体系を放棄しなかった要因は多面的である。明治期の言語改革論議においては、一部の知識人層からローマ字化やカタカナ単独表記を主張する声が提起され、当時の欧化主義的風潮の中で、西洋先進文明の吸収効率を高めるため漢字習得の時間的コストを削減すべきという主張も一定の社会的支持を得ていた。しかし最終的に社会的共通認識として、漢字の表意特性が日本語の音声的曖昧性を補完し、膨大な同音異義語による意味混乱を回避する上で不可欠であるという判断が確立された。例えば音韻「きこう」一つを取り上げても、「気候」「機構」「帰港」「寄稿」「紀行」「起工」など数十種類の異なる意味が存在し、漢字表記を欠いた場合、文脈の中で瞬時に意味を判別することは極めて困難となる。特に公的文書や学術論文など正確性が要求される領域において、同音異義語の混同が誤解や社会的リスクを引き起こす可能性は無視できず、この言語的特性が日本における漢字存続の構造的基盤となっている。

この漢字文化圏の中で日本が占める独自の位置づけは、単なる言語表記の選択に留まらず、文化全体の発展軌道を基礎的に規定してきた。中国において漢字は数千年にわたり連続的に発展し続け、社会のあらゆる階層の文化的記憶を蓄積する容器として機能してきたのに対し、日本において漢字は外来の文化的資源として導入され、固有の言語体系の中で長期的な適応と改造の過程を経験してきた。この違いが、両国の文化が共通の漢字を使用しながらも、全く異なる進化の道筋をたどる基礎的な出発点となっていると考えられる。本研究はこの歴史的事実を出発点として、言語表現の細部に埋め込まれた文化的差異を解明し、その成果を中国語教育の実践に接続することを目的とする。

1. 日中漢字簡略化の共通基盤と相違性

伝統的な旧字体（繁体字）を基準とした場合、戦後の日本と中国における漢字字形の変革は、それぞれ独立した政策プロセスの下で推進された。日本は1946年に『当用漢字表』を公布し、1850字を日常使用漢字の範囲に限定した上で、一部の文字に対して独自の簡略化を実施した。当時の日本政府は、複雑な旧字体の使用を制限することで義務教育段階における漢字習得の負担を軽減し、戦後復興期に速やかに国民の文化水準を引き上げる政策目標を設定していた。一方中華人民共和国は1950年代から体系的な漢字簡略化運動を展開し、1956年に『漢字簡略方案』を正式に公布し、全国的に簡体字の普及を推進した。当時の中国において数億人規模の文盲人口を削減することが喫緊の社会的課題となっており、簡体字の導入は大衆の読み書き能力向上に顕著な効果を発揮した。

両国の漢字簡略化政策は完全に独立した意思決定プロセスを経て策定されたにもかかわらず、最終的に定着した簡略字形の多くは顕著な類似性を示している。この現象は、両国の簡略化原則が共に民間で長期的に流行してきた俗字の採用、あるいは草書字形の楷書化という同一の路線を共有していることに起因する。両国の言語政策担当者が、数世紀にわたり民衆の間で自然発生的に広まった書記容易な字形を改革の基礎としたことで、多数の偶然的一致が生まれたのである。例えば「会」「学」「国」などの基礎的常用漢字は両国でほぼ同一の字形に簡略化され、漢字体系の知識を有する者であれば国境を越えて瞬時に意味を把握できる共通的認識基盤となっている。もちろん完全な一致が存在するわけではなく、「対」と「対」、「団」と「団」、「単」と「単」のように細部の字形に差異が存在する文字も存在するが、全体的な類似性の度合いは差異性を大幅に上回っている。

漢字という共通の表記体系の存在は、世界の多くの地域がラテン文字を共通表記手段とする状況の中で、日中両国の間に他の国家間には存在しない特殊な帰属意識を形成してきた。同一の文字体系を共有し、古典文献の典故を共通の知識基盤とし、漢詩の意境を共有的に理解できるという経験は、両国の人々の間に「同一の文化圏に属する」という深い連帯感を醸成してきた。しかしこの共通的帰属意識は、長期的に多くの学術的誤解を生み出す土台ともなってきた。その誤解とは「日中は基礎的に同一の文化を共有し、日本文化は中国文化から派生した支流に過ぎない」という単純化された認識である。この認識に対し、漢字を共通の下地としながらも、長期的な歴史的変容の中で両国の文化が顕著な独自性を獲得してきたプロセスを実証的に解明できると思われる。

漢字簡略化の過程における共通性と相違性は、単なる字形の問題に留まらず、両国の文化政策の基礎的な指向性の違いを反映している。中国の漢字簡略化は、数億人規模の大衆を対象とした国家的な文化啓蒙運動の一環として推進され、社会全体の教育水準を速やかに引き上げることを最優先の目標としていた。この過程においては、旧字体の筆画を大胆に削減し、習得の難易度を最大限に低下させる方向で政策が進められた。一方日本の漢字制限政策は、既に高い識字率を達成していた社会を背景に、漢字の使用範囲を合理的に限定することで、教育の効率性を高めると同時に、漢字体系の持つ文化的価値を維持することを重視していた。この政策指向性の違いが、両国の簡略化後の漢字体系の特徴に明確に表れている。中国の簡略字の中には旧字体との字形的連続性が比較的薄い文字が少なくないのに対し、日本の新字体は旧字体の構造を大きく損なうことなく、筆画のみを部分的に簡略化する方向で設計されている例が多数存在する。

こうした漢字政策の違いは、両国の文化的自己認識の差異と深く結びついている。中国において漢字は自国文化の根源的な表現手段であり、数千年の歴史を通じて連続的に発展してきた自明の存在であるのに対し、日本において漢字は外来の文化的資源として導入されたものであり、自国の言語体系の中でその役割を常に調整し続ける必要がある相対的な存在として認識されてきた。この基礎的な認識の違いが、両国が漢字と向き合う姿勢の差異を生み出し、それぞれの独自の漢字文化を形成する原動力となってきたのである。

2. 共通文化基礎から独自文化への変容プロセス

歴史的事実を踏まえると、西暦57年に後漢光武帝が授与した「漢委奴国王」金印に始まり、7世紀から9世紀にかけて断続的に派遣された遣隋使・遣唐使の時代まで、日本は中国からの文化的影響を全面的に受容

してきた。当時の遣唐使団には多数の留学生・留学僧が含まれ、彼らは中国の都城において数年から数十年にわたり学術研究を行い、帰国後に政治、文化、宗教の各分野において新たな制度と技術を日本社会に定着させる中心的役割を担った。日本は漢字体系のみならず、隋・唐の律令制度を参考に政治制度を整備した。その結果、中央集権的な律令国家が形成された。また、均田制や租庸調制などの制度も導入され、当時の日本社会の制度的骨格を形成した。

漢字という文化的担体を媒介として、儒学、仏教、道教といった思想体系のみならず、節句の風習、飲食の作法、建築様式、絵画技法に至るまで、多様な文化的要素が東シナ海を越えて日本に伝播し、隣国の社会生活を全面的に彩った。例えば現在日本で広く普及している端午の節句や中秋の名月の風習も、元々は中国から伝来した文化的要素が長期的な適応プロセスを経て日本の社会的土壌に根付いた結果である。中国の端午節が主に屈原を記念する行事として発展したのに対し、日本の端午の節句は男児の健やかな成長を祈念する行事へと変容し、鯉のぼりや鎧兜を飾る独自の風習が形成された。こうした細部の変容の積み重ねが、共通の起源を持つ文化要素を次第に異質な姿へと進化させていく。この歴史的事実を踏まえ、「日本文化の形成過程において、中国文化が基盤的役割を果たした」という命題を提示したい。すなわち日本文化の遺伝的基盤には中国文化の影響が色濃く見られる。

しかし共通の遺伝的基盤を共有しているからといって、二つの文化が同一の性質を持つわけではない。生物の遺伝子が長期的な環境適応の中で変異を重ねるように、中国から伝播した文化要素も、日本の土壌に定着してから千年以上の歳月の中で、日本特有の自然風土、島国の地理的条件、独自に発展してきた民俗と政治状況によって徐々に改造されてきた。島国として大陸から隔絶された地理的環境は、大陸における戦乱や民族移動の影響を受けにくい安定した社会環境を生み出し、外来文化要素を長期的な時間をかけて自国の文化体系に融合させる余裕を提供した。

例えば仏教の発展プロセスを見ると、中国において仏教は大乗仏教の教義を中心に発展し、民衆の間では観音菩薩への信仰が広く浸透してきた。一方日本に伝来した仏教は、奈良時代の南都六宗を経て、平安時代に空海と最澄が開創した真言宗と天台宗が独自の発展を遂げ、鎌倉時代には浄土宗と禅宗が武士階級の間に深く根付いた。一般的に中国の禅宗が大衆的な教義体系として広まったのに対し、日本の禅宗は茶道、華道、書道と深く結びつき、「わび・さび」という独自の美意識を生成した。これは中国から伝来した思想が日本の社会的土壌の中で全く新しい姿へと変容した典型的な事例である。

漢字体系においても同様の現象が観察される。同一の漢字であっても、中国と日本における意味的外延には微妙な差異が存在する例は枚挙に暇がない。例えば「家」という文字について、中国においては血縁関係を核心とする家族の集合体を指すのに対し、日本語の「家」は江戸時代以降「家制度」と結びつき、血縁関係を超えて家督を継承する婿養子や使用人までを包含する共同体概念へと発展した。こうした意味的変異の積み重ねが、同一の漢字体系を使用しながらも異質な文化世界を形成していったのである。

さらに明治維新以降の「脱亜入欧」という国家的スローガンの下で、日本は西洋文明の急速な吸収を推進した。江戸時代の武士階級が重視してきた「和魂漢才」の理念は次第に衰退し、「和魂洋才」という新たな価値観が社会全体に普及した。多数の知識人が西洋の学術と技術を熱心に学び、都市の建築様式は西洋化され、衣食住のあらゆる領域で西洋化が進行した。この西洋文明の強大な影響の下で、日中両国の社会発展の歩みは次第に乖離し、過去数百年にわたる文化的漸変と相まって、両国の文化的差異は次第に明確な形で顕在化するに至った。

この文化変容の過程をより詳細に観察すると、日本が外来文化を受容する際に採用してきた独特の「選択的融合」のメカニズムが明らかになる。中国から伝来した儒学の思想を例に取ると、中国において儒学は政治体制のイデオロギー的基盤として機能し、「仁」を核心とする道徳体系が社会全体の規範として浸透してきた。しかし日本に伝来した儒学は、「仁」の概念を相対的に軽視し、「忠」と「礼」の概念を中心的な価値として再解釈された。この改造によって、儒学は日本の天皇制的な政治構造と整合性を持つ思想体系へと変容し、独自の道徳規範を形成することになった。こうした外来思想の現地化のプロセスは、単なる受容でもなければ単なる拒絶でもなく、自国の社会的ニーズに合わせて思想の中心的部分を組み替え、既存の文化体系

と有機的に結合させる高度な文化的創造の営みである。

また文学の領域においても、この文化変容のプロセスは顕著に観察される。中国において古典文学の主流は歴史的叙事詩や社会的現実を描いた長編小説であり、大きな時代の流れの中で人間の運命を描くことを重視してきた。一方日本の古典文学は、『古事記』『日本書紀』『万葉集』を起点として、自然の細部の描写や個人の内面的な情感の表現を重視する方向で発展してきた。平安時代に生まれた『源氏物語』は、世界最古の長編小説の一つとして知られているが、その内容は政治的な大叙事ではなく、宮廷社会の中の人間関係と情感の機微を描き出している。こうした文学的指向性の違いは、両国の文化の基礎的な関心の所在の差異を反映しており、言語表現のスタイルにも深い影響を与えている。

3. 言語表現に現れる中心的文化差異

言語は文化の鏡像である。言語表現の背後には、その言語を使用する人々の長期的な歴史の中で蓄積された文化的記憶が暗黙裡に埋め込まれている。したがって言語表現の細部の差異を観察することで、表面的には認識しにくい深層の文化的差異を明確に把握することが可能となる。ここでは人称代名詞と指示代名詞を分析の切り口として、日中文化の重要な差異を実証的に解明する。

中国語の人称代名詞である「我们（私たち）」「你们（あなたたち）」「他们（彼ら）」は、日本語において完全に同義の対応表現が存在する。「私たち」「あなたたち」「彼ら」という表現は、意味の外延と使用状況がほぼ完全に一致している。しかし唯一「咱们」という表現だけは、日本語の体系の中に完全に対応する表現が存在しない。この言語表現の不在は、日中文化の重要な差異を考察する手がかりとなる。

対応する日本語表現が存在しないため、日本の中国語教育者は長期間「咱们」の解説に困難を抱えてきた。多くの教育者は「会話の相手を含む『私たち』のことである」「『私たち』に『あなたたち』を加えた集合体である」といった文法的解説を試みてきた。これらの解説は文法的に誤りではないものの、日本の学習者はこの説明を聞いても往々にして理解に困難を覚える。彼らの認識の中には「私たちは私たち、あなたたちはあなたたち。なぜ二つのグループをわざわざ一つの言葉で包摂しなければならないのか」という素朴な疑問が生まれ、文法的解説をいくら重ねても解消されることがない。

この現象が示しているのは、言語の定義的解説が不十分なため理解できないのではなく、その言語表現の背後に存在する文化的論理を共有していないため、いかなる言語的説明を尽くしても真の意味が伝達されないという事実である。日本文化の体系の中に存在しない感覚と論理は、言語そのものの定義をいくら説明しても、相手の認識構造の中に浸透することはない。この段階において、言語教育は必然的に文化的射程の中に踏み込まなければならない。文化的背景を解明して初めて、その言語表現が生成された必然性を理解することが可能となる。

「咱们」という表現は、中国文化の特徴を極めて典型的に体現している言語的標本である。数千年にわたり中国社会の基盤を支えてきたのは農耕文明であり、人々は同一の土地に定住し、世代を超えて同一の村落で生活してきた。この文化的背景の下では、人と人の関係は極めて親密であることが要請され、「親密無間」という概念で形容できるほど近距離の共同体構造が形成されてきた。農耕社会においては共同で灌漑施設を整備し、農繁期に相互扶助を行う必要性が恒常的に存在し、共同体成員間の一体感が生存のための中心的条件となっていた。

この共同体の論理の中では、「我们」という表現を使用すれば必然的に「你们」を排除することになり、「你们」という表現を使用すれば「我们」を排除することになる。二つのグループを明確に分離する言語表現は、同一の村落で長期的に共同生活を送る人々の間では「疎遠である」「距離を置いている」という否定的な印象を与えてしまう。それゆえ「咱们」という表現が生成され、会話に参加する双方の立場を巧みに一つの言葉の中に包摂することで、互いが同一の仲間であり、同一の運命を共有していることを示そうとしたのである。例えば農村地域で隣人と会話する際、「我们去田里干活，你们也一起去吧」（私たちは田んぼへ仕事をしに行くので、あなたたちも一緒に行きましょう）と表現すれば、互いを別個のグループとして区別しているように聞こえ、疎遠な印象を与える。しかし「咱们

一起去田里干活吧」（私たちは一緒に田んぼへ仕事をしに行きましょう）と表現することで、全員が同一の共同体の一員であることを感得させ、相互の距離を瞬時に縮小する効果を生み出す。この農耕社会の共同体論理こそが、「咱们」という表現が生成され、数千年にわたり存続してきた文化的土壌なのである。現代の都市化が高度に進展した中国においても、言葉の慣性力によって、この表現は日常会話の中で依然に頻繁に使用され、人と人の間の親密性を表現する重要な手段となっている。ビジネス交渉の場面においても「『咱们』双方の利益を考慮しましょう」という表現を用いることで、対立する立場を超えた協力意識を示し、交渉の雰囲気を緩和する機能を果たしている。

では一方の日本語には、なぜ「咱们」のような言葉が存在しないのだろうか。この疑問に答えるためには、日本文化の特質を深く掘り下げる必要がある。本稿では、日本文化を次のように捉える。一つの見方として江戸時代の町人文化の伝統を受け継ぎ、明治以降の西洋文明の影響を強く受け入れた、近代都市文明の特徴を色濃く持つ文化だ。こうした背景の下で形成された社会は、個人の個性を重んじ、他人のプライバシーに深く配慮し、人と人の間の境界線を明確に引くことを美徳とする価値観を育んできた。

日本社会の中では「私は私、あなたはあなた」という区別が常に意識され、互いの領域を不必要に侵さないことが礼儀の基本とされている。曖昧に全員を一つの塊のように包み込んでしまう言葉は、相手の個性を無視しているように感じられ、時には失礼にさえ思われてしまう。だから日本語の中には、会話の相手を含んだ「私たち」を特別に区別する言葉が必要とされず、「咱们」に相当する言葉が生まれることがなかったのだ。この違いは単なる言語の違いではなく、基礎的に文化の違いが生み出した必然的な結果なのである。

「咱们」という一つの人称代名詞だけでなく、日中の言語表現を注意深く比較していくと、同じように文化の差異を反映した興味深い現象が数多く見つかる。その代表的な例が指示代名詞の使い方だ。

日本語で「这」にあたる「これ」と「那」にあたる「それ」「あれ」は、実際の日常会話の中での使い方が中国語と大きく異なっている。例えば日本語で「これはなんですか？――それは本です」という一組の会話は、日本人から見れば全く自然で誤りのない表現だ。だがこの会話をそのまま字面通りに中国語に翻訳すると「这是什么？――那是书」となる。この中国語の会話を聞いた中国人は誰もが違和感を覚え、「答えが質問に合っていない」と感じるだろう。中国語の論理の中では、目の前にある同じ一冊の本を指しているのであれば、問いが「这是什么」と聞いたのなら、答えも必ず「这是书」と「これ」を使わなければならない。問いと答えの指示代名詞が一致して初めて、会話が論理的に成立するのだ。

ではなぜ日本語では、目の前にある同じ物を指しているにもかかわらず、問い手が「これ」と言い、答え手が「それ」と言うことができるのだろうか。この現象を理解するためには、再び言語表現の背後に隠れた文化の論理を探らなければならない。先に日本語に「咱们」のような言葉が存在しない理由から、日本文化が人と人の立場の明確な区別を重んじていることを分析したが、指示代名詞の使い方にも全く同じ文化的論理が貫かれている。

日本語の「これ」と「それ」は、単に物との距離を表す言葉ではない。それぞれが会話に参加している二人の異なる立場を代表しているのだ。「これはなんですか」と問いかける時、「これ」は問い手の立場から見た物を指している。一方で「それは本です」と答える時の「それ」は、答え手自身の立場から見て、相手の側にある物を指している。二人の立場が異なることを明確に示すために、同じ一つの物であっても二人は異なる指示代名詞を使うのだ。

この表現の背後には、近代都市文明の中で育まれた人と人の接し方の原則が隠れている。相手の立場と自分の立場を明確に区別し、相手の領域を尊重する。物理的な距離ではなく、心理的な距離を適度に保つことで、相手に敬意を示す。これは日本社会特有の礼儀の表現方法なのだ。表面的には物の位置を指しているように見える指示代名詞の使い方が、実は人と人の間の微妙な距離感を調整する文化的な装置として機能しているのである。

日中の言語表現が映し出すこうした文化の異同を長年観察してきた私は、物理学の電場の理論を参考に、20年前に『言語場論』という論文を執筆し発表した[1]。この理論の中では、会話が行われる空間を一つの「場」として捉え、日中両国の会話の論理の基礎的な違いを説明している。中国語の会話場は「同」を原則として

1　「会話場について――言語場論（その１）」,『千葉工業大学研究報告（人文編）』2001 年第 38 号、『中国関係論説資料』第 45 号に収録）

おり、会話に参加する全員が共通の立場に立ち、互いの親密さを示すことで場の調和を保つ。一方の日本語の会話場は「異」を原則としており、会話に参加するそれぞれの人が自分の独立した立場を守り、互いの違いを尊重することで場の礼儀を保つのだ。

中国語の会話の中で「同」を示そうとする傾向は、「咱们」という人称代名詞が生まれただけでなく、日常会話のあらゆる細かな部分に表れている。会話の中で意図的に相手と同じ動詞や同じ名詞を選び、使う言葉の一致性を保つことで、自分が相手と同じ立場に立っていることを示そうとするのだ。指示代名詞の問答で「これ—これ」「あれ—あれ」と一致させなければならないのも、まさにこの「同」の論理に基づいている。

この特徴は初対面の時の名前の問答の中にもはっきりと見て取れる。中国語で「(お名前は何とおっしゃいますか)」と聞かれた時、論理的に厳密に考えれば、「姓」と「名前」は異なる概念なのだから、「我姓○○(私の姓は○○です)」と答えるのが正しいように思える。だが実際の日常会話の中では、「你叫什么名字(名前は何ですか)」と聞かれたら必ず「我叫○○(私の名前は○○です)」と答えなければならない。もし「我姓○○(私の姓は○○です)」と答えてしまえば、相手は強い違和感を覚え、「この人はわざとよそよそしい態度を取っているのか」と感じてしまう。問いの中で使われた言葉と、答えの中で使われる言葉が完全に一致していなければ、会話の場の親密さが損なわれてしまうのだ。

このように言語表現の細かなルールを通して中日の文化の差異を図形で表現すると、非常に分かりやすい。中国語の会話場は一つの同心円で、全ての会話参加者が同じ円の中心に集まり、共通の立場を共有している。円の中の全ての点が互いに密接に結びつき、境界線がほとんど存在しない。一方の日本語の会話場は、互いに少しだけ重なり合った二つの独立した円だ。二つの円は完全に分離しているわけではなく、重なり合った部分が共通の話題となるが、それぞれの円には自分自身の中心が存在し、互いの境界線は明確に保たれている。この図形の違いこそが、両国の文化の基礎的な構造の違いを最も簡潔に表しているのである。

こうした言語の細かな現象を通して分かるのは、日本が千年以上にわたって漢字を使い続け、多くの文化的要素を中国から移植し、文化の下地に濃い中国文化の痕跡を残しているにもかかわらず、両国の山と川は異なり、風土は異なり、長い時間の中で全く異なる文化の変異が生まれてきたという事実だ。「風月同天」という言葉が示すように、同じ月と風を共有していても、その下で暮らす人々の文化の感覚は次第に異なる方向へと進んでいくのだ。

文化比較の研究においては、大きな理論を立てて空泛な論述を重ねるよりも、こうした日常の言語表現の細かな点から観察を積み重ねていく方が、より確実で重要な結論に到達できる可能性が高い。言葉の小さな違いの背後には、何千年もの歴史の中で積み重ねられた文化の深い記憶が隠されているからだ。

4. 中国語教育に文化的射程を導入する実践的方法

ここまでの分析を踏まえると、伝統的な中国語教育の枠組みが直面してきた基礎的な課題が明らかになる。従来の教育モデルは、主に文法規則の解説、語彙の暗記、発音の矯正を中心に構成されてきた。このモデルは学習者に基礎的な言語運用能力を効率的に習得させるという点で大きな成果を上げてきたが、言語表現の背後に存在する深層の文化的論理を伝達するという点において重要な限界を持っている。

したがって今後の中国語教育は、単なる言語技能の伝達の領域を超え、文化的射程を教育体系の中に体系的に導入する必要がある。この教育改革を実践するためには、以下の三つの段階的な方法論を構築することが不可欠である。

第一に、「同形異義語彙」の体系的なカリキュラムを開発することである。日中両国で共通の漢字を使用しながら意味が異なる語彙を系統的に分類し、それぞれの語彙の意味的差異が生まれた歴史的背景と文化的理由を解説する教材を作成する。この教材を初級段階の教育の早い時期から導入することで、学習者が最初から「漢字の意味は日中で同一ではない」という認識を身につけ、誤解の種を事前に除去することができる。

第二に、人称代名詞・指示代名詞や挨拶表現などの日常的なコミュニケーション場面において、表現の意味だけでなくその表現が使用される文化的文脈を詳細に解説する教育方法を導入する。例えば「咱们」という表現を教える際には、単に文法的定義を説明するだけでなく、中国の農耕文化の特徴、共同体の中で人と

人の距離感がどのように構築されているのか、その表現を使うことで相手に伝わる心理的なメッセージは何か、といった内容まで踏み込んで解説する。これにより学習者は単なる言葉の使い方を理解するだけでなく、その言葉を発することの文化的意味を真に把握することができる。

第三に、異文化コミュニケーションの実践的な演習を教育体系の中に組み込むことである。ロールプレイの形式で、日中両国の人々が遭遇しやすい典型的なコミュニケーションの場面を設定し、学習者に両方の立場を体験させる。この演習を通じて、学習者は自国の文化的論理と中国の文化的論理の差異を身体的に体感し、言語の背後にある文化的な違いを直感的に理解することが可能となる。

こうした教育方法の改革は、単に中国語教育の質を向上させるだけでなく、日中両国の人々の間の相互理解を深める上でも極めて重要な意義を持っている。言語表現の細部に埋め込まれた文化的差異を解明し共有することで、両国の間に長期的に存在してきた誤解の多くを解消し、より健全で持続可能な異文化間関係を

おわりに

構築するための基礎を築くことができる。

言語の使用は一見すると小道のような地味なものに見えるが、文化を理解する上で決して無視することはできない重要な道だ。今回挙げた「咱们」や指示代名詞の例は、中国語を初学する人が誰もが最初に出会う極めて基礎的な表現ばかりだ。だが多くの中国語教育の現場では、こうした表現の字面の意味だけを教えて、その背後に隠された文化的な論理を深く掘り下げることはほとんどない。

実際のところ言語は単なるコミュニケーションの道具ではなく、文化そのものの担い手なのだ。言葉の一つ一つの背後には、その土地の人々が何世代にもわたって積み重ねてきた生活の知恵、美意識、人と人の接し方のルールが凝縮されている。文化の領域まで踏み込んで初めて、その言語の表現を真に理解することができる。ただ単に話せて書けるだけでは、言語に対する認識は表面的な理解にとどまってしまう。「なぜこのような表現になるのか」という文化的な理由までを理解して初めて、その言語の真の意味を自分のものにすることができるのだ。

外国語を学ぶ全ての人は、外国語を単なる技術的な道具としてだけ捉えるのではなく、異なる文化を理解するための窓として捉えるべきだ。教える側も学ぶ側もこのような認識を共有することで、言語の壁を越えて真の相互理解へと進むことができる。つまり、言語教育は単なる記号体系の伝達に留まるべきではないということである。言語は文化の生きた容器であり、その一つ一つの表現の中には何世代にもわたって蓄積されてきた人々の生活の経験、価値観、思考様式が凝縮されている。したがって真の意味で外国語を習得するためには、その言語の背後に存在する文化の論理を深く理解する必要がある。

抄 録

本研究は、漢字文化圏における日本の独自性を踏まえ、日中両国が共通の漢字文化を基盤としながら異なる文化的発展を遂げた過程を考察し、その成果を中国語教育へ応用することを目的とする。まず、日中の漢字政策や文化受容の歴史を概観し、日本文化が中国文化を基盤としつつ独自の変容を遂げたことを明らかにする。次に、人称代名詞「咱们」や指示代名詞などの言語表現を分析し、中国語には共同体意識に基づく「同」の論理、日本語には話者間の境界を尊重する「異」の論理が反映されていることを示す。さらに、これらの文化的差異を踏まえ、中国語教育では文法や語彙の習得だけでなく、言語表現の背後にある文化的論理を体系的に教授する必要性を論じる。言語を文化の担い手として捉え、文化理解を教育に組み込むことが、学習者の運用能力の向上と日中相互理解の深化につながることを提案する。

イベント報告

第７回ユネスコスクール関東ブロック大会の報告



千葉商科大学基盤教育機構　准教授
影浦　亮平
KAGEURA Ryohei

プロフィール

1981 年愛媛生まれ。京都大学卒業後、ストラスブール大学（フランス）で修士課程、博士課程を修了。博士（哲学）。稲盛財団、京都外国語大学、クエンカ大学（エクアドル）等を経て、21 年から現職。専門は哲学・倫理学。

第７回ユネスコスクール関東ブロック大会が 2026 年 8 月 4 日に千葉商科大学で開催された。主催は千葉商科大学であり、共催は成蹊大学、創価大学、玉川大学、東海大学、かながわユネスコスクールネットワーク（KAN）であった。さらに、協力は公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）、後援は ESD 活動支援センター、関東地方 ESD 活動支援センター、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）、千葉県高等学校教育研究会 ESD 部会、市川市教育委員会、市川市ユネスコ協会、八千代市教育委員会であった。「生きること　食べること」を本大会のテーマとし、以下のようなスケジュールで大会は進行した。

	702 教室	701 教室	711 教室	731 教室	702 教室前
10 時	全体挨拶　宮崎緑 学長 趣旨説明　影浦亮平 准教授 **基調講演　小口広太 准教授** サステナブルな社会をつくる食と農				
11 時	**特別対談：千葉商科大学＆自由の森学園、学校が挑むサステナビリティ ～「社会を変えたい」学生たちと本気で歩んだこれまでとこれから～** 登壇者：千葉商科大学 手嶋進教授／自由の森学園 鬼沢真之 理事長／両校の生徒各1名 ファシリテーター：沖山敬（株式会社UPDATER）	**常見陽平教授スペシャルレクチャー いま、日本で「将来の夢」を考えるのはなぜつらいのか? 会社と社会、人の変化を捉える**			
12 時	昼　休　み				
13 時	**活動発表①**　司会：中倉智徳准教授 **千葉商科大学エシカル学生クラブ**「エシカル学生クラブの取り組み」 **湘南学園小学校**「僕たちの、未来への挑戦 2025 ／ 4 年生ユネスコチャレンジ Project」 **和洋九段女子中学校高等学校**「和洋九段の ESD ～シンガポール修学旅行を通して学ぶ SDGs ～」 **成蹊学園①**「成蹊学園の環境を活かした中高大連携と地域連携 その１：ケヤキがつなぐ、自然と食のひととき」	**分科会① 千葉県高等学校教育研究会 ESD 部会** 千高教研 ESD 部会の歩みと「高校生による日韓ユネスコスクール協働・共同スタディツアー」について	**分科会③ 玉川大学教育学部 大妻中野中学校・高等学校 東京都立山崎高等学校** 「食べること」から見えてくる持続可能な未来 ―ユースによる SDGs授業提案	**分科会④ 創価大学 ユネスコクラブ** 選んで考える! 食文化と持続可能な未来	
14 時	**活動発表②**　司会：中倉智徳准教授（権永詞教授が急用で変更） **成蹊学園②**「成蹊学園の環境を活かした中高大連携と地域連携 その２：キャンパスの資源を起点としたサステナブル農体験」 **常磐大学高等学校**「私たちとカンボジア～海外研修旅行後の成長～」 **市原中央高等学校**「エコキャップ運動×参加型デジタル管理システムの取り組みについて」	**分科会② 千葉商科大学** 奥寺葵教授ゼミによる研究発表 働くことから考える、持続可能な未来 会社をすぐ辞める？休みは取れる？大学生が、若者の働き方から持続可能な社会を考えます。			**ポスターセッション**
15 時					
16:20	まとめ・講評、表彰式、閉会				

以上のプログラム以外に、環境団体 SONE の学生がキャンパスにある省エネ･創エネ関連設備を案内するツアー（所要時間：30 分程度）が 12:00 と 13:00 に実施された。また、ポスターセッションの詳細は以下の通りである。

	ポスターセッション参加校	発表テーマ
1	八千代市立大和田南小学校	未来を生きる私たちのために
2	八千代市立大和田西小学校	おいしさで地域を盛り上げ隊
3	八千代市立萱田中学校	ユネスコスクールとしての取組
4	創価高等学校①	福島学
5	創価高等学校②	核廃絶問題
6	神奈川県立有馬高等学校	総合的な探究の時間における有馬 ESD の実践
7	宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校	藍から広がる“あい”の輪
8	和洋九段女子中学校高等学校	シンガポールの企業訪問
9	東京都立多摩桜の丘学園	「持続可能な社会の創り手になろう！」SDGs で取り組む「地域・国際社会」貢献・活用・協働・発信の実現に向けて
10	新座市立片山小学校	地域と企業とともに育む“生きる力”―「産官学民」連携の実践―
11	自由の森学園	自由の森学園の取り組み
12	千葉県立成田西陵高等学校	日本茜を題材とした地域課題の解決に向けた探究学習の実践
13	千葉商科大学学生環境団体 SONE	学外に向けたカーボンニュートラルの啓発活動
14	千葉商科大学エシカル学生クラブ	エシカル学生クラブの活動
15	千葉商科大学人間社会学部「プロジェクト実習」:人社プロモーション・プロジェクト	サステナブルな社会をつくる人社の魅力を発信
16	千葉商科大学人間社会学部「プロジェクト実習」:防災コミュニティ・プロジェクト	大学生の防災意識と備えの実態に関する調査報告
17	千葉商科大学人間社会学部「プロジェクト実習」:地域探求型メタバース・プロジェクト	高校生とつくる須賀川メタバース観光
18	千葉商科大学人間社会学部「プロジェクト実習」:市川観光プロモーション・プロジェクト	市川の観光魅力の考察と情報発信
19	千葉商科大学人間社会学部「プロジェクト実習」:地域の子育て共創プロジェクト	大学生がつくる夏休みの子どもの居場所
20	千葉商科大学人間社会学部「プロジェクト実習」:ペダル踏み間違い防止 PJ	“踏み間違え事故防止を目指す探求―アクセルブレーキ表示装置を例に考える―”
21	千葉商科大学人間社会学部「プロジェクト実習」:域学連携～地域の居場所作り～	地域のサードプレイス
22	千葉商科大学人間社会学部「プロジェクト実習」:有償ボランティア・プロジェクト	支援活動への謝礼金に関する調査報告
23	千葉商科大学人間社会学部「プロジェクト実習」:アドベンチャーツーリズム・プロジェクト	観光が地域社会に与える影響
24	千葉商科大学人間社会学部「プロジェクト実習」:いちかわアートイベント・プロジェクト	アートと地域をつなぐこころみ
25	千葉商科大学人間社会学部准教授　藤井紘司	原爆遺産としての〈いきもの〉の社会学的研究被爆樹木が編む「記憶の場」の可能性

当日の総参加者数は 296 名となった（あくまで受付を済ませた方がカウントされていて、実数はもしかするともう少し多かった可能性がある）。また、県別のトップ 3 は、①東京都：115 名、②千葉県：113 名、③神奈川県：7 名だった。当日は大過なく成功裡の下、終了することができた。

経済研究所

女性労働力参加とケア責任をめぐる制度と労働観



千葉商科大学商経学部　教授
奥寺　葵
OKUDERA Aoi

プロフィール

千葉商科大学商経学部教授。人的資源管理・女性労働を専門とし、ワーク・ライフ・バランス、育児休業取得に伴う欠員対応と要員管理等を研究。分担執筆に『ワークライフ・インテグレーション』（ミネルヴァ書房、2021 年）など。

はじめに

女性の就業機会は、この数十年のあいだに大きく広がった。男女雇用機会均等法、育児・介護休業法、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章、女性活躍推進法などが整備され、就業継続を支える制度的条件は拡充してきた[1]。他方、家事、育児、介護など生活を支えるケアの責任は、なお女性に偏りやすい。女性には雇用労働への参加と家庭内の無償労働が同時に期待されている。

この二重の要請は、制度を増やすだけで解消する問題ではない。そこには、何を労働とみなし、働く人の生活を企業や社会がどのように位置づけるのかという、より基底的な労働観がかかわっているからである。

2025年度定常的プロジェクト「女性労働力参加とワーク・ライフ・バランスの動態的研究」は、性別役割分業と労働観が歴史的に形成され、制度や社会慣行のなかで持続・変容する過程を検討した。本稿では、その一環として筆者が進めた、女性の「社会進出」とワーク・ライフ・バランス（以下、WLB）が前提とする労働観に関する研究を報告する[2]。

1. プロジェクトが問い直したもの

本プロジェクトは、労働の捉え方と生活上の責任の分担に着目する。これらは、制度、組織、家族規範、日常的実践を通じて形成される。本稿では、労働を雇用労働に限定せず、家庭内の無償労働も含めて捉える。雇用労働と家事、育児、介護、地域活動などは、いずれも生活の一部である。

職業生活と家庭生活の境界をめぐる先行研究は、両領域の分離と統合、境界の柔軟性、浸透性、日常的な役割移行に注目してきた。境界理論とワーク／ファミリー境界理論は、個人が両領域の境界を設定し、越境し、調整する過程を説明する[3]。本研究は、これらの知見を踏まえる。雇用制度、企業組織、家族規範に組み込まれた労働観を検討する。

この視角から、本プロジェクトでは、古代ギリシアの公的領域と家政の区分、東アジアの家族観・社会政策、現代日本の女性労働と WLB を、それぞれの専門分野から検討した。古代から現代までを一方向の影響関係で結ぶことが目的ではない。異なる時代・社会において、公的領域の活動と家庭内の活動、有償労働と無償のケアがどのように区分され、誰に担われ、いかに評価されてきたのかを、共通の検討課題として設定する点に意義がある。

プロジェクト名の「動態的研究」は、各時点の制度を静態的に並べるのではなく、労働観が制度へ組み込まれ、社会条件の変化に応じて修正されながらも、特定の前提を残す過程を捉えることを意味する。女性に就業継続を求めながら、ケアの主な担い手であることも期待する状況は、新たな制度と従来の規範が重層的に存続する一例である。

1　男女雇用機会均等法は 1986 年 4 月 1 日に施行された。育児休業等に関する法 律（平成 3 年法律第 76 号）は 1992 年 4 月 1 日に施行された。1995 年の改正で 介護休業制度が盛り込まれた。これに伴い、通称は「育児・介護休業法」となった。仕事と生活の調和（ワ ー ク・ライフ・バランス）憲章は 2007 年 12 月 18 日に策定され、女性の職業生活における活躍の推進に関する法律（平成 27 年法律第 64 号）は 2015 年 9 月 4 日に公布された。

2　本プロジェクトは、師尾晶子名誉教授、朱珉教授、筆者の 3 名で実施した。本稿は、筆者が担当した女性労働・人的資源管理研究（奥寺、2025）を、プロジェクト全体の問題設定に即して再構成したものである。

3　境界理論については Nippert-Eng（1996）、Ashforth, Kreiner and Fugate（2000）、Clark（2000）を参照。

2.「社会進出」という言葉が前提とする労働観

女性の雇用参加は、長く「社会進出」と表現されてきた。この言葉は、女性の就業機会が拡大し、経済的自立や職業上の選択肢が広がったことを肯定的に示している。その意義を否定する必要はない。しかし、家庭の外で賃金を得ることを社会への参加とみなすならば、家庭内で行われる活動は社会の外部に位置づけられることになる。

女性は、「社会進出」と呼ばれる以前から、家業、農業、製造業、家事、育児、介護、地域の相互扶助などを通じて社会を支えてきた。それにもかかわらず、賃金を伴わない活動や家族の内部で行われる労働は、個人の職業として認識されにくかった。女性労働研究やジェンダー組織論は、有償労働と無償の再生産労働の区分と、組織が「標準的労働者」として、家庭責任を他者に委ねられる働き手を暗黙の前提としてきたことを示してきた[4]。

戦後日本では、男性が長期雇用のもとで働き、女性が家事・育児を担う家族モデルが、企業の雇用管理と社会制度の双方に組み込まれてきた。女性の就業が増えた後も、企業が長時間労働、転勤、職務への恒常的対応を前提とする中核的な労働者像を維持すれば、その基準に適合するための調整は個人や家族に委ねられる。労働者像が変わらなければ、家庭責任に有償労働が加わり、負担は二重化する。

したがって、WLB の検討は時間配分の問題にとどまらない。雇用労働とケアをどのように区分し、いずれを社会的に評価し、誰の責任として位置づけるのかという労働観の問題である。

3. 企業における WLB をいかに捉えるか

企業において WLB は、育児・介護休業、短時間勤務、テレワーク、長時間労働の是正など、具体的な施策の総称として理解されることが多い。人材確保や定着の手段として語られることもある。しかし、本研究が対象とする WLB は、それらの施策そのものではない。企業が労働と生活の関係をどのように理解し、働く人をいかなる存在として位置づけるのかという考え方である。個々の制度は、その考え方が組織のなかで具体化された形態である。

人的資源管理の諸制度は価値中立的な技術ではない。採用、配置、育成、評価、昇進、賃金、労働時間管理は、企業がどのような働き方を標準とし、いかなる労働者を中核的な担い手とみなすのかを示している。日本企業では、長期継続就業と企業への時間的・空間的な対応可能性を前提とする男性正社員が、長く標準的な労働者像となってきた。女性の雇用参加は拡大したが、その多くは、この雇用システムの内部に女性をどのように位置づけるかという課題として展開してきた。

この点は、WLB とワーク・ライフ・インテグレーションの関係にも表れる。前者は「雇用労働とそれ以外の生活」を区分して両者の調和を図り、後者は境界を柔軟に捉えて両者を統合しようとする。本研究では、両者の意義を踏まえ、その前提にある労働観を検討する。境界の分離と統合に加え、雇用労働とそれ以外の生活の位置づけに着目する[5]。

男女双方の育児休業をめぐる動向も、この労働観を考える手がかりとなる。女性の育児休業が相対的に長期の就業中断として定着してきた一方、男性の取得は近年急速に拡大し、短期・分割を含む多様な形態をとっている[6]。これは取得日数の違いにとどまらない。誰がケアのために継続的な就業を中断する労働者として想定され、誰の就業継続が標準とされてきたのかという、企業と社会の労働者像を映し出している。

したがって、企業における WLB の検討では、制度の数や経営成果だけでなく、制度が既存の労働者像をいかに修正し、あるいは維持しているのかを問う必要がある。WLB は、企業における労働観を検討するための対象である。

4. 労働観からみた WLB 研究の社会的射程

以上の検討から見えてくるのは、WLB を雇用労働とそれ以外の生活の配分問題としてのみ捉えることの限界である。人びとは雇用労働に従事すると同時に、子ども、高齢者、病気や障害をもつ家族、自らの健康を支えるケアを担っている。これらの活動は別々に存在するのではなく、一人の生活のなかで重なり合い、相互に条件づけている。にもかかわらず、企業の雇用管理は、生活上の責任による中断を生じさせず、継続的に職務へ従事できる労働者を標準としてきた。ケアを個人や家族の事情として扱う、この前提を明らかに

4 有償労働と無償の再生産労働については上野（1990）、日本の家族・企業社会とジェンダーについては木本（1995）、組織が想定する労働者像の性別性については Acker（1990）を参照。
5 WLB とワーク・ライフ・インテグレーションの労働観については奥寺（2021、2025）を参照。
6 男女の育児休業取得期間と企業の欠員対応については奥寺（2026a）、取得形態の多様化と企業の制度的対応については奥寺（2026b）を参照。

することが、労働観から WLB を検討する意味である。

WLB が女性の就業継続をめぐる課題と強く結びつけられてきた背景には、ケア責任が女性に集中してきた現実がある。しかし、男性の育児休業取得が拡大し、介護や治療等による就業の中断が男女を問わず生じる現在、ケアと就業の関係を女性に固有の問題として捉えることはできない。女性の休業が当然視され、男性の休業が例外視されるならば、同じ制度の下でも休業の意味は異なる。そこには、企業が誰を継続就業の標準的な主体とみなし、誰にケア責任を結びつけてきたのかという労働観が表れる。

現在進めている労使ヒアリングでは、男女の育児休業を制度利用件数や取得期間の差としてだけでなく、企業と労働者が就業の中断、職場への帰属、ケア責任をどのように理解しているのかという問題として検討している。休業の申出前、休業中、復帰後における職務、職場との関係、評価やキャリアをたどることにより、制度上は同じ権利が、組織のなかでどのように異なる経験として現れるのかを明らかにする。これは、制度の運用を支える労働者像と規範を捉える研究である。制度の整備だけでは解消しない課題を明らかにする点に意義がある[7]。

また、この問題は、休業を取得する本人だけに還元できない。制度利用に伴って職務や責任が再配分される過程では、同僚や管理職の働き方だけでなく、生活上の責任による中断を例外としてきた組織の論理も表面化する。したがって、WLB の検討は、制度利用者への支援にとどまらず、組織内で労働がどのように配分され、誰の時間と責任に依存して事業が維持されているのかを明らかにする研究へと広がる。

この視点は、WLB 研究の社会的射程を広げる。ケアを担うことは、特定の性や一部のライフステージに限定される特殊な事情ではない。人は生涯のいずれかの局面で、ケアを担い、またケアを受ける。少子化と高齢化が同時に進む社会において問われるのは、個人が複数の役割と責任を巧みに調整できるかではなく、生活上の責任を担うことを、労働者像のなかにどのように位置づけるかである。労働観の検討は、性別にかかわらない就業継続とケア参加、企業における雇用管理、社会の持続可能性を、相互に関連する課題として捉えることを可能にする。

おわりに

本プロジェクトは、古代ギリシアから現代東アジアまでを直線的な影響関係で結ぶのではなく、各時代・社会において、何が労働として評価され、ケアや生活上の責任が誰に帰属させられてきたのかを、異なる専門領域から検討した。筆者の研究は、その問いを現代日本企業の WLB と男女の育児休業に即して具体化するものである。

古代から現代までの異なる社会を比較する本プロジェクトは、現在の労働者像やケア責任の配置が、普遍的で自然なものではなく、歴史的・制度的に形成されてきたことを検討する視角を提供する。

労働観という視点から WLB を捉えることで、制度の整備状況だけでは把握できない、企業が前提とする労働者像とケア責任の配置が見えてくる。女性に偏ってきたケアの負担を見直すことは、女性の就業継続だけに関わる課題ではない。性別にかかわらず、誰もがケアを担いながら働き続けられる条件を考えることは、人口減少下における社会と組織の持続可能性を考える基盤となるのではないだろうか。

7　2026 年度定常的プロジェクト「労働観と社会的実践の比較史的研究―東アジアにおける西洋思想の受容と労働倫理の再編―」における筆者の分担課題である。

参考文献

Acker, J.（1990）“Hierarchies, Jobs, Bodies: A Theory of Gendered Organizations,” *Gender & Society, 4*（*2*）, pp.139-158.

Ashforth, B. E., Kreiner, G. E. and Fugate, M.（2000）“All in a Day’s Work: Boundaries and Micro Role Transitions,” *Academy of Management Review, 25*（*3*）, pp.472-491.

Clark, S. C.（2000）“Work/Family Border Theory: A New Theory of Work/Family Balance,” *Human Relations, 53*（*6*）, pp.747-770.

Nippert-Eng, C. E.（1996）*Home and Work: Negotiating Boundaries through Everyday Life,* University of Chicago Press.

上野千鶴子（1990）『家父長制と資本制―マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店。

奥寺葵（2021）「財界のワークライフ・インテグレーション戦略」平澤克彦・中村艶子編著『ワークライフ・インテグレーション―未来を拓く働き方―』ミネルヴァ書房、149-176 頁。

奥寺葵（2025）「ワーク・ライフ・バランスの労働観―女性の『社会進出』の視点から―」『国府台経済研究』第 34 巻、29-52 頁。

奥寺葵（2026a）「育児休業取得期間分布と企業の欠員対応―人的資源管理の観点から―」『千葉商大論叢』第 63 巻第 3 号、61-83 頁。

奥寺葵（2026b）「育児休業に伴う欠員対応の制度的構造―流動的欠員と業務負担の制度化に着目して―」『千葉商大論叢』第 64 巻第 1 号、55-74 頁。

木本喜美子（1995）『家族・ジェンダー・企業社会―ジェンダー・アプローチの模索』ミネルヴァ書房。

会計教育研究所

第12回会計・税務研修会開催報告



千葉商科大学大学院会計ファイナンス研究科　教授
中村　元彦
NAKAMURA Motohiko

プロフィール
千葉商科大学大学院会計ファイナンス研究科　教授
千葉商科大学会計教育研究所　所長
慶應義塾大学経済学部経済学科卒業、千葉商科大学大学院政策研究科博士課程単位取得退学（政策研究博士）
日本監査研究学会理事、情報処理技術者試験委員
主要著書「IT会計帳簿論」(2018)白桃書房(第32回日本内部監査協会「青木賞」)
「わが国におけるダイレクト・レポーティングの採用について」(2024)『現代監査』第34号（日本監査研究学会「監査研究奨励賞」）など

1. はじめに

2025年11月22日に千葉商科大学市川キャンパスにおいて、会計教育研究所と瑞穂会ＣＵＣ会計人クラブの共催による第12回会計・税務研修会（以下、「研修会」という）が開催された。研修会のテーマは「税務におけるデジタル技術の活用と課題」であり、下記の3名から報告をいただいた。

- 荒木康仁氏（税理士）
- Tserendorj Ariunsaikhan 氏（モンゴル税理士）
- Baasanjav Uranbileg 氏（モンゴル税理士）

荒木氏は税理士であり、日本の税務におけるデジタル技術の活用と課題を、また、Ariunsaikhan 氏とUranbileg 氏は、モンゴルの税理士であり、お二人からはモンゴルの税務におけるデジタル技術の活用と課題を報告いただいた。日本・モンゴルに限らず、世界的に税務行政におけるデジタル技術の活用は進んでおり、日本だけではなく、モンゴルとの比較を行うことにおいて、日本の税務におけるデジタル技術の課題が浮き彫りになったと考えている。

なお、千葉商科大学とモンゴル税理士会との間で協定を結んでいる。

2. 日本における税務におけるデジタル技術の活用と課題

荒木氏は、最初にデジタル化の現状として税務行政におけるデジタル化、そして企業におけるデジタル化の現状について報告した。国税庁は「税務行政のデジタル・トランスフォーメーション－税務行政の将来像2023－[1]」を公表しており、事務処理コストの削減や効率化、得られたデータの活用等を通じて、更なる課税・徴収事務の効率化・高度化を進めている。特に、改訂前（2021年6月公表）の「税務行政のデジタル・トランスフォーメーション－税務行政の将来像2.0－」からは、従前の「納税者の利便性の向上」と「課税・徴収事務の効率化・高度化等」に、新たに「事業者のデジタル化促進」を加えた3つの柱を施策としており、国税庁側だけではなく、納税者である事業者のデジタル化が加わることで、税務を起点とした社会全体のＤＸを進めようとしている。

この「事業者のデジタル化促進」について、荒木氏は図1を利用して、特に紙を媒体としたアナログ情報による何度もシステムに入力する非効率性や入力ミスの発生などに対して、デジタル情報を活用することによる多くの効果が生じることを説明した。例えば、①入力誤りや計算ミス等が減少、意図的な改ざんの機会が減少、②経理部門における単純作業の事務量が減少、③財務分析等に時間をかけ、経営の高度化ができる、④帳簿や国税関係書類の信頼度が向上（第三者からの信頼も向上し得る）などを考えると理解がしやすいであろう。この結果、税務行政としても意図しない誤りを減らすだけでなく、意図的な原始資料の改ざんによる売上除外や架空経費などの不正リスクの低下につながり、より悪質な納税者への税務調査に行政リソースを投入することができるという効果が生じる。また、税理士も単純チェックの作業が減少し、付加価値の高

1　国税庁（2023）「税務行政のデジタル・トランスフォーメーション－税務行政の将来像 2023 －」
https://www.nta.go.jp/about/introduction/torikumi/digitaltransformation2023/pdf/syouraizo2023.pdf（2025年11月22日最終閲覧）

いサービスに集中できるという効果が生じる。

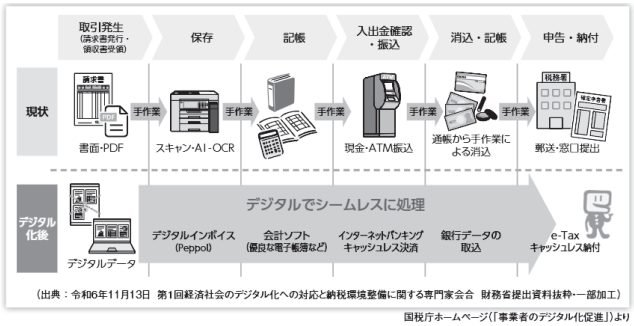


図1　デジタルシームレスの効果

出典：研修会荒木氏資料[2]

3. モンゴルにおける税務におけるデジタル技術の活用と課題[3]

(1) モンゴル消費税還付システム

モンゴルも消費税に当たる税があるが、モンゴル特有の部分があり、その制度説明とそこでのデジタル技術の活用事例が報告された。図2がモンゴル消費税還付システムについての説明資料であるが、毎月、Ebarimt[4]登録者を対象に抽選が行われ、登録されたレシート枚数に応じて当選確率と賞金額が変動するというものである。賞金額は3万トゥグルグ[5]から3000万トゥグルグまでとなっており、この仕組みは国民が積極的にEbarimtを活用し、脱税防止・取引の可視化に貢献することを目的としている。

納税者は販売の都度、ユーザーシステムからワンタイム番号を含む領収書（Ebarimt）を発行し、電子的に送信する義務がある。非課税や0%（免税）取引の場合でも、Ebarimtの発行が必須とされている。日本ではこのような義務化は行われていないが、良い意味で「飴と鞭」すなわち、国が「レシートを集めたい理由」と、国民が「レシートを欲しい理由」が一致していることによって実現できているのかもしれない。

なお、Ebarimtアプリは、単なる電子領収書管理ツールを超えて、AIとクラウド技術を組み合わせた「税務の自己管理ツール」として進化している。主な機能として、①QRコードをスキャンするだけで、取引情報が自動で登録できる、②支出をカテゴリー別（食品、交通、娯楽など）に自動分類し、グラフで視覚的に管理できる、③受け取った還付金を自分の税金支払いに直接充当することが可能、④個人事業者は、販売時のEbarimt発行や年1回の確定申告書を自動生成・電子送信可能がある。ユーザーフレンドリーな設計で、誰でも簡単に自分の消費・税金を一元管理できると言えるのではないだろうか[6]。



図2　モンゴル消費税還付システム　　出典：研修会 Ariunsaikhan 氏資料

2　財務省（2024）「第1回経済社会のデジタル化への対応と納税環境整備に関する専門家会合　財務省提出資料」
https://www.cao.go.jp/zei-cho/content/6digital-noukan1kai2.pdf（2025年11月22日最終閲覧）

3　研修会の資料は日本語のパワーポイントのスライドで報告をいただいているが、これはAriunsaikhan氏が日本語に精通していることによる。国家公用語はモンゴル語であり、残念ながら理解できないが、通訳も含め日本語で最終的に研修会での報告及び質疑が実現できている。

4　モンゴル税務当局が運営する電子税務レシートシステム

5　外務省のホームページによると、1米ドル＝3454.28トグログ（2025年平均、モンゴル中央銀行）
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/data.html（2026年8月2日最終閲覧日）

6　なお、詳細は紙面の都合で割愛するが、モンゴルはEbarimt電子領収書システムを基盤とした、ビッグデータ・AIによるリスク評価（スコアリング）システムを構築している。税務スコアリングシステムは、納税者のリスクを定量化し、税務当局による監査対象を合理的に選定することを目的としているが、すべての法人はe-Taxシステムにアクセスすると、自社の評価スコアを確認できる仕組みとなっている。

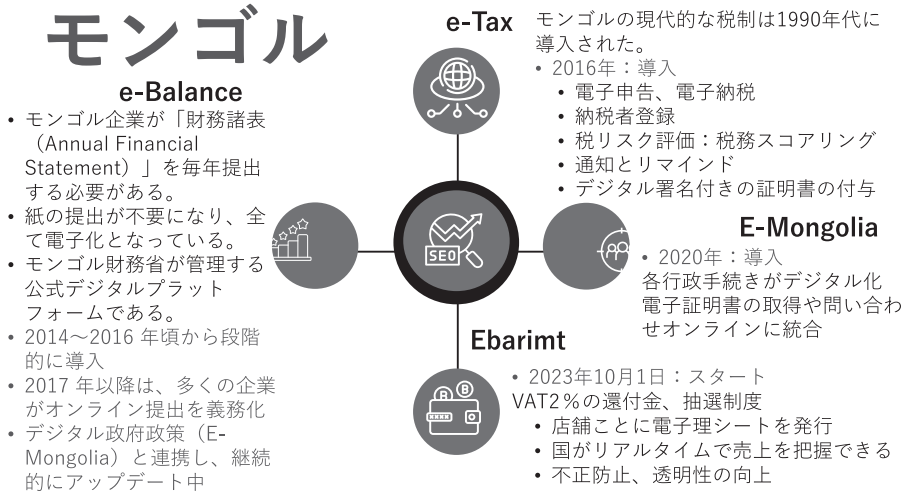


図3　モンゴルでの税務行政側におけるデジタル化
出典：研修会 Uranbileg 氏資料

（2）税務行政側におけるデジタル化

モンゴルでの税務行政側におけるデジタル化を示したものが図3となる。モンゴルでは「E-Mongolia」というデジタル政府プラットフォームを使って、税務・企業登記など多くの行政手続きを一つの場所でできるようにしている。税務分野では、ビッグデータやリスク分析を使って税務調査を行う仕組みを導入しており、不正を見つけやすくなり、税務の公平性や効率が高まると考えられている。モンゴルでは日本と比べると国が主導して進める傾向があり、若い国なので動きが速く、新しい技術を早く取り入れて、大幅にデジタル化する国と言えるのではないかと Ariunsaikhan 氏は述べている。但し、農村部・地方でのインターネット環境の不安定、システムの使い方を理解するトレーニングが不足、システムの安定性に問題（サーバーダウンやアクセス集中により、申告期限にエラーが発生することがある）などの課題を感じているとのことである。

4. おわりに

日本ではインボイス制度が開始されたが、紙でもデジタルでも許容されている。これに対して、モンゴルでは Ebarimt はデジタル処理が必要となっており、また、法律により国への電子的に送信が求められていることから、効率的な税務行政の実現につながっていると感じている。Ebarimt 活用したモンゴル消費税還付システムの効果として、①すべての取引が可視化され、公的支出の監視が強化された、②脱税の減少により、税収が大幅に増加した、③電子記録により未登録事業者が減少し、経済の透明性が向上した、④還付制度と抽選により、国民が積極的に制度に参加するようになることが報告された。日本では実務の繁雑さを強調する傾向があるが、モンゴルの制度は支出の透明性確保が実現できていることは重要な示唆を示していると考える。納税者側も VAT 申告書の自動作成と納税情報の透明化が実現できており、2で述べた国税庁の3つの柱とも整合すると感じている。

紙面の関係で触れられないが、税務スコアリングシステム、税務当局との外部データ連携（モンゴル銀行、社会保険総局など）、税関システムの全面デジタル化への検討など刺激的な内容が他にも多々あり、日本の動きの遅さと透明性確保という観点が欠如していることを痛感した。モンゴルは言語（国家公用語）がモンゴル語であり、税務の仕組みを知る機会がなかったが、貴重な機会が得られたと感謝している。ご報告いただいた3名とともに、モンゴル税理士会との折衝を含め、準備に多大なご協力をいただいた商経学部の谷川先生に感謝したい。

会計教育研究所

人工知能の進展と企業経営課題の解決をめぐって



千葉商科大学大学院政策研究科　客員教授
千葉商科大学基盤教育機構　非常勤講師
寺野　隆雄
TERANO Takao

プロフィール

1952 年東京都生まれ．千葉商科大学名誉教授．1978 年東京大学大学院工学系研究科情報工学修士課程修了．同年より 1989 年まで電力中央研究所勤務．1990 年から 2004 年まで筑波大学大学院経営システム科学専攻に勤務．2004 年より東京工業大学大学院総合理工学研究科知能システム科学専攻教授．2018 年から 2026 年まで千葉商科大学教授．東京工業大学・筑波大学名誉教授．工学博士．社会シミュレーション，サービス科学，知識システムなど興味をもつ．国内外の情報系，経営系諸学会において理事，学会誌・論文編集委員（長），研究会主査を歴任．

はじめに

最近の AI ブームが本格化した契機の一つは、2022 年末の ChatGPT の一般公開である。従来の ICT の進展と異なり、専門家でない一般の人々や学生にとっても利用の敷居が極めて低くなり、「後戻りできない変化」（岡野原 2026）が人間社会にもたらされようとしている。本稿でいう人工知能は、生成 AI だけに限定せず、AI-OCR、データ処理、エージェントベースモデリング（ABM）、社会シミュレーションなど、経営上の意思決定や制度・業務の再設計に関係する知的情報技術を広く視野に入れる。

本学・総合研究センターでも、このような AI の普及に即して、定常的プロジェクト「企業経営課題解決に資する人工知能技術の適用に関する研究」を進めてきた。人工知能と社会・人との関係に関する技術的議論は関連書籍（岡野原 2023、2026；谷口他 2026）に譲り、本稿では、この2年間に本プロジェクトに関連して行われた研究を取り上げる。対象は、会計・税務業務への AI 適用、会計システムの理論的拡張、企業経営･経営教育､政策意思決定と社会シミュレーションである。個々の成果を列挙するだけでなく、AI による業務の自動化から、人間と AI の役割分担、さらに AI を含む経営・社会システムの設計へと研究課題が広がっている点に注目する。

会計・税務業務と人工知能に関する話題から

小池（2025）は、AI 技術の進展が会計・税務業務に与える影響を検討している。会計・税務分野では従来の職務の一部が自動化の対象となる一方、老朽化した情報システムやデジタル化の遅れが課題となっている。インボイス制度や電子帳簿保存法の改正を背景に紙証憑から電子データへの移行が進み、AI-OCR を搭載した財務会計ソフトも普及している。しかし、証憑形式や記載項目が統一されていないため、日付、取引先名、消費税額などの認識には限界がある。実証実験でも金額や取引先名は一定の正解率を示したものの、消費税額や課税対象額では精度が低く、完全自動化には課題が残る。

中村（2025）は、インボイス制度導入後の税務電子化と中小企業への影響を論じている。2023年10月に開始されたインボイス制度と電子帳簿保存法改正を契機に税務処理のデジタル化が進むなか、とりわけ中小企業には紙媒体中心の業務慣行からの転換が求められる。今後は電子データの標準化と中小企業への支援が不可欠であり、デジタルインボイスの普及が経営合理化の基盤になるとする。

両研究が示すのは従来の会計処理業務、会計システムが、AI の普及により、非常に速いスピードで変化しつつあるという点である。その結果、さらなるデータの標準化、新制度への対応、業務プロセスの見直しが同時に必要となってきている。したがって、会計・税務領域における AI 活用は、個別作業の代替というよりも、企業の情報基盤を再構築する問題として捉える必要がある。

会計システムの理論的拡張と経済モデルへの応用について

本節では、従来の会計・税務業務の効率化を超えて簿記、会計概念そのものを拡張し、新しいシステム理

論・技術と結びつける方向の研究を紹介する。

出口（2025）では、従来の複式簿記が静的な取引記録にとどまり、経済活動の動態的側面を十分に表現できないとして、会計をシステム論的に再構築する必要性を論じている。会計情報を経済主体間の相互作用を表す状態変数として捉え、資産・負債・収益・費用の関係をベクトル空間上で表現する「交換代数」を提案し、これを利用した生産会計モデルを提示する。この考え方は、経済活動を入力・出力の流れとして表現し、企業や市場の行動を扱う ABM との統合を可能にする。また、環境会計や非財務情報を含め、会計を経済システムの構造と変化を記述する言語として捉え直す方向を示している。

赤木 (2025) および Akagi（2026）は、上述した交換代数を適用したベクトル会計モデルの構築と応用可能性を論じている。会計情報を経済システム全体の状態変化を表すベクトルとして扱い、経済主体の行動と情報の流れを定量的に記述することで、ABM と会計データを接続し、マクロ的な経済分析や政策評価へ応用することを目指す。従来の会計を静的な記録体系から動的な分析体系へ拡張しようとする試みと位置づけられる。

さらに出口（2026）は、監査行為を価値・規則・内部監査・外部監査から構成されるシステムとして捉える。企業には財務情報と非財務情報という異なる価値観に基づく監査が同時に求められ、その調整自体が新たな課題となる。監査システムの設計には価値観の選択と統合が不可欠であり、それは人工知能に単純に代替させることのできない人間の営みであるとする。

これらの研究は、AI を会計処理の効率化手段として利用するだけでなく、会計情報を企業・市場・社会の動態を記述するモデルへ拡張しようとする点に特長がある。同時に、価値判断を伴う監査のように、人間が担うべき役割も明確になる。

企業経営と経営教育に関連する話題から

企業経営や経営教育においても、生成 AI やシミュレーションを単なる効率化手段ではなく、設計や学習を支援する技術として利用する研究が進んでいる。

菊地（2025）は、マーケティングで広く利用されるペルソナ手法の課題と、生成 AI 時代における新しいデザイン方法論を整理している。従来のペルソナ作成には、コスト、客観性、デザイナーの主観依存といった問題がある。さらに医療、教育、資産形成などの便益遅延型サービスでは、現在の顧客属性から将来像を描くことが難しい。これに対し、大規模属性データと社会シミュレーションを組み合わせて将来属性を生成し、クラスタリングによってペルソナ・スケルトンを作成する定量的方法を提案する。その上で、ペルソナ作成における「サイエンス」と「アート」の境界を意識しながら、生成 AI を補助的に活用することを論じている。

國上（2025）は、ビジネスケース学習の現代的課題を整理し、新しいケース生成・共有方法を提示する。古典的ケースのリアリティ低下、インターネット上での回答入手の容易さ、生成 AI 利用に伴う正確性、倫理、バイアス、創造性などが課題である。これに対し、第一に形式化手法による意思決定構造の可視化、第二にビジネスシミュレーションを用いた仮想ケース生成、第三に生成 AI による階層的なケース生成アーキテクチャを提案する。これによりケースライターの役割は、固定された教材を書く「ライター」から、状況に応じて学習環境を構成する「デザイナー」へ変化する。

二つの研究に共通するのは、生成 AI に成果物を直接作らせること自体を目的としていない点である。データ、モデル、シミュレーション、人間の判断を組み合わせることで、従来は経験や暗黙知に依存していた設計・教育活動を再構成しようとしている。ここでも AI は人間の創造性を置き換える存在というより、設計者の活動を拡張する道具として位置づけられている。

政策意思決定と社会シミュレーションに関する話題から

Terano（2026）は、地方都市の持続可能性を高めるため、実規模社会シミュレーションを用いた「デジタル社会実験」の方法論を提示している。従来の政策立案では、限定された地域で高コストの実証実験を行うことが多く、体系的な検証とフィードバックには制約があった。そこで、工学分野で発展したデジタルエンジニアリングの考え方を社会問題へ応用し、政策意思決定を支援する枠組みを構想する。

人口減少が進む地方都市では、交通、福祉、医療、産業など複数領域が相互に関係するため、単一の指標やモデルだけでは政策課題を扱えない。合成人口デー

タ、実規模エージェントモデル、データ同化技術を利用することで、地域固有の文脈に応じた政策シミュレーションを行う。また、住民や行政職員を巻き込む参加型コミュニケーションを重視し、シミュレーションを共通言語として政策形成を共創することを目指す。

この研究は直接には地方都市政策を対象としており、狭義の企業経営課題とは対象が異なる。しかし、企業を地域経済・制度・ステークホルダーとの相互作用の中で捉えるならば、企業経営を支える社会的環境の設計という点で本プロジェクトと接続する。AI・シミュレーションの役割も、唯一の政策解を予測することではなく、複数の可能性を検討し、関係者が納得可能な意思決定を支援することにある。

おわりに

本稿では、CUC 総合研究センターの定常的プロジェクト「企業経営課題解決に資する人工知能技術の適用に関する研究」に関連する最近の研究成果を概観した。対象領域は会計・税務、会計システム、企業経営・経営教育、政策意思決定と広いが、そこには共通する方向性が認められる。

第一は、AI を既存業務の効率化に利用する段階である。AI-OCR の例が示すように、自動化には技術性能だけでなく、データ標準化や業務プロセスの整備が不可欠である。第二は、AI やシミュレーションを前提として経営のモデルや方法そのものを再設計する段階である。ベクトル会計、ペルソナ・デザイン、ビジネスケース生成は、既存作業の代替ではなく、対象の表現方法や設計方法を変えようとしている。第三は、人間と AI を含む意思決定システムを設計する段階である。監査における価値判断や、社会シミュレーションにおける関係者の納得形成は、今後の重要な研究課題である。

企業経営課題に対する人工知能研究を、生成 AI の性能向上や短期的な業務効率化だけに限定して捉えることは十分ではない。重要なのは、どの仕事を AI に委ね、どの判断を人間が担い、両者をどのような制度・モデル・コミュニケーションの中で結びつけるかという設計問題である。本プロジェクトで扱ってきた研究は、個別技術の適用から、経営・社会システム全体の再設計へと課題を広げつつある。これらは現在も進行中であり、今後、各研究の成果を相互に接続しながら、人工知能と企業経営の関係をより体系的に検討していく必要がある。

参考文献

岡野原大輔 (2023) 大規模言語モデルは新たな知能か―ChatGPT が変えた世界 . 岩波科学ライブラリー 319.

谷口忠大 , 鈴木貴之 , 丸山隆一 (2026) 現代社会を生きるための AI × 哲学 . 講談社 .

岡野原大輔 (2026) ヒトと AI. 岩波新書 222.

小池聖一・バウロ (2025) AI の活用に基づく会計業務・税務業務の変革の可能性及び影響に関する検討 . CUC view & vision, Vol.60, pp.30-34.

赤木茅 (2025)　交換代数による会計プログラミング入門 .　In　寺野隆雄 , 谷川喜美江 , 桝岡源一郎（編）, 原科幸彦（監修）(2025) 会計学の新展開 . 叢書―SDGs と大学―, pp. 14-27, 千葉商科大学 .

出口弘 (2025)　交換代数と生産会計 .　In　寺野隆雄 , 谷川喜美江 , 桝岡源一郎（編）, 原科幸彦（監修）(2025) 会計学の新展開 . 叢書―SDGs と大学―, pp. 27-42, 千葉商科大学 .

中村元彦 (2025)　インボイス制度開始後の税務における電子化の動向.　In　寺野隆雄 , 谷川喜美江 , 桝岡源一郎（編）, 原科幸彦（監修）(2025) 会計学の新展開 . 叢書―SDGs と大学―, pp.43-55,　千葉商科大学 .

出口弘 (2026) 監査概念のシステム論的拡張とその応用 . CUC view & vision, Vol.61, pp.49-52.

Kaya Akagi (2026) Accounting State Space as a Foundation for Economic Agent-Based Modeling: An Input–Output Benchmark and Inventory Extension. Research Square Preprint.

菊地剛正 (2025) 生成 AI 時代のペルソナ・デザインにむけて . CUC view & vision, Vol.59, pp.37-43.

國上真章 (2025) ビジネスケース生成のための横断的アプローチ . CUC view & vision, Vol.59, pp.44-50.

Takao Terano (2026) Policy Decision-Making and Real-Scale Social Simulation: Toward Realizing Sustainable Regional Cities. 千葉商科大学サステナビリティ研究 , Vol.2, pp.5-11.

遠藤隆吉研究所

講演「遠藤隆吉先生と神道」と学生向け『遠藤隆吉著作選集』刊行に向けた選定作業：遠藤隆吉研究所 2025 年度の成果



千葉商科大学総合政策学部　教授
朽木　量
KUTSUKI Ryo

プロフィール

1999 年慶應義塾大学大学院文学研究科史学専攻博士課程修了
2002 年博士（史学）取得
2004 年政策情報学部助教授就任
2014 年に同　教授を経て、
2024 年より遠藤隆吉研究所所長
2025 年より総合政策学部教授
専門は、歴史考古学・民俗学・地域文化政策

2025年度の遠藤隆吉研究所の主要な成果としては、講演会の開催と『遠藤隆吉著作選集』刊行に向けた選定作業並びに現代的仮名遣いへの変換などの作業が挙げられる。以下に項目ごとに概要を述べる。

1. 遠藤隆吉研究所講演会「遠藤隆吉先生と神道」参加記

2025年9月18日、千葉商科大学総合研究センター遠藤隆吉研究所の講演会において、東北大学特任研究員・木村悠之介氏による「遠藤隆吉先生と神道」と題する講演が行われた。この講演の骨子となる部分は、伊藤聡・斎藤英喜編『神道の近代 アクチュアリティを問う』（勉誠出版、2023年）に「神道学を建設する―井上哲次郎門下・遠藤隆吉と「生々主義」の近代」と題して寄稿された木村悠之介氏の論文をもとに、同論文の前提となる部分と若干の補足をもとに構成されたものであるので、内容の詳細については、この参加記ではなく、当該論文を参照していただきたい。さて、本講演は、社会学者、教育者、また「生々哲学」の提唱者として知られる遠藤隆吉を、近代日本における「神道学」の先駆的提唱者として捉え直すものであった。木村悠之介氏は、遠藤の神道論をただの思想体系として単純化するのではなく、その形成と変化を、明治から大正、昭和戦前・戦後に至る政治的・知的状況の中に位置づけて検討した点が本講演の要点である。

近代の神道学史をめぐる従来の研究では、東京帝国大学神道講座に関わった田中義能、加藤玄智、宮地直一や、國學院大学の河野省三らが中心的に扱われてきた。これに対して遠藤は、神道を専門とする研究者ではなかったため、その神道学構想が十分に注目されてこなかったという。しかし、遠藤が「日本神道学の建設」を提唱したのは1917年である。東京帝国大学に神道講座が設けられた1920年、神道研究室が設置された1923年、神道学会が成立した1926年よりも早い。講演では、この時間的な先行性を確認したうえで、遠藤の神道学と、従来研究されてきた「生々主義」あるいは「生々哲学」との密接な関係が論じられた。

もっとも、近代において「神道学」という名称は、当初から肯定的に受け止められていたわけではない。近世の平田篤胤は、吉田兼倶や山崎闇斎らの神道説を論難する際、彼らを「神道学者」と総称していた。近代に入ると、神道学は国文学や国史学が乗り越えるべき旧来の学問として意識される場合もあった。その重要な背景として紹介されたのが、久米邦武の論文「神道は祭天の古俗」をめぐる1891年の筆禍事件である。久米は古代神道を天神に対する祭祀として捉え、皇室の祖先を祀る宗廟祭祀の本来性を否定したため、厳しい批判を受けた。木村悠之介氏は、久米事件後、久米を批判した側にも神道を学問的に研究しようとする動きが生じたことを示し、遠藤の構想をこの流れの中に位置づけた。

遠藤は1896年に東京帝国大学哲学科へ入学し、井上哲次郎、ラファエル・ケーベル、元良勇次郎、外山正一らに学んだ。在学中の遠藤を考える手がかりとして、神道をドイツ語の「werden」、すなわち生成あるいは「生々」の説と記したノートが存在したとの指摘も紹介された。ただし、そのノートは現在確認できないため、講演では断定を避けながら、遠藤が比較的早い時期から神道と生成の原理を結びつけていた可能性

が示された。

遠藤の思想形成を考えるうえでは、1897年に創刊された雑誌『日本主義』も重要である。同誌では、木村鷹太郎を中心に、『易経』に由来する「生々」の語を核とした神道論が展開された。ただし、木村が宗教に対して批判的であり、「天祖」ではなく「国祖」の崇拝を説いたのに対し、その議論を批判した鈴木大拙や、後に遠藤が参加する丁酉倫理会などを通じて、「宗教」を全面的には否定せずに「生々」を論じる方向が形成されていった。遠藤の神道論は、こうした同時代の複数の議論との交錯の中から生まれたものとして説明された。

1904年の『日本社会の発達及思想の変遷』で、遠藤はアマテラス崇拝や祖先崇拝を「日本社会を結合」する宗教として論じた。1908年の「東洋倫理学の建設」では、「天」の観念を東洋ないし日本に固有の思想として捉え直し、1909年の「神道興隆国粋発展論」では、「天祖教」としての神道を東洋倫理学の中心に据えた。ただし、この時期に遠藤が重視したのは、アマテラスの天壌無窮の神勅だけではない。国家間競争の激化を意識し、イザナギ・イザナミによる国生みを「国家建設」の教えとして評価していた。そこには、神話を国家や社会の形成原理として読み直そうとする関心が認められる。

さて、講演の中心となったのは、1917年の「日本神道学の建設」である。遠藤は、日本神道の根本を「生々主義」とし、アメノミナカヌシやムスビの神によって、宇宙と人間とを結びつけようとした。祖先崇拝をはじめとする日本の習慣や道徳も、この生々主義から派生するものとされた。また「日本神道学」は、「日本人の宗教」であると同時に「日本の哲学」であり、農業や工業などにも関わる、いわば日本人にとって「腹に落ちる学問」であると説明された。遠藤が目指したのは、神道を個別の研究対象として扱うことよりも、宗教・哲学・道徳・産業・生活を貫く根本原理として体系化することであったと整理された。

この構想は、久米事件以来の祭天論と祖先崇拝論との対立にも関係していた。遠藤は1915年、久米の論文について、学説は事実によって判断されるべきであり、もはや有害視する問題ではないと述べている。その翌年には、谷本富による祭天論の再評価と祖先崇拝批判に対し、田中義能らが反論する論争が起きた。1917年の遠藤の議論は、「天」に関わるアメノミナカヌシと祖先崇拝の双方を生々主義の中に組み込み、対立する見解を調和させようとした可能性がある。ただし木村悠之介氏は、これを確定的な意図としてではなく、同時代の論争との関係から考えられる一つの解釈として提示していた。

さらに興味深かったのは、ムスビとデモクラシーの関係である。遠藤は1920年の講演で、デモクラシーを「人格の平等」と捉え、それはムスビの神が各人に人格を与えるという形で、古くから神道に存在したと論じた。しかし同時に、「君は君たり臣は臣たり、父子たり兄弟たり夫婦たり」と述べ、既存の身分的・家族的秩序を維持している。したがって、ここでのデモクラシーは政治制度の根本的変革を意味するものではなく、人格論へと置き換えられた、いわば急進性を抑えたデモクラシーであった。同時期の神道界でも「神道とデモクラシー」は盛んに論じられており、遠藤の主張は孤立したものではなく、大正期の神道言説に共有された課題への一つの応答であったと位置付けた。

その後、遠藤は私学教育に力を注ぎ、1930年代には青年をマルクス主義から守るための神道研究にも期待した。しかし、神道青年運動は十分な成果を上げなかった。戦時期には「日本神道学」よりも「生々哲学」が前面に出され、『生々示修養教本』や『大東亜世界観』では、東西文明の対立や世界規模の生々発展が論じられた。ヒトラーやムッソリーニをヨーロッパへの「刺激」として評価する記述もあったが、遠藤は1934年にはナチスの焚書、民族迫害、優生政策を批判していた。講演では、戦時下の政治状況に沿わざるを得ないなかで、遠藤が生々主義の抽象度を高め、デモクラシーにも言及することで、現実の政治勢力を相対化しようとした可能性が慎重に示された。

敗戦後の遠藤は、日本の敗因を軍閥・官僚・財閥の専横と、人民に自主性や責任がなく「デモクラティックでない」状態に陥ったことに求めた。そして西洋の知識を学びつつ日本古典を研究し、民本主義を採用するとともに、各家庭でアマテラスを崇拝することを提唱した。こうした主張は、「神道は宗教ではない」とする点を除けば、1900年代から1910年代の議論への回帰とみることができる。

講演を通じて浮かび上がったのは、遠藤の神道論が固定された一枚岩の思想ではなかったということであ

る。遠藤が重視した神格は、アマテラスからイザナギ・イザナミ、ムスビ、再びイザナギ・イザナミ、そして戦後のアマテラスへと移り変わった。なかでもムスビを中心とする「日本神道学」は、大正デモクラシーと並行して構想された点に特徴がある。一方、戦後には鈴木大拙が「むすびの神」を本尊とする生々主義を戦争との関係から批判し、折口信夫はムスビ神を祖先神ではなく宗教神として理解し直そうとした。こうした批判や再解釈を踏まえるならば、遠藤の神道学を現在から直ちに肯定・否定するのではなく、神道、国家、民主主義、宗教、学問の関係をめぐる近代日本の試行錯誤の一例として検討する必要があるだろう。今回の講演は、遠藤隆吉の思想的営為をその時代的制約も含めて捉え直す機会となった。

2．学生向け『遠藤隆吉著作選集』刊行に向けた選定作業

遠藤隆吉研究所開設以来、遠藤の思想や教育観を学生に如何に伝えるかということが常に求め続けられていた。遠藤の著作は膨大であり、没後80年を経て、旧仮名遣いや旧字体、異体字、変体仮名を多く含む当時の書物は、現代の学生にとって読みにくいものになっている。そこで、遠藤の著作の中から遠藤の思想・教育観の特徴が表れている部分を選び出し、学生向けの定本を作ることは研究所開設以来の課題となっている。2028年の創立100周年を前に、その対象となる著作や部分の選定作業と、旧仮名遣いや旧国名、旧字体、変体仮名を含む異体字、旧表記などについて全て文意を損ねない範囲で現代的表記に改める作業に着手した。2027年度以降に荒川敏彦新所長（予定）のもと、遠藤の社会学的な著作の復刊が計画されているため、まずは、遠藤の思想と教育観に絞って作業を行い、順次、作業が終了したものは「資料調査報告」の形で刊行していく予定である。したがって、作業の成果については「資料調査報告」に掲載することとし、ここでは選定対象となった著作と選定理由について略述したい。

① 教育の理念と建学の趣旨について

遠藤の教育理念として、遠藤隆吉著『巣鴨精神』（1935年初版本）からは「第一篇教育の基礎」の「一、教育の基本理念」から「四、建学の趣旨」までを選定した。遠藤隆吉の教育思想の出発点は、すべての人間が本来的に偉大な可能性を備えているという確信にある。教育者は学生を未熟な存在として一方的に指導するのではなく、一人の人間として、その人格を尊敬しなければならない。そのうえで、学生自身が人間としての尊さに気づき、自らに備わった能力を発揮できるよう導くことが教育の役割であると考えていた。この考えは学校内の師弟関係だけでなく、社会における人間関係全般にも当てはまる。相手の身分や職業によって態度を変えず、誰に対しても敬意をもって接することが、遠藤にとって教育と社会生活の基本であった。また、遠藤は人が学ぶ理由を「義理を明らかにし、人情を正す」ことに求めた。恩義を忘れず、目前の利益のために行うべきことを放棄せず、財力や権威によって物事の本末を転倒させない人間を育てることが教育の目的である。したがって学問とは、単に知識を増やすためのものではなく、人間としての中心を形成するための営みなのである。

また、遠藤のいう「東洋主義」は、西洋の文化や学問を否定し、東洋だけを無条件に称賛するものではない。科学や最新の知識については、西洋の優れたものを積極的に取り入れる必要があると認めていた。その一方で、長幼の序、恩義、人情、謙譲といった東洋固有の道徳的長所まで捨て去るべきではないと考えた。遠藤が重視したのは、西洋の科学的知識と東洋の道徳的伝統を調和させることである。建学の趣旨に掲げられた「人類を一視してその幸栄を増進し、有用の学術を修め質実の気質を養う」という言葉にも、その教育理念が表れている。学問は個人の利益や立身出世だけのために修めるものではなく、他者の幸福と社会の発展に役立てなければならないと考えていたのである。

② 学校の目的について

学校設立の目的については、『巣鴨精神』第四篇「学校の目的」から選定した。遠藤は、学校を単に学問や技術を教える場所とは考えなかった。学校の根本的な目的は、偽りのない誠実な心、すなわち「純粋至誠の情」を育てることにある。誠実な心をもつ者は、学習にも一心に取り組み、それぞれの教科に対して最善を尽くすことができる。反対に、豊富な知識や高度な技術をもっていても、人格が伴わなければ社会から信頼されることはない。したがって、知識や技能は教育の「末」であり、それらを正しく用いる人格こそが教育の「本」である。遠藤は道徳と人格を、社会や国家の発展を支える根本的な力として位置づけていた。併せて、「巣

鴨商業学校設立趣意書」にも触れることとした。遠藤は、商業教育においても実務上の知識や技術だけでは不十分であると考えた。当時の商業道徳の衰退を深刻な問題として捉え、誠実さ、責任感、節義などの精神を備えた実業家を育成しようとしたのである。そのため、東洋思想を基礎として学生の人格を陶冶し、その上で商業活動を行わせることを構想した。

③ 遠藤の学問観について

遠藤の学問観については、『巣鴨精神』第五篇「学問主義の高調」を中心に選定した。遠藤は、すぐに役立つ知識や技能だけを求める実用主義的な教育に警鐘を鳴らしていた。単純労働であれば中等以上の教育は不要だという当時の考え方は、仕事の一面しか見ていないとして批判した。技能があっても人格が形成されていなければ、いずれ社会生活のどこかで失敗する可能性があるからである。複雑な社会に対応するためには、時間をかけて学問を修め、人間としての判断力や品位を養う必要がある。また、教育が社会の目先の要求に迎合しすぎれば、教育本来の品位や長期的な使命が失われるとも指摘している。また、『巣園自伝』第七章「様々の質問」では「種々の学問をやって一種の共通的真理に到達するのもまた専門である」と述べて、学問が専門閉塞に陥ることに警鐘を鳴らしていた。哲学、宗教、社会、東西の思想など、多様な学問を学びながら、それらを共通する問題意識のもとに結び付けることも専門的研究であるとしたのである。

以上のような形で選定作業を進めている。遠藤の教育思想は、人間の可能性への信頼、人格を中心とする教育、東洋道徳と西洋知識の調和、実学と社会貢献の結合、広い視野をもつ学問の追究にまとめられる。遠藤にとって教育とは、職業上の技能を身につけさせるだけではなく、学問を社会の幸福のために正しく用いる、誠実で責任感のある人間を形成する営みであったといえる。それを学生に伝えるための一助となるものを刊行できたらと思う次第である。

サステナビリティ研究所

「サステナビリティ」の様相―ウェルビーイング概念の可能性に着目して



千葉商科大学人間社会学部　教授
猪熊　ひろか
INOKUMA Hiroka

プロフィール

プロフィール：東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了、博士（環境学）。2014年に千葉商科大学人間社会学部准教授に就任、2020年より現職、2024年より総合研究センターサステナビリティ研究所長を兼任。専門は、地域社会学・福祉社会学。

1　はじめに

本プロジェクトは、サステナビリティの様相について、ウェルビーイング概念の導入によりその様相を把握・分析・整理することを目的とする。そのために、「千葉商科大学サステナビリティ研究会」の開催、学術誌『千葉商科大学サステナビリティ研究』の発行、学内外の研究機関との連携を行い、サステナビリティに関する研究の進展を目指す。

本稿では、共同研究者の協力により得られたプロジェクトの成果と次年度への展開について報告する。

2　研究会の開催と学術誌の発行

研究会の開催と学術誌の発行を関連させ、サステナビリティに関連する学内研究の発信の場を展開した。

(1) 2025年度千葉商科大学サステナビリティ研究会

2025年度の研究会は、メインセッション「サステナビリティと地域政策をめぐって」、競争的プロジェクトによる「プロジェクト報告」、全体討議の場である「ランチョンセミナー」の3部構成とした。メインセッションでは、都市や地域のサステナビリティについて2名の学内研究者（本プロジェクトの共同研究者）からの報告の後、フロアとの間で議論が行われた。プロジェクト報告では、2025年度のサステナビリティ研究所所属プロジェクトのうち5つの競争的プロジェクトから報告があった。メインセッション・プロジェクト報告の総括的議論の場として設定したランチョンセミナーでは、2名の学内研究者（本プロジェクトの共同研究者を含む）による全体に対するコメントの後、フロアを交えて議論を行った。



都市や地域のサステナビリティを考える際に挙げられる論点である人口の減少について、マクロ・ミクロの両面から地域政策に迫る研究報告と議論が行われ、都市や地域のサステナビリティを考える際のウェルビーイング概念の有効性が示された（猪熊　2026）。



(2)『千葉商科大学サステナビリティ研究』(第２巻)

上記2(1) の研究会の展開として『千葉商科大学サステナビリティ研究』(第2巻)を発行した。メインセッション登壇者による寄稿、メインセッション解説論文、プロジェクト報告批評論文、2025年度の単年度もしくは最終年度とする競争的プロジェクト代表者による寄稿に加え、サステナビリティ研究所として共催した「ユネスコスクール関東ブロック大会」「ウェルビーイング研究シンポジウム」についての研究所報告により構成される。



3　学内外の研究機関との連携

(1) 千葉商科大学人間社会学部「ウェルビーイング研究シンポジウム」

ウェルビーイングをテーマとしたシンポジウム「ウェルビーイング研究シンポジウム」は、学内外の研究者（本プロジェクトの共同研究者を含む）による研究報告とパネルディスカッションを通して、『問いとしてのウェルビーイング　人・社会・自然の良い状態を考える』(中央経済社) による問題提起について議論を深めることを目的としたものである。サステナビリティとウェルビーイングの関連についても議論が展開された（齊藤　2026)。

(2) 青山学院大学 SDGs/CE パートナーシップ研究所「『科研 基盤研究 B：循環型経済 (CE) の国内 / 国際共同研究』最終年度の2025年度成果報告シンポジウム」

青山学院大学 SDGs/CE パートナーシップ研究所によるサーキュラーエコノミーに関するシンポジウムにて、本プロジェクトの研究代表者・共同研究者による成果報告を行い、研究所間の相互理解を深め、関連する議論を行った。

(3) 第8回未来まちづくりフォーラム

SDGs とウェルビーイングに関する「ビヨンド SDGs 時代の官民連携の在り方」をテーマとするフォーラムを後援し、未来まちづくりフォーラム実行委員会へ参画（研究代表者（実行委員)・共同研究者（実行委員長））し、セッションを担当した。

4　本プロジェクトの展開

持続可能性という意味でのサステナビリティという考え方は、対象や方法を広く設定することを可能にするが、それは同時にあいまいさを回避できない表現ともいえる。そこで我々は、理想的な状態を指し示す際に用いられるウェルビーイング概念を、サステナビリティを議論する際の主要な一つの手がかりとし、論点を整理することを試みた。その際、ウェルビーイング概念を中長期的な観点でとらえることの効果に着目し、その内実について分析・整理し、「サステナビリティ」の様相の把握を行った。

(1) 個人の側の視点 (Individualistic / Individualism) と集団の側の視点 (Collectivistic / Collectivism)

個人の視点と集団の視点の間にはさまざまな種類の乖離が生じることがあり、その分断の解消にウェルビーイングが一定の役割を果たし得ることが既に提示されている（渡邊他　2020、前野　2022他)。藤井 (2026) は、個人の立場と集団の立場の「すり合わせ」に着目し、「社会のしなやかなあり方に理解を深めること」の必要性を提示する。木村 (2020) が「制度化しないで常にすり合わせを行っていく方がよっぽど難しい」と指摘するように、制度化の是非についての議論、制度化の方法の議論とともに、制度化とは異なる方向性として、ひとつひとつの「すり合わせ」の場面を丁寧に確認しながら「すり合わせ」を可能にする要件を見出し、相互につなげていくことが求められるだろう。

(2) ケイパビリティ・アプローチ

ウェルビーイングについては、指標化や制度化という論点が挙げられている。伊藤 (2025) はその点につ

いて、アマルティア・センの「ケイパビリティ・アプローチ」の有用性を提示する。伊藤によれば、「機能の組み合わせ」である「ケイパビリティ」は、「実際に選択されたものではなく、本当は選択しなかったけれど選べた機能の集合」であり、「一つの尺度に還元するのではなく、複雑ないろいろな指標をそのまま捉えようとすること」がアマルティア・センの提示するあり方であるという。このような「ケイパビリティ」の観点からウェルビーイングを考えるにあたり、機能の組み合わせがあるかどうかや選択肢があるかどうかといった観点から状態の良さ（ウェルビーイング）をはかる際の、「ケイパビリティ・アプローチ」の有用性が提示された。

5　おわりに

本プロジェクトは、共同研究者の協力により、「サステナビリティ」と「ウェルビーイング」に関する研究の進展に一定の貢献をしたものといえる。貴重な研究成果を発表いただき、議論へ参加いただいた共同研究者と皆様に厚く御礼申し上げる。また、千葉商科大学総合研究センターと研究支援課のご理解と支援に、改めて感謝申し上げたい。

参考文献

藤井紘司（2026）「非持続的状況下のエチカ　山村の春の風景から」『千葉商科大学サステナビリティ研究』第2巻。
猪熊ひろか（2026）「メインセッション『サステナビリティと地域政策をめぐって』」『千葉商科大学サステナビリティ研究』第2巻。
伊藤康（2025）「自然のウェルビーイングを維持するためには何が必要か――『科学』の役割を考える　ケイパビリティ・アプローチからウェルビーイングを考える」ウェルビーイング研究シンポジウム、千葉商科大学、2025年9月。
木村大治（2020）「『沈黙』と『すり合わせ』の可能性」渡邊淳司 / ドミニク・チェン / 安藤英由樹 / 板倉杏介 / 村田藍子編（2020）『私たちのウェルビーイングをつくりあうために―その思想、実践、技術』株式会社ビー・エヌ・エヌ。
前野隆司（2022）「ウェルビーイングの現在地」ウェルビーイング学会『ウェルビーイングレポート日本版2022』。
齊藤紀子（2026）「問いとしてのウェルビーイング：人・社会・自然のよい状態を考える」『千葉商科大学サステナビリティ研究』第2巻。
渡邊淳司 / ドミニク・チェン / 安藤英由樹 / 板倉杏介 / 村田藍子編（2020）『私たちのウェルビーイングをつくりあうために―その思想、実践、技術』株式会社ビー・エヌ・エヌ。

サステナビリティ研究所

定常的プロジェクト：ガバナンスおよびサステナビリティの研究の報告



千葉商科大学総合政策学部　教授
磯山　友幸
ISOYAMA Tomoyuki

プロフィール

1987 年早稲田大学政治経済学部卒、日本経済新聞で証券部や日経ビジネスの記者、チューリヒなど海外支局長を務め、2011 年退社、経済ジャーナリストとして独立。2021 年から千葉商科大学教授。専門はガバナンス論など。

本プロジェクトでは、磯山が代表を務めつつ、影浦亮平氏と寺野隆雄氏と共に、ソーシャルガバナンスも含めた広い意味でのガバナンスに関する研究を遂行した。本プロジェクトのいくつかの成果のうち、査読付き論文として成果を公にできているのは、Ryohei Kageura, “Fukuzawa Yukichi as the First Advocate of Financial Capitalism in Japan”（SYNERGY, vol. 21, no. 2, 2025）である。この論文について報告したい。

1. 論文の目的と問題設定

本論文は、明治期の思想家・福澤諭吉が、なぜ当時としては非常に珍しく、株式や先物などの金融商品の売買によって利益を得ることを含む金融資本主義を擁護したのか、その理由を明らかにすることを目的とする。明治期には、日本において金融資本主義が成立するための制度的条件が整えられ始めていたが、金融資本主義そのものに対する社会的・思想的評価は必ずしも肯定的ではなかった。福澤自身も、生前から「拝金主義者」といった批判を受けていた。

こうした状況にもかかわらず、福澤は商業、利益、株式、取引所、先物取引などを積極的に擁護した。本論文の中心的な問いは、福澤はなぜ金融資本主義を擁護したのかである。先行研究には福澤の金融資本主義論そのものを扱ったものが存在するものの、福澤がそれを擁護した思想的理由を正面から明らかにする研究は主流にはなっていない。そこで本論文は、福澤の金融資本主義論を、彼の個人の「物質的独立」と「精神的独立」の思想、さらに日本を商業社会へと発展させようとする構想との関係から捉え直す。

本論文の基本的な結論は以下の通りである。すなわち、福澤にとって金融資本主義は、それ自体が最終目的だったのではない。金融資本主義の発展によって日本を商業社会へと発展させ、そこで各人が自らの知識や技能を利用して所得を得、物質的に自立できる社会を実現することが重要だったのである。そして、物質的自立は精神的自立、すなわち自由・自律のための必要条件であり、最終的には個人の自立が日本の国家的独立にもつながると考えられていた。

2. 商業・利益に対する伝統的な嫌悪

福澤の立場を理解するため、影浦はまず、商業や利益、利子を生む資本に対する伝統的な嫌悪が、日本だけでなく欧米にも存在していたことを指摘する。ヨーロッパでは、市民的伝統とキリスト教的伝統の双方から、商業や利益が警戒されてきた。キリスト教的伝統では、ある者の利益が別の者の損失によって成立すると考えられ、特に利子を取る金銭貸借は罪深いものとみなされた。

日本でも事情は類似していた。江戸時代には、武士道や儒教の影響のもとで、商業と利益は社会秩序を脅かすものと考えられていた。『論語』の「君子は義に喩り、小人は利に喩る」という有名な対比は、利益と「義」、すなわち政治的・社会的秩序を対置する。江戸時代の士農工商という身分制度では、商人はその最下位に置かれた。実際には武士以外の農民・職人・商人はいずれも支配階級である武士に従属し、商人は最下位という位置づけは形式的な側面もあった。しかし、この制

度的配置は、金銭や商業を低いものとみなす価値観と結びついていた。

明治維新によって身分制度は消滅したが、儒教的価値観は教育などを通じてなお大きな影響力を持っていた。そのため、商業や利益を積極的に擁護する福澤の思想は、当時の一般的な知識人の態度とは異なるものであった。

3. 物質的独立と「実学」

福澤の金融資本主義擁護を理解する鍵となるのが、「物質的独立」と「精神的独立」である。『学問のすすめ』において福澤は、人間は自由で平等に生まれたとしながら、現実社会には貧富の差が存在すると論じる。そして、この差を生み出す重要な要因として、学問・知識を挙げる。ただし、単なる知識では十分ではない。貧困を克服し、物質的独立を達成するためには、現実の生活に役立つ「実学」を身につけなければならない。

福澤における実学は、単に「実用的」という意味だけではない。「実学」の「実」には、現実を対象とすることと、日常生活に役立つことという二つの意味がある。つまり、実学は観察された現象を扱う実証的な学問であると同時に、現実社会で利用できる知識でなければならない。その具体例として、読み書き、簿記、算術、地理、物理、歴史、経済学、道徳など幅広い分野を福澤は挙げている。

しかし、たとえば経済学を学んでも、それを現実の生活や商業活動の理解に利用できなければ、まだ十分に「実学」とはいえない。商品の市場価格を知り、商売を行い、社会の動向を敏感に把握できる者こそ、知識を実際の所得獲得へと結びつけ、富を形成し、物質的独立を達成できる。

さらに福澤にとって、物質的独立は単なる経済的豊かさだけではない。それは精神的独立のための必要条件である。精神的自立を実現するためには、まず物質的自立を確立する必要がある、というわけだ。

4. 儒教批判と貧困の自己責任

こうした考えから、福澤は儒教的な社会秩序を批判する。福澤が問題視するのは、儒教が社会の人々に固定された役割を与え、職業選択の自由を制限してきたことである。江戸時代には、人々は自分で自由に職業を選ぶことができず、社会的身分によって就くべき職業が定められていた。そのため、自分の知識や能力を利用してより多くの所得を得ることが制度的に困難だった。福澤はこうした社会では貧困を個人の努力によって克服することが難しいと考える。

そこで彼は、各人が自分の幸福と不幸について責任を負う文化を形成する必要を説く。これは福澤による価値観の転換を意味する。儒教的価値観では、金銭欲や贅沢は道徳的に低いものとされた。これに対して福澤は、他人の自由を侵害しない限り、より多くの金銭を得ようと努力する欲は人間が持つべき徳の一つだと論じる。金を稼ぐことは不道徳ではなく、むしろ個人の自立を実現するための道徳的行為だとしたのだ。富を持つことを恥じるのではなく、富を得る能力を身につけることが必要だというのだ。

5. 個人の独立から国家の独立へ

福澤の個人の物質的・精神的独立という思想は、国家の独立とも直接結びついている。福澤は明治日本を完全な独立国家とはみなさず、西洋諸国との不平等条約を結んでいることから「半独立国」と考えた。日本が国家として独立するためには、政府だけでなく国民一人ひとりが変わらなければならない。

福澤が強調したのが「一身独立して一国独立す」という考え方である。第一に、国民が物質的・精神的に自立していなければ、国家を守ろうとする市民としての責任感を持つことができない。第二に、西洋人と対等に交渉するためには、自分自身を西洋人と同等の人間として認識できなければならない。貧困によって他人に依存している人間は、自分の尊厳を十分に確信できず、対外交渉でも相手の要求を受け入れるだけになってしまう。

第三に、国家的利益を考えるためにも個人の自立が必要である。他者に依存して生きる人間は、外国人の力にも依存しようとし、自分の利益になるならば外国人が日本からどれだけ利益を収奪しても構わないと考える可能性がある。したがって、個人の物質的・精神的独立は、単なる個人主義的目標ではなく、日本の国家的独立を実現するための基礎でもある。

6. 商業社会の形成と金融資本主義

こうした個人の物質的独立を実現するため、福澤は日本で商業社会を発展させる必要があると考えた。

福澤が好んで用いた「殖産商売」という表現は、当時の国家政策である「殖産興業」を意識したものだ。政府が国営企業の設立などに力を注いでいたのに対し、福澤は民間の投資による商業社会の形成を重視した。人々が自分の知識や技能を利用して商業活動に参加すれば、それが物質的独立につながる。

ここで重要なのが消費である。商業社会には、商品を売る人だけでなく商品を買う人が必要である。そのため、福澤はそれまで贅沢として道徳的に否定されていた消費欲も肯定する。家計の能力の範囲内で金を稼ぎ、それを自由に使うことは悪ではなく、人間にとって望ましい行為だと考えた。時事新報の論説『節倹と奢侈』では、贅沢が需要を刺激し、商品を売買することで社会全体の繁栄をもたらすと論じた。つまり、消費の肯定は単なる享楽の肯定ではなく、商業社会を成立させるとしたのである。

7. 取引所と先物取引の擁護

商業社会の発展に不可欠なものとして福澤が重視したのが金融資本主義である。1886年に『時事新報』の論説として著した『相場所の一新を望む』では、福澤は取引所を商業社会の大きな原動力だとした。特に先物取引が生産者に利益をもたらす点を強調する。

まず第一に、取引所では多様な商品を取引できるため、売買量を増やすことができ、生産者にとって利益をもたらす。第二に、多数の売買参加者によって市場価格が形成されることで、生産者は合理的な市場価格で取引できる。第三に、先物価格によって将来の収入を予測でき、より安定した経営計画を立てることができる。その意味で、取引所は単なる投機の場ではなく、生産者の経営を安定させ、商業社会を発展させる制度だと福澤はみたわけだ。

8. 投機家と政府への批判

もっとも、福澤は金融市場での活動を無条件に肯定したわけではない。彼が特に批判したのは、短期的利益を求め、株価を操作する投機家だった。投機は株価上下させ、虚偽情報を流し、企業に損害を与えるため、商業社会を害する。ただし福澤は、投機を法律によって禁止することには否定的だった。

福澤が期待したのが、大規模な資本を持つ投資家や、多くの一般投資家による長期投資だった。企業の価値と市場価格を比較して投資する投資家ならば、企業に損害を与えない。また、長期的に株式を保有することで、投機売買の影響を弱めることができる、というわけだ。

また、福澤は、政府による市場介入も批判する。たとえば凶作によって米価が上昇した際、政府が米価を引き下げようとして取引所を規制することは、消費者には有利でも、生産量が少ない農民に損失を負わせることになる。市場価格を人為的に引き下げることで、生産者が本来負担すべきでないコストを負担させられるからである。

このように福澤は、政府による過度な市場介入と短期的な投機の双方を批判しながら、長期投資を中心とする金融市場の発展を擁護した。

9. 金融資本主義・自由・国家独立

以上を総合すると、福澤の金融資本主義擁護には一貫した論理が存在する。金融資本主義が発展すると、商業社会が発展し、生産と消費が拡大し、人々が知識・技能を利用して所得を得やすくなり、個人の物質的独立が実現し、他人への依存が減少し、精神的独立・自尊・自由が実現し、自立した市民によって日本の国家的独立が実現する、という連鎖である。したがって、福澤にとって金融資本主義は、単純に金儲けを肯定する思想ではない。福澤が利益、富、消費、株式、先物取引を肯定するのは、富そのものを最高の価値と考えていたからではなく、富を得る能力と物質的独立が、人間の自由と尊厳を支えると考えていたからである。

10. ガバナンス論として

この影浦氏の論文は典型的なガバナンス研究ではないにせよ、経済制度・社会規範・個人の自律性を通じて国家を統治・形成する構想として福澤を読むことが可能であることを論証している。国家の独立について、政府官僚だけが外交や国家運営を担うのではなく、一人ひとりの国民が物質的・精神的に独立することが必要だと福澤は論じている。ここで問題になるのは、国家が国民をどう統治するかだけではなく、どのような社会・制度・価値観を作れば、自律的な国民によって構成される国家を形成できるかという、より広い意味でのガバナンスの問題だと解釈できる。

この観点から見ると、政府介入への批判が非常に重

要になる。福澤は、金融市場について政府が過度に介入することを批判し、むしろ民間投資による商業社会を形成することを重視している。たとえば「殖産商売」という発想によって、政府主導ではなく、民間による商業・投資の発展を重視した。つまり、国家が経済を直接運営するという統治モデルではなく、個人・企業・市場が自律的に活動できる制度的環境を国家が整えるという方向である。これは現代的なガバナンス概念との接続がしやすいところである。「government」が政府という主体による統治を意味するのに対して、「governance」は、政府だけでなく、市場、市民、企業、社会的規範など、多様な主体の相互作用によって社会を秩序づけることまで含めて考えられる。

また、福澤が制度だけではなく、人々の価値観そのものを変えようとした点も重要である。福澤は、富を得ること、利潤を追求すること、消費すること、贅沢すること、長期的に株式を保有することなどを肯定する方向に国民の価値観を変えようとした。法令によって人々を強制するだけではなく、望ましい社会を成立させるような人間の行動様式・価値観を形成することを重視した、とガバナンスの視点からは理解できる。この意味では、福澤の構想は、制度設計と市場設計と社会規範の形成と個人の自律性の形成を組み合わせたソーシャルガバナンス論として解釈できるのである。

以上のように、福澤の金融資本主義論は、国家・市場・個人・社会規範の関係を再編するガバナンス構想として再解釈することができることを示したのが、本プロジェクトの主要な成果のひとつである。

（終わり）

サステナビリティ研究所

日本におけるルーラルツーリズムの発展に向けた条件整理に関する研究



千葉商科大学人間社会学部　教授
山田　耕生
YAMADA Kosei

プロフィール

立教大学大学院観光学研究科博士課程修了。2017 年より千葉商科大学サービス創造学部准教授、2024 年より現職。専門は観光地域論、農村観光論

1．はじめに

1-1．研究の動機と問題意識

日本では今から約30年前の1990年代にルーラルツーリズム（農村でのツーリズム）が農林水産省から提唱[1]されると、関連する各種法令が施行されて農家民宿の開業が相次いだ。その後、学校教育の一環としての農家への宿泊や交流、農業体験を目的とした教育旅行を受け入れる地域が増加した。2000年代に入り、食育の重要性や農村地域衰退の活性化策として、さらにルーラルツーリズムが重要とされ、2017年には全国に農泊地域を500か所創出する目標が農水省から打ち出され、各地に「農泊」のスローガンのもと、ルーラルツーリズムの受入れのための取り組みが見られた。

筆者は2018年度から科学研究費の補助を受け、個人旅行客の受け入れを行っている農家民宿の経営実態を調査してきた。そこで明らかになったのは以下の点である。

- 「農家民宿」と言っても旅館のような宿泊ビジネスを行っているケースから、投資改修せずに素朴な「田舎の親戚」に宿泊させるようなケースまであること
- 農家民宿の開業や経営の支援体制としては行政による補助金やプロモーションがあるが、不十分であること
- 農家民宿相互のネットワークが弱く、経営に有用な情報を個別に収集していること

以上の点により、日本では依然としてルーラルツーリズムが普及しているとは言い難いのが現状である。

1-2．研究目的と研究方法

筆者がここ数年調査を実施しているイタリアやオーストリア、フランスではルーラルツーリズムが広く普及しており、上記に挙げた日本の課題は見られない。

現在の日本では観光を国家戦略の柱の一つに据えて積極的に観光政策を行っている。とりわけ、訪日外国人旅行客つまりインバウンド客の誘致と地方旅行への対策に強い関心を払っている。本研究では、この点に着目し、ルーラルツーリズムが普及している欧州からのインバウンド客から見た日本のルーラルツーリズムを明らかにして現状と課題を整理し、欧州をはじめとするインバウンド客のニーズに対応した農家民宿経営と周囲のサポートが、今後の日本のルーラルツーリズム普及の鍵を握っていると捉えている。

そこで本研究ではインバウンド客による日本のルーラルツーリズムの実態を明らかにし、特徴と課題を考察するとともに、今後の日本におけるルーラルツーリズムの発展に向けた条件を提示することを目的とする。研究の方法は次の通りである。①日本のなかでインバウンド客によるルーラルツーリズムが見られる地域の中から3事例を選び、その実態を明らかにした。②次に秋田県仙北市の農家民宿6軒に宿泊したインバウンド客にアンケート調査を実施し、日本におけるルーラルツーリズムに対する意識などを明らかにした。そして①と②の調査結果をもとに、本研究課題の解決に向けて考察を進めた。

1　1992 年に「グリーンツーリズム」という名称で農村でのツーリズムが提唱された。

2．各地におけるインバウンド客によるルーラルツーリズムの状況

本研究プロジェクトでは2024年に農水省が農泊地域（ルーラルエリア）へのインバウンド客の受け入れ促進の強化のために全国40か所を指定した「農泊インバウンド受入促進重点地域」[2]のうち、徳島県西部阿波地域、山口県萩市、京都府南丹市において現地調査[3]を実施した。本項では各地の事例をもとに、インバウンド客によるルーラルツーリズムの現状を明らかにする。

2-1. 徳島県西部阿波地域

徳島県西部の美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町にまたがるエリアでは一般社団法人「そらの郷」がルーラルツーリズムを推進している。エリア内の観光資源は、大歩危峡、祖谷渓、吉野川、剣山などの自然資源のほか、山腹の急傾斜地に張り付くように形成される集落や特有の文化的景観がある。ここでは中学校や高校などの教育旅行を地域内の農家や宿泊施設で受け入れながら、農業や地域文化を体験してもらう形となっている。

「そらの郷」では2008年度から本格的に修学旅行を主とした教育旅行の誘致を開始した。受け入れ学校数と延べ宿泊者数は2008年度の4校、977泊から2023年度には39校、7212泊にまで増加している。一方、教育旅行以外の個人旅行による農家民宿への宿泊についてみると、2024年度の「とくしま農林漁家民宿」に登録している40軒の宿の宿泊者数総数は3,717人泊、そのうちインバウンド客は1,056人泊であり、宿泊者総数に占めるインバウンド客の割合は28%となっている。宿泊者をエリア別にみるとヨーロッパが594人泊と全体の半数以上を占めており、次いでアジア210人泊、オセアニア120人泊、北米109人となっている。来訪目的は田舎体験、四国巡礼（遍路）が中心で、レンタカー利用の家族客で滞在は1泊、申込手段は宿のHPやSNS経由が多い[4]。

2-2. 山口県萩市

萩市は2010年に萩市農政課が母体となって設立された「萩市ふるさとツーリズム推進協議会」がルーラルツーリズムを推進している。2010年に設立された当初は教育旅行による農泊受入れとして約50軒の世帯が対応した経緯があり、しばらくは教育旅行の受け入れが中心であった。インバウンド客にシフトした転機となったのは2016年に山口県が中国の中学生による教育旅行を誘致し、萩市でも約20世帯が参加して宿泊を受け入れたことである。その後、日本とアジア大洋州地域の間で行われる青年交流事業のJENESYS[5]（ジェネシス）などの受け入れや海外からのツアー客の受け入れを増加させていった。

2025年7月時点のインバウンド客受け入れ家庭は23軒である。受け入れ軒数はコロナ禍前から減少傾向であったが、萩市への移住者世帯やUターン世帯が受け入れに加わり、コロナ禍以降は下げ止まっている。2024年のインバウンド客の受け入れは約400人で、教育旅行は2023年から受け入れを停止している。教育旅行では料金面で単価が低く、受け入れ世帯の金銭的負担がかかる点も理由の一つである。コロナ禍以降のインバウンド客については、ドイツやカナダなど海外の旅行会社主催のツアーによる日本旅行の一部の行程に萩市での生活体験（ホームステイ）が組み込まれており、ツアー参加の個人旅行客を受け入れている訳である。これについては「萩市ふるさとツーリズム推進協議会」が積極的に海外の旅行会社にプロモーション活動を行う一方で、ツアー客が萩市内での滞在中に各世帯と交流し日本の生活を体験するだけでなく、その合間に書道や武術（剣道）などの日本文化体験や市内サイクリング巡りなど、コンテンツのメニューと質を高めていることが特長である。例えば、11日間の日本旅行の行程に萩での滞在（ホームステイ2泊）が含まれているツアーは年間50回催行（2025年）されている。

2-3. 京都府南丹市美山地域

京都府南丹市美山地域にはかやぶき屋根の家屋が集積する「かやぶきの里」がある。2025年時点における集落内の家屋45軒のうち、かやぶきの世帯は39軒で、その割合は86%にのぼり、しかもそのうち33軒は実際に人々が暮らす家屋になっている。

2 農水省では農泊地域へのインバウンドの受入促進に向けて、的確なターゲット設定のもと、ソフト・ハード両面での利便性向上に向けた受入環境整備と、農泊の魅力を発信する海外向けのプロモーションを行うことが必要との観点に立ち、指定地域のインバウンド客の受け入れ体制の充実（言語やWi-Fi環境の整備など）を図るとともに、海外への情報発信とプロモーションを実施。

3 現地調査は次の日程で実施した。徳島県西部阿波地域2025年7月、山口県萩市2025年、京都府南丹市2026年3月、秋田県仙北市は2024年9月のほか、2025年にインバウンド客に対してアンケート調査を実施した。

4 にし阿波〜剣山・吉野川観光圏協議会へのヒアリング調査（2025年7月）による。

5 JENESYSとは、Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youthsのことで、外務省が推進する対日理解促進交流プログラムのなかでも、日本とASEAN地域を中心とするアジア大洋州地域との間で行う青年交流事業である。10代から30代くらいまでのアジア大洋州地域の青年を日本に招聘し、10日ほどの間で座学や視察、交流などを行うのが主な活動。

現在の京都府南丹市においてルーラルツーリズムを推進しているのは「南丹市美山まちづくり協会」である。対象地域の旧美山町エリアでは1993年には重要伝統的建造物群保存地区に指定されるなど、茅葺き屋根の民家が集積する集落が観光資源として注目されていた。2007年に持続可能な観光（サステナブルツーリズム）が注目されると美山地域の「かやぶきの里」の保全と観光を連動させるべく、エコツーリズム推進協議会が設立された。その後、2016年に美山地域の観光協会とエコツーリズム推進協議会が一体化する形で「一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会」を発足させた。美山地域への京都市内からのアクセスは車で1時間30分であるため、京都市内から日帰り客での個人旅行客やツアー客の来訪が多い。

宿泊を伴う来訪は教育旅行が多く年間約30校、延べ宿泊数1000人泊である。一度に1軒あたり平均4名を受け入れており、宿泊受け入れには農家民宿と一般家庭あわせて20軒が参加している。一度に受け入れられる人数が最大で約50名ということもあり、日本の学校による教育旅行には不向きで、海外からの教育旅行がメインとなっている。2025年時点での海外からの教育旅行は台湾からが最も多く、次いでオーストラリアからとなっている。もともと台湾ではSNSによる情報発信によって美山地域への来訪が多かったことも影響している。その他、「かやぶきの里」へのインバウンド客の来訪の状況（2024年）は、かやぶきの里における英語ガイド利用は600人、地域内の宿泊者数は延べ4000人、バスツアーでかやぶきの里に一時的に立ち寄るインバウンド客は10万人と推計されている。

3．秋田県仙北市におけるインバウンド客のルーラルツーリズムの動向

秋田県仙北市は秋田県のほぼ中央の内陸に位置し、30年以上にわたってルーラルツーリズムが盛んな地域である。具体的には教育旅行による農家民宿への宿泊を通して農業体験や農家との交流などを楽しむ形態となっている。現在は一般社団法人仙北市農山村体験推進協議会がルーラルツーリズム推進の中心役となっており[6]、教育旅行の主体である学校との対応窓口となったり、観光情報の発信、農家民宿の経営サポートなど、さまざまな面においてルーラルツーリズムの拡大に向けた取組みを行っている。

仙北市では2012年に交流のあった台湾からの教育旅行の受け入れを開始した。その後東南アジアからの教育旅行の受け入れも増加し、2023年のルーラルツーリズム関連でのインバウンド客の宿泊者数は延べ3,300人となっている。現在ではインバウンド客の誘客と受け入れが協議会の主要な活動の一つになっている。

ここでは、2025年6月から12月にかけて仙北市の農家民宿6軒において実施したインバウンド宿泊客へのアンケート調査結果を明らかにしながら、インバウンド客から見た日本のルーラルツーリズムの特徴を整理する。

回答がみられたのは21人で地域別内訳はアジア13人、ヨーロッパ6人、北米2人である。同行者のタイプは友人11人、家族6人、一人1人である。来日回数は初来日4人、2回目3人、3回目以上14人である。仙北市での泊数は1泊12人、2泊6人、3泊以上3人である。日本旅行の日程は大きく2タイプあり、日本各地あるいは東北各地の旅行中に一部行程を仙北市に含めているタイプと、東京を滞在の拠点としつつ、2～3日間を仙北市にダイレクトに訪問し、その後東京に戻るタイプである。

宿泊した農家民宿における「宿の施設」「宿の人との交流」「宿の食事」「宿の体験」について、それぞれ「とても良かった」「良かった」「普通」「良くなかった」「全然良くなかった」の5段階評価で回答してもらったところ、いずれの項目についても「とても良い」「良い」で95%以上の回答がみられた。特に「宿の食事」が最も高い評価となっている。自由記述を見ると「宿の人が親切、フレンドリー」、「伝統的な日本家屋」「静寂な環境、美しい自然」などのコメントが多い。一方で「英語その他言語対応が難しい」「滞在中のアクティビティが乏しい」「SNS等での情報発信をもっとすべき」といった課題も複数からコメントが挙がっている。

4．おわりに～日本のルーラルツーリズムの発展に向けた条件

本稿では、訪日外国人旅行客（インバウンド客）の視点から、日本のルーラルツーリズムの現状を明らかにしてきた。各地の事例調査の結果をまとめると、以下の通りである。

6　仙北市のルーラルツーリズムについては山田（2025）が農家民宿の経営状況と宿泊者の動向をまとめている。

・日本人によるルーラルツーリズムと同様にインバウンド客も教育旅行による農家民宿などへの宿泊が依然として多い。しかし、教育旅行を足掛かりとして、次第に個人旅行客の受け入れにシフトさせている。
・農家民宿に滞在しながらルーラルツーリズムを楽しんでいるのは、リピーターが主であり、特に来日回数3回目以上の割合が高い。
・各地域ともDMO（観光地域づくり法人）が情報発信や宿泊受け入れの窓口をはじめ、ルーラルツーリズム推進にとって重要な役割を担っている。特にDMOが積極的に海外の旅行会社にプロモーションすることでツアーの一部を地方でのルーラルツーリズムの行程を組み込ませることに成功している。
・農家民宿への宿泊は宿の人のホスピタリティと食事への評価が高いが、滞在中の体験や散策などのアクティビティへのニーズに応えきれていない。

政府が2030年までに訪日外国人旅行者数を6000万人にするという目標を掲げており、今後もインバウンド客が増加すると予想されるなか、オーバーツーリズムの解消や地方への誘客の鍵としてもルーラルツーリズムの普及と拡大がさらに望まれる。本稿のようなインバウンド客の日本の地方旅行の動向を分析する研究の蓄積を期待したい。

参考文献

中尾誠二（2026）, 都市農村交流・グリーンツーリズム・農泊の変遷と展望 , 農村生活研究 69-1, 43-47
髙田晋史（2026）農泊地域の形成と変容―京都府綾部市を事例として―, 農村生活研究 69-1, 58-65
尾山郁人 , 髙田晋史（2024）, 農泊経営者による伝統文化の保全意識と取組状況―徳島県にし阿波地域を事例として―, 農業経済研究 96-3, 349-354
五艘みどり , 國井大輔 , 平形和世 , 山田耕生（2023）, ルーラルツーリズム推進組織の持続的運営に向けた組織間連携のあり方 , 観光研究 35-1, 79-86
山田耕生（2022）, 個人旅行客の受け入れを主とした農泊の特徴と課題 , 千葉商大論叢 60-2, 143-153
YAMADA Kosei（2021）, Present situation and Possibilities of Spread Expansion of the Farmhause Accommodation in Japan, IGU（International Geographical Union）, Istanbul.
大學寛和・納口るり子（2019）, 農泊の系譜と現状に関する一考察, 農村計画学会誌 38, 298-306

遠藤隆吉研究所

遠藤隆吉における「共知」の思想と社会学

――「人情と社会」への視座――



千葉商科大学人間社会学部　教授
荒川　敏彦
ARAKAWA Toshihiko

プロフィール

千葉商科大学人間社会学部教授。著書に『「働く喜び」の喪失――ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読み直す』（現代書館、2020 年）、『問いとしてのウェルビーイング――人・社会・自然のよい状態を考える』（中央経済社、2025 年、共編著）など。

1．「共知」と「可共知」を知る

千葉商科大学の本館の会議室には、創立者である遠藤隆吉の揮毫した「家学の書」（1935）が掲げられている（朽木 2024：19）。すでに巣鴨中学校や巣鴨商業学校、そして千葉商科大学の前身である巣鴨高等商業学校を設立し、それら自らの学舎で学ぶ生徒たちを含め早稲田大学等の諸大学で教えた学生たちをも念頭に、学びの指針を述べた書と考えられる。それは次の一文で始まっている（原文は漢文）。

> 凡（およ）そ学問の法は、人の好む所に従ふ而已（のみ）と曰ふと雖も、人の共知し共知すべきを知る（知人共知可共知）は、其の第一義なり[1]。
> 〔拙訳：およそ学問をする方法というものは、その人の好きな所に従う他はないとも言えるのだが、人々が共に知っていることは何か、また共に知るべきことは何か、それを探究して知ることが、学問の第一義である。〕

遠藤はまず、学問への取り組み方について、外的指示に服従させて規律化するという方向ではなく、その人の好む所に従うのみだという。それは自由放任とは異なる。遠藤は教育方針を「硬教育」として掲げていたが、それは自ら困難な課題に取り組みそれを乗り越える経験を通して、自律の精神を養い人格を陶冶するというものであった。この冒頭の言も、そのような観点から述べられたものと考えられる[2]。

しかしそれを踏まえた上で、遠藤は自らの考える学問の第一義を提示する。それが、「人の共知し共知すべきを知る」ということである。

これについては第一に、個人一人の人格修養にとどまらず、人びとが共に知っていることは何かを問う、いわば知の共同性に目を向けている点が注目される。その時代その共同体において共有されていることを知るのは、そこで生きる上で必須の基本的なことである。遠藤が東西の古典――漢学については四書などの経書、西洋についてはとりわけギリシャの古典――の学びを重視することを踏まえれば、長い時間をかけて篩にかけられて残った、洗練された知は、他の多くの知の共通の基盤となるものであり、手軽にまとめられた書物につくよりも、古典という共通の基盤を学ぶことが諸学の根本なのだと遠藤は考えているのである。

第二に、さらに重要な点だと思われるのだが、共知すべきを知る、すなわち人は何を共に知るべきかを知ることを挙げている点が注目される。

人びとが互いに知っていることを知るという第一の点だけならば、ややもすると、皆が知っていることを知らないのは恥ずかしい、あるいは、これくらいは知っているべきだといった態度になりかねない。しかし遠藤がここで求めているのは、そうした羞恥の念や権威主義に駆り立てられた学びではない。人びとが共に知るべきことは何であるのか、それを知るようにせよ、ということである。

そもそも知るべきことは何なのか。この問いは、指示された知識や技能をやみくもに詰め込む作業とはまったく異なる方向に向かっている。私たちは何を知るべきなのか。それを知るためには、知識を蓄えるという意味での「知る」ではなく、「考える」ことが必要

1　「家学の書」（遠藤隆吉研究所 資料調査報告 第 1 号 2024：6）。ただし訓読および解釈は筆者によるもの。以下同じ。
2　「硬教育の声は、人間をして奮発せしめ、社会をして元気ならしむ、努力主義の声は、人間をして意志を強からしめ、性格を偉大ならしむ、硬教育と努力主義とは現今の軟教育に対する反動である」（遠藤 1910：15）。

である。それは、広い意味での「知」である。したがって遠藤が求める「共に知るべきを知る」とは、人びとが共に知るべきことは何かを考えるべしという「思索の営み」の要請なのである。しかも、それが共に知るべきことであるかどうかを確かめるためには、単独の思索にのみ閉じるのではなく、他者との対話など共同的な思索へと開いていくことが求められるだろう。共知における「共」には、他者の立場や観点が関わってくるからである。したがって「共知」を、自己の立場から権威主義的に固定するのでなければ、そこには他者と交わる中で自らの知を問い直していく契機が生じることになるであろう。

そのような共知および可共知をめぐる共同思索は、同時に、自分が何を知らないか、分かっていないかを自省することにもつながる。それは、第一の「共知」で知っていると思ったことも、じつは知っていなかったのではないかと気づくことである。

もとより、私たちに知らないことが山ほどあることは自明のことである。しかし何を知るべきかという問いは、情報の単なる集積ではなく、現在の知の妥当性や限界を問い返す力へとつながっているだろう。その意味で、現代のＡＩの時代においても、遠藤の言う学問の第一義はなお通用する、いやむしろ重要性を増しているようにすら思われるのである。

2．人情と社会への関心

このように共知と可共知を知ることを学問の第一義と措定した遠藤は、四書やギリシャ・ラテンなど東西の古典に取り組むことの重要性を説いた後、末尾近くで次のように述べる。

> 学ぶは古典なり。知を以て、人情の本とする所と、社会の興る所以とを知る。而して後、これを身に体するなり[3]。
>
> 〔拙訳：学ぶべきは古典である。古典によって得た知を用いて、人情は何に根ざしているのかと、社会はいかにして成立・発展するのかとを知り、そうして後、それを自らの身に体得するのである。〕

古典に取り組むことで得られる知とは、単に広く共有された基礎知識なのではない。現代の前提や常識が通用しない古典に取り組むなかで培われた知をもって、少なくとも二つの知が得られると遠藤は考える。すなわち、人情が何に根ざしているのかという人間の心理を理解する上での根本問題と、社会という現象がいかにして成立し、発展したり衰退したりするのかという問題である。

それらは他者・人間の理解にとって不可欠であるし、社会を把握する上での大前提ではある。しかし容易に見て取れるように、それらはともに巨大な難問であって、古典に取り組めば誰もが知ることができるというようなものではない。もちろん遠藤もそれは重々承知の上であるに違いない。だとすれば、この指摘はむしろ古典に取り組むことの意義を説いたものと考えられるのではなかろうか。

古典の読解は、しばしばその訓詁的正しさに意識が置かれがちになる。しかし遠藤にとって、古典に取り組んで得られる知とは、古典に記された正解の知識ということではないだろう。そうではなく、人間を行動へと促す人情を理解すること、人間によって社会がいかに形成されるのかということ[4]、さらにその社会がいかにして発展ないし衰亡していくかということ、こうした人間と社会に関わる根本的な事柄を問う態度のことを指しているのではないだろうか。したがって「学ぶは古典なり」と言うときの学びとは、各自の好む所に従ってなされるべきものであったとしても、その根底で、「人の共知し共知すべきを知る」というあり方を目指して追究されるべきものと考えられているのであ

3　原文は「而後為體之身也」である。他方、遠藤は「爲学之法」（『巣園集』（1937）所収）の該当箇所では、「為」の字なしに「而後體之身也」と記し（朽木 2024：11）、続けて（「家学之書」と同様に）「余これを以て家学の書となし、自戒を以て云ふ」と結んでいる。そこで本稿では自筆の「家学の書」ではなく「爲学之法」に依拠し、ここは「為」のない文言として訓読・解釈する。

4　社会形成における個人相互の影響という社会学的観点は、遠藤が「社会」を把握する上で重要な点であった。『社会学原論』では「社会」について次のように述べている。「社会の人々は多種多様の意見思想を有つて居る。此の多種多様なる意見や思想に依りて影響せらるゝといふ所に社会の意味は存しているのである。随つて社会その者は無限の変動性を有つて居るものと見なければならぬ。即ち自分自身の体験する所には限りがあるが、種々様々なる影響があるといふことは予想せられなければならないのである。此の予想は社会の中に当然包含せらるべきものである」（遠藤 1922:72）。また遠藤は「社会の本性は共存の意味なり」として、「社会其の者の観念は即ち彼我共存といふことにある」（遠藤 1922:86-87）と述べ、著書の末尾を「社会はパブリックファンヅなり」と題する章で締めくくっている（遠藤 1922：276 以下）。社会を「共存」や「パブリックファンヅ」として把握する見方は、遠藤の社会学研究の到達点として検討に値するだろう。

ろう。

そのような「共知」への態度を養った上で形成される人間と社会に関する知は[5]、情報として詰め込むものではなく、外部に保存して折に触れて検索して引き出すようなものでもなく、自らの身に体するもの、身体化すべきものとされている。

では、知を身に体する、いわば知の身体化とは、いかなることを指すのか。この点について「家学の書」は何も触れていない。しかしここまで見てきたように、冒頭において学問的な知の公共的な契機が説かれ、そのための手段として古典を学ぶことで、人情の本とする所および社会の興るゆえんを知り、その知を身体化するという議論を踏まえるなら、知を自らの判断や行為へとつなげ、他者との関係へと参入していくこと、すなわち知を伴った社会的実践までも含意していると理解できる。

こうして、共に知っていることと共に知るべきことを知る「学問の第一義」にはじまり、古典を手がかりとして、「人情の本とする所」と「社会の興る所以」を知った上で、その知を身体化させ、社会と関わっていくという実践的な学問研究の一大プロセスが立ち現れてきた。遠藤が「身に体する」と言うとき、それは獲得した知を自己の内部にただ留め置くのではなく、その知をもって社会に積極的に関わることをよしとする響きがある。

もっとも遠藤の原文は、「人格」概念こそ用いていないが、古典で得た知を身に体することで人格の完成を目指す修養論としても読めるかもしれない。たしかにこの時代、徳のある人格をもって周囲を感化し、それによって世の中を治めようとする修己治人の儒教的理想は、なお広く慣れ親しまれていたであろう。

しかし遠藤は、たとえば『硬教育』の「第三編　人格修養論」において「完全な人格は、世の中に存在して居らない。完全な人格を作らうと思へば必ず平凡な人間となる」とまで述べて[6]、人格の「完成」よりも、個人の特性を踏まえて長所を伸ばす教育を推奨していた（遠藤 1910：175）。

共知および可共知を知るという、他者を視野に入れ、何を学ぶべきかを問う「家学の書」の学問と教育の理念からすれば、儒教的な人格陶冶や修己治人といった観点による解釈だけでは、遠藤の「社会」への関心を取り逃がしてしまうように思われる。さらにそれは、「人情」の本とする所と「社会」の興る所以とをあわせて問うていく遠藤の関心をも、単なる旺盛な好奇心として片付けてしまうことにもなるだろう。

学問の指針を語った「家学の書」で、人と社会の二つの根本問題に同時に目が向けられたことの意味は大きい。最後にこの点に触れておきたい。

3．「家学の書」と社会学

学問の指針として見れば、「人情の本とする所」を知る意義を説くものは数多あるだろう。もっとも「家学の書」に「人情」概念の内実は示されておらず[7]、この語が概念史上は対人的な感情ばかりでなく、人間の感情一般や人間性をも含む多義的な語であることには注意を要する。とはいえ、遠藤が心理学的に物事を考察する自らの考え方を自覚していたことを踏まえるなら[8]、それを人間の心理的側面に関わる概念と推測してよいであろう。

だが本稿で注目したいのは、遠藤が「社会の興る所以」を知ることを強調した点である。ここには、「社会」という明治期に創出された訳語がそれなりに定着し、いまやその生成と発展が問題とされる時代となっている様子が見える。「人情」の根本を知るのも困難であるが、society の訳語として明治期に造語された新しい概念である「社会」の、しかもその生成発展の原因となると、それを知るのはいっそう困難である。もちろんその難しさは現代も変わらないものではある。

5　「而後」については、知と行動の先後を問題にする立場がある。学んでから行動するのか、行動してから学ぶのか、という問題である。とりわけ前者が、結局は行動に移さずに終わるということが問題視される。そのことを問題にした典型的なものとしては、陽明学における「知行合一」の思想があげられよう。これについて遠藤は、知行合一の思想が王陽明以前からの伝統であることを指摘し、陽明学を相対化しながらも、たしかにそれが「社会に対して種々の事業を起すやうな人物を輩出する所以」ともなる一方で、弊害もあるという。すなわち「善か悪か能く之を判別しない内に行に現さうとすれば、所謂軽挙妄動若くは大義名分を誤ることさへ有る」として、その例に大塩中齋（平八郎）の乱をあげている（ただし、それは「必しも悪い行為とは云へないかもしれぬが」という留保つき）。そして、善と知って直ちにそれを実行に移すことの必要と困難をあげ、「殊に今日の如く複雑なる社会に於ては、一の事業を起さうとしても綿密にその手段を考へて見なければならぬ、その手段を考へて何處から見ても欠点がないとしたならば直に行はなければならぬ」と述べ、「社会」がより「複雑」化している時代を踏まえた知と行動のあり方について言及している。ただし綿密に手段を考えた上での行為というのも「随分程度問題」であって、どこまで精査すればよいのか、欠点の有無の判断の困難さを指摘している（遠藤 1910:197-199）（引用中の傍点は引用者による）。

6　「完全な人格」は平凡な人間を作るという点を強調した遠藤であるが、孔子は例外であった。完全な人格でありながら「平凡の非凡」に達した孔子のような人は「殆ど類の無いこと」という。孔子に対して、その弟子たちについては「一技一芸に長じた人間であつた」と述べている（遠藤 1910：175）。

7　人情の語は古くは『礼記』（礼運編）や『続日本紀』にも見える。時代や文脈それぞれに意味が異なり、遠藤がここで「人情の本とする所」と言うときの「人情」の意味を「家学の書」だけからは確定しにくい。

8　後に遠藤は、「私の考え方（Denksweise；原文ママ）は全く先生〔元良勇次郎・心理学教授〕に出たといふて宜い。即ち物事を心理学的に考察するのが私の習慣である」と述べている（遠藤 1938：104-105）。

古典を手がかりとした学問考究について、古くからの語である「人情」と新たな造語である「社会」の根本を並べた。こうした記述には、東西の古典を学び、最新の欧米の社会学も吸収しながら、人間心理と社会の根本問題への問いをを重視した遠藤の学問的関心がよく表れている。

なかでも遠藤の社会学が、社会を心的現象と捉える観点に立ったことは重要である。遠藤は、当時アメリカの心理（学）的社会学を牽引していたギディングス[9]の主著 *The Principles of Sociology*（1896）を25歳という若さで翻訳出版[10]して以来、次々と社会学の著作を刊行し[11]、長きにわたって社会学に取り組み続けた。もとより遠藤の活動の幅は広く、社会学にとどまるものではない。しかし遠藤は社会学者として周囲からも認知されていたし[12]、1907年には自ら日本社会学研究所を設立して機関誌も発行し、厖大な論文や著作を刊行し、講演なども多く手がけるなど、日本の社会学研究の発展に広くかつ長く携わった。

その集大成とも言える社会学上の主著『社会学原論』（1922）の序文において、遠藤は「社会の発生及び其の法則」を研究した自身の成果をふり返っている。そこでは「社会」について、最初は「意志結合」の説を立て、10年を経て「社会力」の説を立て、そして（社会を共同生活と区別して）「精神連合」に求めるに至ったと整理している（遠藤1922：序1）。こうした遠藤の社会学、とくにその主著『社会学原論』に関する検討は、競争的研究プロジェクトの成果として共同研究者（権永詞[13]、中倉智徳[14]）とともに『商大紀要』等に発表する予定であり、そちらに譲りたい。

さしあたり本稿で確認しておきたいのは、意志結合、社会力、精神連合と中心概念を変遷させながら、遠藤が「社会の興る所以」を探究し続けていたことの意義である。というよりもむしろ、長く探究し続けたからこそ、中心概念を変遷させたのだと言うべきだろう。

したがって、遠藤自身にとって「共知すべきは何か」という問いへの回答は、「人情の本」とともに「社会の興る所以」であったと言える[15]。本文にしてわずか356文字の「家学の書」に、「人情」だけでなく「社会」への問題意識を書き込んだことは、社会学者遠藤隆吉なればこその見識として注目される点である。

9　Franklin Henry Giddings, 1855-1931。コロンビア大学教授。

10　ギッヂングス著、遠藤隆吉訳（1900）『社會學』東京専門学校出版部。刊行が遠藤の誕生日以前のため25歳とする。

11　『現今之社会学』（1901）を遠藤自身の社会学書の嚆矢として、『社會學及研究法』（1902）、『日本社會の發達及思想の変遷』（1904）等々、次々と社会学書を刊行し続けている。

12　遠藤は、日本社会学会が1940年に開催した臨時大会での講演会「紀元二千六百年記念公開講演」の５名の登壇者の内の一人であった（遠藤の演題は「社会学の学的及び社会的実現」）。他の４名は、建部遯吾、米田庄太郎、高田保馬、戸田貞三である（日本社会学会 1941）。日本の初期社会学を代表する面々であったと言ってよいだろう。

13　千葉商科大学人間社会学部教授

14　千葉商科大学人間社会学部准教授

15　今後の課題は多いが、たとえば「家学の書」との関連では、「人情の本とする所」と「社会の興る所以」の一端には、「共知」という知の共同性の問題が関わっているとも考えられる。共知と人情と社会という三つの概念の内的連関を問うことは、社会を「精神的連合」として捉えた遠藤の社会学の可能性を考える上で重要だろう。また遠藤は「個人」の心理に立脚して社会にアプローチしたことで、当時の主流をなしていた国家主義的社会有機体説にもとづく社会学には与しなかった（むしろ対抗的論陣を張った）（遠藤 1922:46）。そうした方向性をもった遠藤の社会学思想と、一方で遠藤によって展開された「国体論」との関連を問うことも重要な課題である。

参考文献

遠藤隆吉（1910）『硬教育』冨山房
遠藤隆吉（1922）『社会学原論』巌松堂書店
遠藤隆吉（1938）『巣園自傳』巣園學舎出版部
遠藤隆吉（2024）「家学の書」『家学の書』遠藤隆吉研究所 資料調査報告、第１号
遠藤隆吉（2024）「爲学之法」『家学の書』遠藤隆吉研究所 資料調査報告、第１号
朽木量（2024）「解題・論考」『家学の書』遠藤隆吉研究所 資料調査報告、第１号
日本社会学会編（1941）『年報 社会学』（第８輯）岩波書店

サステナビリティ研究所

環境マネジメント・コントロール研究の現状と課題

―昨年度の業績を中心とした成果報告―



千葉商科大学商経学部　教授
安藤　崇
ANDO Takashi

プロフィール

千葉商科大学商経学部・教授。1974年生まれ。神戸大学大学院経営学研究科を2010年に修了。博士（経営学）を取得。その後同志社大学商学部助教等をふまえ、2016年度に千葉商科大学商経学部に赴任。主な著書としては『環境マネジメント・コントロール:善行の内省と環境コスト・マネジメント』（中央経済社）2020年や、『ケースブック SDGs 経営:企業構成員を動機づける仕組み』（同文館出版社）2023年がある。

1. はじめに

大学時代私は人事労務管理のゼミに所属していた。人事労務管理は、経営資源の中でも「人」の問題に焦点を当てた経営学の領域である。現在は会計学を専攻しているが、元々正確に会計数値を求めたりするよりも、人の感情や成長に興味を持っていたからである。大学時代のゼミは大人数であったため、3つのグループに分かれていた。指導教員の関心を表していたのだろうが、①人（従業員）の心と成長、②労務管理（人的資源管理）システム、③環境経営というサブ・グループからなっていた。この体系が現在の私の研究関心の基礎をなしている。

私の専門領域は「環境マネジメント・コントロール（システム）」である。コントロールというとあまりよいイメージを抱く人はいないと思う。しかも人が人をコントロールするという内容であるため（例：トップがミドルを）、私もそれを知って以降しばらくは抵抗があった。ただ最初に「環境」が付いているので、社会や環境に配慮するように、トップがマネジャや従業員を動機づけるという意味で、現状それほど違和感を抱いてはいるわけではない。

要するに私の研究関心（問い）は、トップがミドルや従業員に対して社会環境に配慮しながら仕事をしてもらうために、どのように影響を与えることができるかという点にある。本プロジェクトは2年間にわたって展開しているため、なかなか単年度での成果報告は難しい。そのため、次節（第2節）では、この間の3本の業績（論文）の内容をもとに、以上の問題をどのように克服しようとしてきたかを具体的に述べていくことにしよう。本稿の目的は、研究助成期間における私の研究をふまえて現状を捉え、今後の研究課題を明らかにすることである。まず、ミドルや従業員がどのような気持ちやモチベーションで社会環境課題に取り組んでいるかについて検討したAndo（2026b）を要約・解説する（以下ではこうしたモチベーションを「環境モチベーション」とよぶ）。ここでは筆者のこれまで行ったインタビュー調査や他の研究者の先行研究を対象に、Maslowの欲求階層説で分析した。次にそうした環境モチベーションを高めるために、どのような仕組みが求められるかを検討した。1つは企業内の仕組みであり、社会環境に取り組んでよい成果を出せば、高い報酬（ボーナス）を与えるという社会環境報酬の実践を、オムロン株式会社を事例に分析した（Ando 2025）。もう1つは企業外の仕組みである。たとえ世界に名を馳せる巨大企業であっても、その単独の実行力は限られている。そのため現在サプライチェーン全体で、社会環境に対する取り組みが活発化している。つまり、バイヤー企業が社会環境に配慮した部品の供給をサプライヤーに求めると、サプライヤーはそれに応じることが望ましい動向となってきている（Ando 2026a）。最後に第3節ではこれら3つの研究成果をまとめた後、今後の研究の課題・展開についてふれる。

2. 研究業績の再検討

本節では研究助成期間における業績（Ando 2025；2026a；2026b）をもとに、主なファインィングと今後の課題について論じていくことにする。

2-1. Ando（2026b）: 環境モチベーションの具体的内容

環境モチベーションとは、企業構成員が社会環境に配慮しながら、仕事をする感情や意図、動機（マインド）を意味する。Ando（2026b）では、モチベーション研究分野では定評のある Maslow の欲求階層説にもとづいて、5つの階層の欲求が、社会環境経営においてどのような内容として具体的に展開しているかを明らかにした。ここでは自己実現や自己超越欲求として、CSV 経営に取り組む従業員のマインド（CSV マインド）についてふれておくことにしよう。

Porter and Kramer（2011）によれば、CSV（Creating Shared Value: 共通価値の創造）は「企業が事業を営む地域社会の経済条件や社会状況を改善しながら、自らの競争力を高める方針とその実行」と定義されている。この定義にもとづけば、企業が社会環境経営に取り組むのは、最終的に自社の利益や長期的な競争優位性を獲得するためということになる。つまり構成員は善行を自分の職務とすることになる。これを通して構成員は自らや自らの事業部、自社のみに限定せず、自分の職務をより広い文脈の中で位置づけ、その意義を捉えることができるようになるだろう。

Ando（2026b）ではキリン H. の事例分析等をふまえて、社会環境経営における自己実現とは、他者や社会に貢献することを通じて、自身の視野を広くし、行動・活動の本来の意義を捉えたり、捉え直したりすることとした。こうして自己実現欲求に動機づけられた従業員は、職務と社会のつながりを実感し、仕事に対してやりがいを見出そうとしていくのである。

ただ実際に企業構成員がどのようなマインドをもって職務に従事しているかについては、今後の課題として具体的に検討していく必要がある。また、Ando（2026b）では、Maslow の欲求階層の各々の階層の欲求が互いにどのような関係にあるかについては、論じなかった。この点についても今後検討していくことは重要である。また最終的には、こうしたマインドに対して、トップがいかに働きかけることによって、社会環境経営を実際に展開していくかといった論点も課題として重要である。

2-2. Ando（2025）: オムロンの社会環境報酬

ビジネス・システムは時間軸においても階層構造をなしている。具体的には時間軸で最も上位にあたるのは経営理念であり、これを具体化するために各種経営計画が策定される。経営計画は長期（10年以上のレベル）、中期（3～5年）、短期（年次）があり、短期の実現が中期のそれに貢献し、中期の積み重ねが長期の計画の実現につながるといったシナリオを描くことが望ましい。事例企業: オムロン株式会社は、経営理念である「われわれの働きで　われわれの生活を向上しよりよい社会をつくりましょう」を実現するために、中期環境計画（社会環境戦略）を実現する手段として社会環境報酬システムを設計・活用していた。社会環境報酬とは、社会・環境・経済の目標が実現できれば、経済的な報酬を与えるという実践である。確かに公共的・利他的な要素も含む社会環境活動を、経済的な誘因（インセンティブ）で動機づけることは、倫理的に問題がないとは言えない。ただ、社会環境活動を社内で実践したにもかかわらず、「それはあなたの自己満足ですよね。」と冷たくあしらわれてしまう企業において、社会環境経営が実現できるはずはない。こうした制度は、社会環境経営を展開する企業のいわば基盤をなすといってよいだろう。

ここで明らかになったことは、経営理念は各種経営計画に落とし込む際に、経営トップによって「解釈と具体化」されることが重要であるということである。通常経営理念は抽象的に表現されることが多い。いつまでに、具体的に何を、どれほどの経営資源を使って、いつまでに実現すべきかが明らかではないのである。トップは自分の任期における経営環境をふまえて重点課題を抽出し、それを企業内外に伝えることになる。経営計画の期間が短くなればなるほど、課題はより具体化し、責任者も特定化され、その課題を一体いくらの金額で達成すべきかといった制約ももたらされる。要するに経営理念の実現に向ける時間軸でのビジネス・システムとは「解釈と具体化」のプロセスなのである。

管理会計には「測定できないものは管理できない」という格言がある。ただ必ずしも定量化できないものもビジネスでは存在する。事例企業: オムロンでは、社会環境戦略（3年間の中期環境計画）を実現するために、定性的なシナリオを描き、そのマイルストーンとして3段階を設定し、それらを年次の業績評価目標とした。これをふまえると前述の格言は必ずしも正確ではなく、「（シナリオを描いて）段階的に捉えられないものは、管理できない」ということができるだろう。

2-3. Ando（2026a）：大和ハウス工業のグリーン・サプライチェーン

社会環境経営を積極的に展開している企業の多くは、大企業である。そうした企業はバイヤーとして多くのサプライヤーから部品を購入し、それを自社工場で組み立てて、製品として顧客に販売することが多い。こうした大企業の環境対策は、自社工場でCO_2が出にくい生産ラインをひくだけではない。自社のサプライヤーに対して社会や環境に配慮した部品を納入してもらう必要がある。現在国際レベルの認証取得に向けるバイヤーの要求に応じるために、数百社といったサプライヤー企業が動き始めている。事例企業：大和ハウス工業は、自社内での成功ロジックを、サプライチェーン全体にも展開していた。そのロジックとは、「対話による説得」である。社会環境課題は、人類全体、社会全体、地球全体の大きく重要な課題である。そのため、膝を交えて根気強く説得し、相手の心からの「理解」（自分ごととして捉えるという意味で「腹落ち」と事例企業は表現していた）を得ることができれば、取り組み始めてくれる可能性はある。

先行研究もふまえて、企業外部にコントロールの対象範囲を拡げるということは企業外主体の①継続的な社会環境経営に対する理解と協力を求め、②共通の目標に向けて影響を与えたり、③共通の価値（CSV:Creating Shared Value）に向けて（オープン）イノベーションをもたらしたりする3つの活動（ビジネス・プロセス）からなると定義することができた。

3. まとめと今後の研究の展開

最後に以上3つの業績の主な課題を端的にまとめた後、今後の研究の展開についてふれておきたい。

まずAndo（2026b）の環境モチベーション研究であるが、課題としてはCSVマインドを今後より具体的に明らかにしていく必要がある。方法としてはインタビュー調査を行い、実際に企業構成員がどのようなマインドでCSV経営に取り組んでいるのかを明らかにする計画を立てている。

次にAndo（2025）の社会環境報酬研究であるが、今後の課題として環境マネジメント・コントロール・システムの他のサブ・システムに分析対象を拡張していく必要がある。マネジメント・コントロール・システムは、もともと経営戦略の実現にむけるビジネス・システムであるが、具体的には予算・業績評価・報酬という3つのサブ・システムからなる（Anthony 1988）。本プロジェクトでは3つめの報酬制度に焦点を当てたが、今後業績評価や予算管理システムにも議論を展開していく予定である。

最後にAndo（2026a）の大和ハウスのサプライチェーンの事例研究であるが、ここでは脱炭素の目標設定をサプライヤーに促す内容を検討した。ただ今後はサプライヤーが自主的かつ継続的に目標達成に向けて取り組むことが望ましい。こうした取り組みに向けても、バイヤーはサプライヤーに影響を与え始めているため、こうした実践を分析していくことが今後の課題である[1]。

いずれにしても根本的に考えていくと、企業を構成する最小の単位は個人であるため、個人個人がいかにやる気を持って、社会環境課題を自分ごととして受け入れ、実際に仕事の中で実践的に展開していくことが重要である。そうしたモチベーションの高まりが、部署レベル、事業部レベル、企業レベルへと拡大し、業界レベル、国家レベル、国際レベルと展開していくことによって、社会環境課題は改善に向かうことになる。今後の最も重要な課題は、こうした個人レベルにおける環境モチベーションをより具体的に捉えることを通じて、それがいかに国際レベル（社会レベル）に集約されていくかといった構造を明らかにすることである。その構造はシステム全体の仕組みといった設計レベルと、その仕組みをいかに効果的に使うかという活用レベルの2つの側面で検討することが重要である。いずれにしても社会環境経営の実践は日進月歩の分野であるため、今後も重要な実践を日々探索・分析することを通じて、理論として体系化を目指していく予定である。

1　Ando（2026c）がこうした課題に対して取り組んだ研究である。事例企業キリンH.と塩野義製薬が自社のサプライヤーに対して、人権課題に自主的かつ継続的に問い組んでもらうためにいかに影響を与えているかについて議論した内容となっている。

引用文献

・Ando,T. 2025. Case Analysis of Corporate Systems for the Realization of Management Philosophy: New Functions of Environmental Management Control Systems. *The Journal of Chiba University of Commerce*, 62（3）: 73-97.
・Ando,T. 2026a. The Basis of External Environment Management Control Systems: A case study of green supply chain management at Daiwa House Industry Co., Ltd. *The Journal of Chiba University of Commerce*. 63（3）: 41-60.
・Ando,T. 2026b. The Foundation of Internal Environment Management Control Systems. *Journal of Sustainability at the Chiba University of Commerce*.2: 31-51.
・Ando,T. 2026c. The Development of External Environment Management Control Systems: Case Studies of Leading Companies' Approaches to Human Rights Issues. *The Journal of Chiba University of Commerce*.64（1）:1-21.
・Anthony, R.N. 1965. *Planning and Control Systems:* A Framework for Analysis. Harvard University Division of Research.
・Anthony, R.N. 1988. *The Management Control Function.* Harvard Business School Press.
・Maslow, A.H. 1943. A Theory of Human Motivation. *Psychological Review.* 50（4）: 370-396.
・Maslow, A.H. 1954. *Motivation and Personality*. Harper and Row.
・Porter, M. E. and M.R.Kramer. 2011. Creating Shared Value: How to Reinvent Capitalism and Unleash a Wave of Innovation and Growth. *Harvard Business Review.* 89（1/2）: 62-77.

サステナビリティ研究所

ポストパンデミックにおける中心業務地区の再構築

―バンクーバー・グランビル・ストリートの歩行者空間化を事例に―



千葉商科大学総合政策学部　教授
榎戸　敬介
ENOKIDO Keisuke

プロフィール

都市計画の実務を経て、米国とカナダで都市計画・デザインの修士号・博士号を取得。琉球大学、阪南大学を経て 2017 年より現職。最近の研究テーマは、モントリオール中心業務地区の再構築における文化・エンターテインメント政策の関わり。

ポストパンデミックの中心業務地区（CBD）の課題

新型コロナの世界的な大流行（パンデミック）の終了宣言が2023年に世界保健機関（WHO）によりなされた後、中心業務地区（Central Business District, 以下 CBD）の再構築が、世界のグローバル都市の政策・計画上の新たな課題となっている。本稿は、そのような都市の一つであるカナダ・バンクーバー市の CBD に焦点をあて、ポストパンデミックの CBD の変容について検討する。

CBD は、工業化社会の意思決定機能が集中する中枢的都市空間として20世紀の大都市の空間構造を決定づけてきた[1]。脱工業化社会がさらに進展する過程で、金融、情報、知識、高度サービス産業が新たな都市型産業としての重要性を増し[2]、都市間競争がグローバル都市の新しい課題となる中で、CBD の機能強化に向けての取り組みが政策的課題として認識されるようになった。その象徴として、世界的に著名な建築家による高層オフィスビルが都市のアイコンとして競われるように建設が進んだ[3]。

21世紀に入り、観光やエンターテインメントなど文化的消費や都市イメージが都市の競争力に影響を与える要素として重要視されるようになる中で、CBD は従来のビジネスの場としてだけではなく文化的消費の場としての性能が問われるようになった[4]。このような社会経済的変化を背景に、CBD にとってビジネス目的だけではなく文化的消費を目的とする人々を集めることが重要な課題となってきた。日本でのその代表例は、大手町・丸の内・有楽町地区の再開発である。従来、ビジネス機能に特化してきた同地区では1980年代後半から地区全体の再開発は課題であったが、21世紀に入り、都市間競争の主体としてより明確に文化的消費を意識した再開発を目指すようになり、例えば2011年には地区レベルでの都市観光ビジョンも策定されている[5]。海外都市の CBD においても文化的消費は重要課題となり、ビジネス目的以外の人々も引き寄せ、魅力的な公共性ある空間の配置やデザインが促進されるようになった[6]。このように、CBD における多様な人々の集中や交流による経済的、社会的、文化的意義が追求されるようになっている。

しかし、2020年初頭から拡大した新型コロナパンデミックは、全世界の CBD の活動を停滞させることになり、多様な人々を惹きつけることが CBD の新たな課題となっていたところ、その求心力が大幅に損なわれることになった。対面交流の機会が突然制限されオンラインでの業務が拡大すると、世界の大都市中心部から人の姿が消えることとなった。その後パンデミックが終了しても、CBD はパンデミック前の状態に復旧したのではなく、その再生・再構築が新たな都市計画・都市デザインの課題となっている。

ポストパンデミックの新しい CBD のあり方につい

1　Murphy, R.E.(1972) *The Central Business District: A Study in Urban Geography,* Chicago:Aldine-Atherton.
2　Sassen, S.(1991) *The Global City,* New Jersey: Princeton University Press.
Sassen, S.(2001) 'The Impact of the New Technologies and Globalization on Cities', in Graafland,A. and Hauptmann, D. (eds). *Cities in Transition,* Rotterdam: 010 Publishers.
3　Sklair, L. (2017) *The Icon Project: Architecture, Cities, and Capitalist Globalization,* Oxford: Oxford University Press.
4　榎戸敬介 (2014)『中心業務地区(CBDs)の観光化:理論的アプローチの可能性を探る』観光科学 第６号.
5　大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり懇談会 都市観光ビジョン検討委員会(2019.12) 大手町・丸の内・有楽町地区 都市観光ビジョン 2019年 改定版.
6　例えばロンドンでの戦略的な取り組みが注目される。Greater London Authority (2008) *London's Central Business District: Its Global Importance.*

ては、2021年にRichard Florida[7]が、Milder[8]によって再定義された、ビジネス機能に対しより多様な社会的交流やエンターテインメントを重視するCentral Social District（CSD）という概念を使い、新たなCBDの姿を提示した。CSDは、CBDに対して実体的に定義づけられた概念ではないが、ポストパンデミックのCBDのあり方についての議論を呼び起こす一つのきっかけともなっている[9]。しかしながら、ポストパンデミックのCBDの空間計画・デザインについてはまだ十分に議論されていない。本稿では、ポスト・パンデミックのCBD像として提示されたCSD概念を問題設定の手がかりとし、具体的な空間再編のあり方を検討する。

バンクーバー市CBDの再構築への取り組み

以下では、バンクーバー市中心地区を対象として、多様な人々の交流を促す具体的な空間づくりに着目する。Floridaは、公共空間の重要性、都心の社交化、文化施設・イベント・ホスピタリティの集積、都心の経験消費化などをCSDの特性として論じるが、具体的な空間を扱ってはいない。これらは、身近で比較的小規模な空間で展開されるものであり、プレイスメイキング研究でも議論されている空間特性である[10]。

著者は、ポストパンデミックとなる2024年からバンクーバーCBDの観察を再開したが、その過程において、テンポラリー・アーバニズムやタクティカル・アーバニズムなどと呼ばれる、即時的、短期間、安価に行われる都市変容の現場を訪れ、プレイスメイキングで着目する小規模の空間変化の重要性について認識するにいたった。以下に、同市内の具体的な小規模空間に焦点をあて、CBD変容との関わりについて検討する。なお、ここでは、小規模な空間についての定義を面積的に行うのではなく、操作的定義として、一つの街区の一部分を構成する空間として位置づける。例えば、街区道路、歩行者空間、あるいは広場やスクエアなどである。これらは、プレイスメイキングの主要な研究対象でもある。

具体的な場所として、都市マネジメント組織であるDowntown Vancouver Business Improvement Association（DVBIA）が管轄するDowntown Van District（図1）として指定された地区を対象とする。DVBIAは同地区の管理・運営のために設立された非営利組織であり、同市中心部の経済の強化、そして住民・勤労者・ビジターを迎え入れ、感動させる環境づくりに貢献することを目的としている[11]。その活動領域は、コミュニティの安全性、経済開発、マーケティング、プレイスメイキングに関わるもので、地区の多様なステークホルダーとの協働をもとに実施される[12]。DVBIAが策定し発表した5か年戦略計画Strategic Plan 2023-2028[13]によれば、バンクーバー市の立場は、中心業務地区（Downtown Core）の活力を生み出し、観光・居住・勤労・遊びの視点から世界クラスの都市としての地位を維持すること、つまり、バンクーバー市においてCBDは戦略的な重要性があると認識するものである。また、このような取り組みは、CBDからCSDへの転換というポストパンデミックのCBDモデルの推進とも理解できる。

このStrategic Planが優先する課題は、より安全な中心部の創造、人々が訪れたくなるような理由の提供、中心部の経済を発展させビジネス活動に対する障害を低減すること、DVBIAメンバーとステークホルダの結びつきを強化すること、活気あふれるグランビル・ストリートを推進すること、以上の五項目である。

7 Florida, R.（2021） *The Death and Life of the Central Business District,* Bloomberg, https://www.bloomberg.com/news/features/2021-05-14/the-post-pandemic-future-of-central-business-districts（2026年8月7日閲覧）.

8 Milder, N.D.（2017） Central Social Districts: more details and discussion. https://www.dropbox.com/scl/fi/2t6lrn5m2teoufmam12mn/CSD-for-DVRPC.pdf?rlkey=x5by0mgrmntsmd4bnujtdwm07&e=2&dl=0（2026年8月7日閲覧）.

9 Urban Design Lab.（2024） *Rethinking Central Business District and the Rise of the Central Social District.* https://urbandesignlab.in/rethinking-the-central-business-district-the-rise-of-the-central-social-district/?srsltid=AfmBOoo20iU2ZG8jar8Qky1guG1HbGitkAZGIYI4w8IfZbubhg_6RCGf（2026年8月7日閲覧）.
Lonescu,D.（2021） The Future of Central Business Districts: Urbanist Richard Florida assesses post pandemic possibilities for neighborhoods that once relied on 9-to-5 workers, *Planetizen,* https://www.planetizen.com/news/2021/05/113417-future-central-business-districts（2026年8月7日閲覧）.
Longtin, M.J., and Mitchell, M.D.（2021） Requiem for the American CBD: The Impact of COVID-19 and a Dispersed Workforce, *Journal of Geography and Geology;* Vol. 13, No. 2; 2021.
Vigiola, G.Q., Cilliers, J., and Lozano-Paredes, L.H.（2022） Reimaging the Future of the Sydney CBD: Reflecting on Covid-19-Driven Changes in Commercial and Residential Property Trends, *Urban Planning,* Vol.7, Issue 3, 49-62.

10 Kickert,C., Miller,C.,and Shibley,R.G.（eds.）（2026） *Place and Placemaking,* New York: Routledge.

11 Downtown Van Districtは、バンクーバー市が設定するDowntownとは同一ではなく、より限定的な地区となる（City of Vancouver, Open Date Portal ‘Local area boundary）.

12 Downtown Van.（2026） *State of Downtown 2026.*

13 Downtown Van.（2023） *Strategic Plan 2023-2028.*



図1　Downtown Van District のエリア
（State of Downtown 2026より転載）
https://www.dtvan.ca/wp-content/uploads/2026/04/SOD2026_Spreads_Digital_Mar26_Compressed.pdf

グランビル・ストリートでの DVBIA による実験的取り組み

グランビル・ストリートは Downtown Van District の中心軸となる道路で主要バス通りでもある。また、1985年に開業したスカイトレイン（高架鉄道）のグランビル・ストリート駅へのアクセスでもあり、都心の交通結節点である。歴史的には、バンクーバー中心部に入る主要道路として1880年代に森林を切り開いて建設された直線的な道路であり、同市の最も古い構成要素である[14]。CBD 内の沿道には、The Orpheum（1927年開業の劇場）、The Commodore Ballroom（1928年開業のダンスホール）、や Vogue Theatre（1941年開業の映画館）等の歴史的な建造物が残り、かつての劇場通り（Theatre Row）としての雰囲気を残している。DVBIA は、沿道地区の治安や清潔さとともに、イベントによるプレイスメイキングを進めている。その現状について以下に説明する。

DVBIA にとっての課題は、コロナパンデミックの影響を受けて停滞する同地区の再活性化である[15]。DVBIA は、飲食業や映画館、劇場などコロナパンデミックの影響を直接受けたビジネスが立ち並ぶグランビル・ストリート再活性化のために、Granville Street Reimaging というプロジェクトを立ち上げた[16]。最も大きな課題は、商業スペースの空室率の高さだけでなく、比較的高い犯罪発生率となっている。このような課題に対する小規模な空間の質に関わる提案として、プレイスメイキングが挙げられている[17]。なお、グランビル・ストリートを変身させるための公的な計画は、バンクーバー市議会により Granvill Street Plan として2025年に承認されており、昼夜、年間を通しての活動により、活気ある、安全で居心地がよく、多様性があり活力に満ちたエンターテインメント地区となることを新たなビジョンとしている[18]。その目指すところは、ライブ演奏、飲食、市民生活、そして祝祭のための最高の文化・観光地区である。このように、CBD の中心軸となる街路を、文化的消費あるいは娯楽・憩いの空間に変化させることが政策目的として明確に示されている。DVBIA は、Granville Street Plan を法的な枠組みとして市とのパートナーシップを組み、日々の賑わい空間の管理・運営を行う。その実践として、2026 FIFA ワールドカップをきっかけに開始したグランビル・ストリートの歩行者空間化について以下に示す。

バンクーバー市は、ワールドカップの期間中2026年6月11日より7月20日まで1か月超の間、グランビル・ストリートを歩行者ゾーン（Granville Street Pedestrian Zone）とすることとした（図2）。その後、同市は計画を変更し、歩行者ゾーンを9月7日まで延長することにした。以下に、その観察結果を示す。

図2が示すように、グランビル・ストリートに設定された歩行者ゾーンは5つのブロックによって構成される。この空間において歩行者の活動が促進される。グランビル・ストリートの延長は各ゾーンともに約150mである。以下に、3つのゾーンについての観察結果を整理する。残り2つのゾーンについては、夜間活動の安全性から観察を控えたため、本稿では取り扱わない。

14　Clapp,A., and McEwen, S.R. with the assistance of Malcolm, M., and Amunsen, B.（1978）*Granville Street Report,* A report prepared for The Granville Street Improvement Committee and the City of Vancouver.
15　バンクーバー市の失業率はパンデミック前の2019年は4.5%前後であったものが、2025年には6.4%程度となっている（Government of Canada　2025 3 Month Seasonally Adjusted Unemployment Rates by EI Economic Region - Canada.ca）.
16　Downtown Van.（2025）*Granville Street Reimagining,* https://www.dtvan.ca/projects/granville-street-reimagining/（2026年8月7日閲覧）.
17　Granville Street Reimagingでは、人々のための道路デザインとして、都市デザインやプレイスメイキングの取り組みを通じてグランビル・ストリートを歩行者優先の空間へと転換し、魅力的な居住環境を促進することで通りを魅力ある都市空間として位置づけるとともに、代替的な移動手段の利用を推奨する、とされている。DVBIA-Granville-Street-Vision-FINAL-1.pdf（2026年8月7日閲覧）.
18　City of Vancouver（2025）*Granville Street Plan,* https://guidelines.vancouver.ca/policy-plan-granville.pdf（2026年8月7日閲覧）.

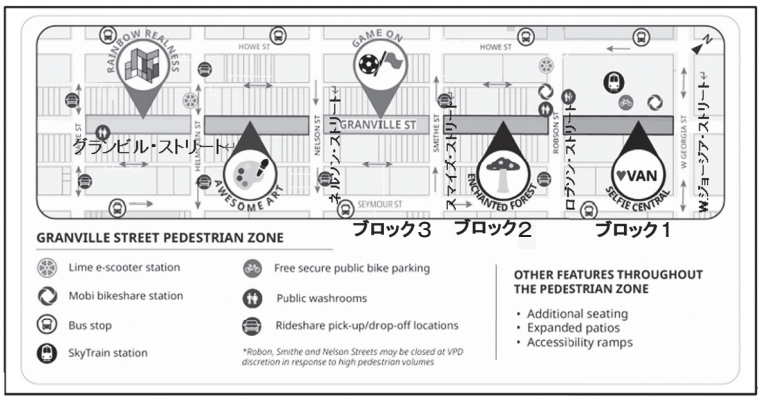


図2　グランビル・ストリート歩行者ゾーンのマップ
（https://vancouver.ca/files/cov/granville-ped-zone-programming-and-placemaking-map.pdf を筆者が加工）

1）ブロック1（Selfie Central）：W. ジョージア・ストリート（W.Georgia Street）とロブソン・ストリート（Robson Street）に挟まれた歩行者ゾーン



図3　ロブソン・ストリートから北側の歩行者ゾーンへのアクセス
（筆者撮影）



図4　W. ジョージア・ストリートからのグランビル・ストリート歩行者ゾーンへのアクセス（筆者撮影）

図3は、ブロック1をロブソン・ストリートから北側（マップでは右側）の W. ジョージア・ストリートに向かう歩行者空間を示している。ロブソン・ストリートはグランビル・ストリートに直行するダウンタウン中心部の道路で、CBD の商業・業務機能を支えるもう一つの主軸である。ピンク色のコンクリートブロックと車止めのコーン、歩行者空間であることを示す緑色の標識（Granville Street Pedestrian Zone と表記）により、ロブソン・ストリートからグランビル・ストリートへの車両進入を規制している。なお、グランビル・ストリートはバス交通の主軸でもあるが、歩行者ゾーンの期間中は迂回ルートが設定されている。道路上空にはカナダ国旗の色である赤と白の旗を連続させたガーランドにより疑似的な天井空間が設置され、ゲート性を持たせたアクセス空間が演出されている。さらに、道路上に設置されたステージテントやインス



図5　DVBIA によるインスタレーションのメンテナンス
（筆者撮影）



図6　ロブソン・ストリート側から南側のグランビル・ストリート歩行者ゾーンの全景（筆者撮影）

タレーションアートが祝祭的雰囲気を生み出している。また、道路に面した両側の建物の高さが3、4階であることが、通りへの圧迫感を少なくしている。現場は性別、年齢層、人種など多様な人々の存在により構成されており、本地区がCSDを特徴づける社会的交流の空間として開放的な環境を市民や訪問者に提供していることがわかる。

図4は、W. ジョージア・ストリート側のアクセス空間となる。道路両側のバナーにより、祝祭的空間としてのイメージが強調されている。このようにブロックへのアクセスを示すデザインにより、歩行者ゾーンへの誘導がなされる。図5は、同ブロックに設置されたインスタレーションアートのメンテナンスの様子を示している。DVBIAがこの作業にあたっており、破壊行為（バンダリズム）の抑止としても公的設置物のきめ細かい管理が必要であることがわかる。図6は、ロブソン・ストリートから南側（マップでは左側）のグランビル・ストリート歩行者空間の全景を見通している。ここでは、赤・白旗のガーランドが歩行者ゾーンの延長を示しており、グランビル・ストリートを軸に直線的に連結する交流空間の方向性を高めている。

2）ブロック2（Enchanted Forest）：ロブソン・ストリート（Robson Street）とスマイズ・ストリート（Smithe Street）に挟まれた地区



図7　ブロック2の歴史的建造物である The Commodore Ballroom とキノコのインスタレーション（筆者撮影）

図7、8が示すように、ロブソン・ストリート南側のブロックには、歴史的建造物の The Commodore Ballroom と The Orpheum とが存在し、エンターテインメント地区としてのグランビル・ストリートを性格づけている。劇場やダンスホールなどの文化施設には、エントランス周辺に人が集まれるような空間があるため、通りの賑わいの拠点として有効である。このような象徴的な建造物を背景に、キノコのインスタレーションや道路上のペイント等により仮設のイベント空間が演出されている。また、図8は画面奥の高層ビルに対し、本ブロックの建造物の高さが比較的低く、道路の上空が開放的であることを示している。このように、平面的には道路と歩道という面的に限られた空間であっても、低層の建物の存在により、垂直方向に圧迫感の少ない親しみやすい街路景観ができている。



図8　ブロック2の歴史的建造物である The Orpheum とその前面道路空間（筆者撮影）



図9　ロブソン・ストリート南側ブロックに設置された歩行者ゾーンの地図と、期間延長を示すサインボード（筆者撮影）



図10　道路上に設置された利用者の少ないベンチ（筆者撮影）

図9は、歩行者ゾーンの地図と、その期間延長についての説明を示すQRコード付きのサインボードである。車止めとしてピンク色に着色されたコンクリートブロックと、バリケードで使用されている緑色の二色を使用して作成されたもので、テーマ性のある色使いによって歩行者ゾーンの一体感を高める工夫がなされていることがわかる。一方で、図10が示すように、場所と時間帯によっては車道上に設置されたベンチの利用は必ずしも活発でない状況がある。イベントやストリートパフォーマンスなどがない空間、すなわち滞留する特別の理由のない空間では、ベンチを置いてもその利用が期待できないことがわかる。プレイスメイキングでは、公共空間にベンチを置くことは基本的な空間活性化の手法であるが、利用度が低い場合は、その活性化に失敗しているイメージが強調される可能性があるため、歩行者空間デザインの見直しも必要となることがわかる。

3）ブロック3（Game On）：スマイズ・ストリート（Smithe Street）とネルソン・ストリート（Nelson Street）に挟まれた地区



図11　スマイズ・ストリートから南側の歩行者ゾーン（筆者撮影）



図12　バーの入り口にかけられたバーウォッチ（BARWATCH）のサイン（筆者撮影）



図13　連続する路上パティオ（筆者撮影）



図14　Vogue Theatre周辺の夜間景観（筆者撮影）

図11は、北側（マップでは右側）から三番目のブロック（Game On）へのアクセス空間を示している。画面後方に歴史的建造物のVogue Theatreの看板が見える。本地区にはバーが集中しており、昼間に比べ飲酒を伴う夜間の賑わいに特徴づけられる。図12はバーウォッチ（Bar Watch）と呼ばれる飲酒の管理プログラムのサインで、このプログラムに加盟しているバー・レストランの入り口に設置されている。バーウォッチは、客が店に入るときの身分証明の提示や、問題を起こした客の情報を加盟店間で共有することにより、出入り禁止となっている客や前科があるギャングなどを排除し、夜間の安全性を確保するものである。

図13は、道路両側に並ぶバー・レストランがグランビル・ストリート路上に張り出すかたちでそれぞれパティオを設置する空間を示している。簡易な観察では、昼間はほとんど人の気配がなかったが、図14が示すように、夜になると人出が増え、パティオで飲酒する人々も増える。パティオは路上に設置されるため、その快適性は周囲の環境や景観に影響される。したがって、図13のように、通りの向かい側のパティ

オとの距離があり空間的に疎と感じやすい、あるいは印象的な建物などがないような場所では賑わいは生まれにくいことが分かる。

考察

以上、本稿では、ポストパンデミックのバンクーバーCBD の空間再構築の状況を把握するために、グランビル・ストリートを軸とする3つのブロックの歩行者空間化の試みについて検討した。この試みは、ポストパンデミックでは初開催となる FIFA ワールドカップという世界規模のイベント開催都市としての立場を利用したものであるが、当初の期限を延長して歩行者ゾーンを継続したところに示されるように、市当局および地区の利害関係者からの都市中心部そして CBD における歩いて安全かつ祝祭的な経験を可能にする小規模な空間への関心の高さと重要性が見てとれる。グランビル・ストリートの歩行者ゾーンの期限が今後さらに延長されるのか、あるいは恒久的な空間として整備されるのか注目したい。本稿では紙面の制約上取り上げなかったが、ロブソン・ストリートの一部ではすでに通年の歩行者空間が設定されており、グランビル・ストリートでの歩行者空間化が実現した場合には、小規模な歩行者空間のネットワークが広がり、CBD における社会的交流機能と都市イメージに大きな影響を与える可能性がある。以上の観察から、歩行者空間化そのものが社会的交流を生み出すのではなく、イベントやインスタレーションによる利用の契機、沿道の文化施設や建築空間との関係、さらに継続的な管理運営が組み合わされることによって、CBD に新たな交流空間が形成されることが示唆される。

このような継続的な管理運営において重要な役割を果たしているのが、地区に特化した非営利のマネジメント組織である DVBIA である。市当局と DVBIA は協働の関係にはあるが、DVBIA は空間そのものを計画・デザインするのではなく、イベント企画・運営、日々の設備メンテナンスや清掃、地区の見回りなど、行政が提供しきれない地区に特化した公的サービスを提供する総合空間マネジメント主体である。CBD という多様な地権者や建築物、商業、ビジネスなどのステークホルダーの存在に加え、多様な人々の利用を支援し促進するためには、長期的・包括的に責任を持つ市当局に対し、空間の創造的な利用を企画・運営し、毎日の管理を担う DVBIA のような実務的な組織の関与が不可欠であることも確認できた。

以上のように、ポストパンデミックの CBD にとって、それぞれの特性に応じた再構築の手法が必要だろうが、業務機能以外の多様な機能、特に誰にでも開かれた歩行による安全で祝祭的な社会的交流を促進する小規模な空間形成は一つの有力なテーマであることが確認できた。なお、このような試みは、屋外の公共空間を中心とする取り組みになるため、安全性に加え、昼夜、季節変動、気候などの自然的な条件への対応が重要である。

サステナビリティ研究所

相互に学び合う国際関係を通じた島嶼型持続可能観光モデルに向けて：フィジーと奄美大島との比較研究



千葉商科大学総合政策学部　准教授
藤田　輔
FUJITA Tasuku

プロフィール

慶應義塾大学商学部卒業。立教大学大学院経済学研究科修士課程修了。同博士課程（途中 University of Essex に派遣留学）単位取得満期退学。みずほ銀行、独立行政法人経済産業研究所（RIETI）、経済協力開発機構（OECD）日本政府代表部、上武大学等の勤務を経て、26 年 4 月より現職。専門は開発経済論・国際機構論。著書に『開発途上国への外国直接投資の実態』。

1．はじめに

本研究プロジェクト「島嶼国の持続可能な開発に向けた潜在性の発掘及び日本との相互的関係性：観光の受入れの観点から」は、現地調査を踏まえ、太平洋島嶼国のフィジーと国内島嶼地域の奄美大島の比較を通じて、これらの持続可能な開発の可能性につき、観光という地域資源を活用する産業の観点から検討した上で、両者が相互に学び合う国際関係を通じた島嶼型持続可能観光モデルを提示することを目的とする。

一般的に、島嶼地域は地理的隔絶性、市場規模の小ささ、製造業発展の制約、交通・物流コストの高さ、自然災害への脆弱性といった構造的制約を抱えている。その一方で、豊かな自然環境、固有の文化、地域コミュニティに根差した生活様式を有することが多く、これらは観光資源として大きな潜在力を持つ。

持続可能な観光に関しては、UNEP and UNWTO (2005) が、観光の発展を経済的利益の拡大だけでなく、環境保全、文化尊重、地域社会への利益還元と結び付けて考える必要性を指摘している。また、島嶼地域の脆弱性については、Briguglio (1995) が小規模性、遠隔性、外部ショックへの脆弱性を論じ、小島嶼開発途上国 (SIDS：Small Island Development States) の経済開発に関する研究の基礎的視点を提供している。さらに、Murphy (1985) を発端としたコミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する研究は、観光開発における地域住民の主体性の重要性を示してきた。

さらに、本稿では、これらの議論に加え、Ostrom (1990) が論じる共有資源（コモンズ）の管理にも注目する[1]。ここでは、自然資源等の共有資源を持続的に管理するためには、国家や市場だけでなく、地域コミュニティの主体的関与と適切な制度設計が重要であることが示されている。この視点は、フィジーと奄美大島を比較する上で有効であると考えられる。すなわち、後述するとおり、フィジーでは住民の行動に積極性が見られるため、地域コミュニティの主体性に強みを持つ一方、世界自然遺産を有する環境を背景として、奄美大島は適切な制度・資源の管理に主眼を置いているのだが、両者を比較することで、島嶼地域における持続可能な観光の条件をより立体的に把握できることが期待される。また、両者とも自然環境を基盤として観光を主要産業の一つに位置付ける島嶼地域である一方、歴史的背景や資源管理の仕組みが異なることから、比較研究の対象として適している。

2．分析枠組み

ここで、島嶼地域における持続可能な観光を考える際の分析枠組みを述べる。これに関しては、少なくとも、自然環境、文化、経済、交通・アクセスの4つに関する持続可能性の視点が必要である。島嶼地域では、自然環境や固有文化そのものが観光資源となる一方、観光は地域経済を支える重要な産業でもある。また、島という地理的条件からも、航空路や航路等の交通・アクセスは、観光客の受入れだけでなく、地域住民の生活基盤としても重要な役割を果たす。これらは相互に関連しており、いずれか一つのみでは持続可能な観光は実現するのは難しい。本稿では、これら４つの視点を踏まえつつ、それらを支える主体に着目する。すなわち、地域住民の主体性を基盤とする「コミュニ

1　本稿では，Ostrom（1990）が論じる共有資源管理論を厳密に検証することを目的とするものではなく，比較分析を行う上での理論的視点として援用している。

ティ主導型」と、制度やガバナンスを基盤とする「制度・資源管理型」という２つの観点から比較分析を行う。

これに基づき、下記３．以降で考察を図ったところ、本稿では、フィジーと奄美大島の主な特徴は、表１のとおりに概ね整理できる。すなわち、島嶼地域における持続可能な観光は、地域住民の主体性だけでも、行政や制度による管理だけでも十分ではない。両者が共に長所を学び合い、それらを補完的に組み合わせることにより、自然環境、文化、経済、交通・アクセスを統合したモデルが形成されるのではないか。この比較を概念的に示せば、図１のようになる。

表１　フィジーと奄美大島における持続可能な観光の比較

比較項目	フィジー 「コミュニティ主導型」	奄美大島 「制度・資源管理型」
持続可能性を支える基盤	地域コミュニティや現地住民	世界自然遺産，行政，DMO，認定ガイド等
観光の担い手	地域住民との交流が中心	行政・地域団体・観光事業者の連携
自然資源の活用	保全活動そのものが観光体験	科学的・制度的な自然資源の管理
文化資源の活用	地域文化を滞在中に体験	地域文化の保存・伝承・ストーリー化
ホスピタリティ	歌・儀礼等の地域文化そのもの	島唄・伝泊等を活用した地域文化の発信
交通・アクセス	航空や離島アクセスを観光商品化	住民交通と観光交通の両立
今後の課題	制度化や資源管理の強化	住民主体の交流型観光の拡充

出所：筆者作成



図１．島嶼型持続可能観光モデルの概念図

出所：筆者作成[2]

３．フィジーにおけるコミュニティ主導型の持続可能な観光

フィジーは南太平洋（メラネシア）に位置する島嶼国であり、観光は同国経済の中核を成す産業である。2025年８月23～30日に実施した現地調査では、ナンディ、クアタ島、パシフィックハーバー、スバを訪問し、宿泊施設（Barefoot Kuata Island Resort 及び Pearl South Pacific Resort）、在フィジー日本国大使館、国際協力機構（JICA）、公益財団法人海外漁業協力財団（OFCF）、国連児童基金（UNICEF）等でのヒヤリングを行った[3]。その結果、フィジーの観光の特徴として、自然環境、地域文化、住民参加が有機的に結び付いている点が確認された。

第一に、自然保護を観光体験に組み込む姿勢である。例えば、クアタ島のリゾートホテルでは、海洋保護区に位置する立地を活かし、サンゴ礁保全や海洋生態系に関する解説を宿泊客に提供していた。これは、自然を単に鑑賞対象とするのではなく、保全活動そのものを観光価値に転換する試みである。島嶼地域での観光においては、自然環境が観光資源であると同時に、保護すべき生活基盤でもある。フィジーの事例は、観光客が自然保護の意義を学び、地域の環境保全に参加する「守る観光」の可能性も示している。

第二に、地域住民との交流を観光価値にする点である。例えば、パシフィックハーバー近郊の Village Tour では、カヴァの儀礼、村落散策、伝統工芸品の販売、伝統舞踊等が住民主導で行われていた。これは、地域文化を一方的に展示するのではなく、観光客が地域住民との交流を通じて文化を体験する仕組みである。もっとも、参加者数は決して十分とは言えず、文化観光としての見せ方や広報には改善の余地もある。しかし、地域住民が観光の担い手となり、収入機会を得るという点では、「コミュニティ主導型」の観光の重要な要素を備えている。

第三に、ホスピタリティが地域文化と結び付いている点である。クアタ島のリゾートホテルでは、歌による歓迎や見送りが日常的に行われており、それは単なる接客サービスではなく、フィジー文化そのものの表現として機能していた。このようなホスピタリティの姿勢は、観光客に強い印象を与えるとともに、地域住民の文化的誇りを可視化する役割を果たしている。

一方で、フィジーの観光には課題もある。外国資本への依存、人材流出、廃棄物処理、過剰漁獲、災害・気候変動への脆弱性等である。また、観光交通がリゾートや観光客向けに整備される一方で、実際に目にした現地の様子からも、離島部における住民の日常的な移動手段は十分とは言えない。したがって、フィジーではコミュニティの力を活かしつつ、それを支える制度的・組織的な資源管理を強化する必要がある。

2　本概念図は、Murphy（1985）のコミュニティ・ベースド・ツーリズム論及び Ostrom（1990）の共有資源管理理論を参考にしつつ、筆者がフィジー及び奄美大島での現地調査を踏まえて、独自に作成したものである。

3　フィジーにおける現地調査を踏まえた成果報告については、Fujita and Yamada (2026) を参照ありたい。

4．奄美大島における制度・資源管理型の持続可能な観光

奄美大島は鹿児島県に属し、鹿児島市と沖縄本島のほぼ中間の南方海上に位置する一方、豊かな亜熱帯照葉樹林、マングローブ、希少生物、島唄、大島紬、シマ料理、集落文化等、多様な自然・文化資源を有する島嶼地域である。2021年にはユネスコの世界自然遺産に登録され、自然環境の保全と観光利用の両立が重要な政策課題となっている。2026年2月９～11日の現地調査では、奄美市役所及び伝泊赤木名ホテルでのヒヤリングに加えて、加計呂麻島（離島部）ツアーや金作原のトレッキングツアーに参加し、これらのガイドからも詳しい説明を受け、奄美大島における観光振興、自然保護、文化継承、交通インフラ等の状況を確認した[4]。

奄美大島の特徴は、世界自然遺産登録を契機として、自然資源を制度的・科学的に管理しようとする枠組みが形成されている点にある。保護区域の設定、利用ルール、認定ガイド制度、行政・観光関係者・地域団体の連携等は、観光利用による環境負荷を抑制しながら、自然資源を次世代に継承するための重要な仕組みだと見られる。これらは個々の取組みではなく、行政、観光関係者、地域団体等が共通ルールの下で自然資源を管理するガバナンスとして機能している。この点から、奄美大島は「制度・資源管理型」の持続可能な観光の先進例として位置付けることができる。

また、奄美大島では、島唄、大島紬、黒糖焼酎、琉球・薩摩との歴史的関係等、文化資源をストーリーとして発信する取組みも進みつつある。これらは、単なる自然観光に留まらず、島の歴史や生活文化を理解する観光へと発展する可能性を持つ。さらに、修学旅行、フィールドワーク、持続可能な開発（SDGs）の学習、ワーケーション、伝泊等を通じて、滞在価値を高める観光モデルも形成されつつある。

一方、交通インフラの面でも、奄美大島には重要な示唆がある。路線バス、フェリー、離島航路は、観光客だけでなく、通学、通院、買い物等、地域住民の生活を支える公共インフラとして維持されている。島嶼地域における交通は、観光アクセスであると同時に、重要な生活インフラでもある。この点は、観光交通が優先されがちなフィジーにとっても参考になり得る[5]。

奄美大島の観光にも課題はある。近年、宿泊施設の建設、クルーズ船の来航、インバウンド需要の増加等を通じて、地域によってはオーバーツーリズムの様相を呈している。また、観光資源の維持が行政を中心とした制度や管理に偏重されると、地域住民が観光の主体として関与する機会が限定される可能性がある。奄美大島の持続可能な観光をさらに発展させるためには、制度や管理に加え、住民参加、文化体験、地域経済循環をより強化する必要がある。

5．フィジーと奄美大島の相互学習の可能性

以上を踏まえると、フィジーと奄美大島は、互いに異なる強みを持つ島嶼地域であると言える。そこで、両者が共に長所を学び合い、それらを補完的に組み合わせることにより、環境、文化、経済、交通を統合した持続可能な観光のモデルを提示していきたい。

それに先立ち、ここで、両者が学び合える点を整理すると、まず、奄美大島は、自然保護を観光商品化する発想、地域住民との交流を観光価値とする考え方、観光客数より滞在価値を重視する姿勢について、フィジーから学ぶ余地がある。一方、フィジーは、自然保護と観光利用を両立させる制度設計、DMO を活用した地域マネジメント、教育旅行の受入れ体制等について、奄美大島の経験を参考にできる。また、運輸インフラの面では、フィジーは航空・離島アクセスを観光商品化する点に強みを有する一方、奄美大島は住民交通と観光交通の両立という点で示唆を与える。

6．政策的含意と結論

本稿から得られる政策的含意は3点ある。第一に、島嶼地域の観光政策は、観光客数の拡大よりも、自然環境、地域文化、住民生活への配慮を重視した「質」の高い観光へ転換する必要がある。第二に、観光振興は地域住民の主体性を伴わないと持続しない。フィジーの事例は、文化やホスピタリティが地域住民の誇りと結び付くと、観光が地域社会の力を引き出す可能性を示している。第三に、住民主体の観光を支える制度やガバナンスの整備が不可欠である。奄美大島の事例は、世界自然遺産制度、認定ガイド、DMO、交通政策等を通じて、観光と資源管理を結び付ける重要性を示している。

そこで、本稿では、フィジーを「コミュニティ主導型」、奄美大島を「制度・資源管理型」とそれぞれ位置

4　奄美大島に特化した詳細な考察については，別途，学術論文として成果を公表する予定である。
5　もっとも，観光客の目線では，奄美大島の公共交通機関は決して充実しているとは言えず，約７割がレンタカーを利用するという現状もある。

付け、持続可能な観光に向けて、両者の相互学習の可能性を検討する。その結果、島嶼地域の持続可能な観光は、地域住民の主体性と、制度に基づく資源管理の双方が補完的に組み合わされることで実現される点を見出すことができる。このような知見は、地域コミュニティの主体性と適切な制度設計の双方が共有資源の持続的管理にとって不可欠であるとするOstrom（1990）の議論とも整合的である。また、Murphy（1985）が指摘した地域住民主体の観光開発の重要性についても、島嶼地域の比較研究という観点から再確認するとともに、それを支える制度やガバナンスの役割を具体的に示した点に本研究の特徴がある。

フィジーと奄美大島の比較は、単なる地域比較に留まらない。それは、島嶼地域が互いの経験から学び合い、自然環境、文化、経済、交通を統合した持続可能な観光を実現するための国際的な協働モデルを構想する試みである。今後は、両地域の現地調査結果をさらに精査し、行政、観光事業者、地域住民、観光客の関係性をより具体的に分析することで、島嶼型持続可能観光モデルの実証的・理論的に精緻化を図る必要がある。また、本稿で提示した島嶼型持続可能観光モデルは、太平洋島嶼国と日本との相互学習を通じた観光政策や国際協力のあり方を考えるための一つの分析枠組みとして活用できる可能性も有している。

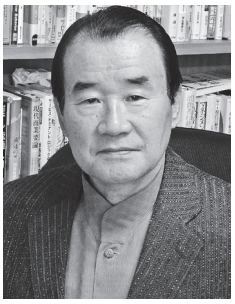
参考文献

JICA（2022）『フィジー国持続的経済成長に係る情報収集・確認調査』
JICA（2022）『大洋州地域観光開発に係る情報収集・確認調査』
鹿児島県「奄美群島振興開発計画（令和６年度～令和10年度）」
https://www.pref.kagoshima.jp/ac07/20240718amasinnkeikaku.html
環境省「奄美大島，徳之島，沖縄島北部及び西表島 世界自然遺産」
https://kyushu.env.go.jp/okinawa/amami-okinawa/index.html
観光庁「観光地域づくり法人（DMO）とは」
https://www.mlit.go.jp/kankocho/seisaku_seido/dmo/dmotoha.html
Briguglio, L.（1995）, “Small Island Developing States and Their Economic Vulnerabilities,” *World Development,* Vol. 23, No. 9, pp. 1615-1632
Fujita, T. and K. Yamada（2026）, ”Fiji’s Sustainable Tourism: Environmental, Cultural, and Economic Perspectives in Relation to Japan”, *Journal of Sustainability at the Chiba University of Commerce,* Vol.2, pp.22-30
Murphy, P. E.（1985）, *Tourism: A Community Approach,* Methuen
Ostrom, E.（1990）, *Governing the Commons: The Evolution of Institutions for Collective Action,* Cambridge University Press
UNEP and UNWTO（2005）, *Making Tourism More Sustainable: A Guide for Policy Makers*
UNWTO（2018）, *Tourism and the Sustainable Development Goals: Journey to 2030*
Fiji Tourism Bureau, Loloma Hour
https://www.fiji.travel/loloma-hour

評 論

市街地再開発地域のまちづくり
―その現状と課題、新たな方向性―

千葉商科大学中小企業経営研究所　客員研究員
前田　進
MAEDA Susumu



プロフィール
千葉商科大学総合研究センター中小企業経営研究所客員研究員. 博士（商学）
㈱マネジメントコア前田　代表
主要著として『小売・サービス業の経営学』（同友館 2016 年）、『サービス・ドミナント・ロジックの核心』（同文舘 2021 年、共著）など

はじめに

まちづくりという用語に共通認識された定義は見当たらないが、地域活性化、地域おこし等、類似の呼称の活動がある。それぞれの対象とする範囲、施策や活動目的、あるいは実施主体によって、多少の相違点が見られる。例えば、地域活性化は地域力の創生・地域の再生を目指して、経済的な視点から観光誘致、企業誘致など域外からの資本の流入を目指しており、地域おこしでは地域の資源に着目し、地域の魅力の再発見や、それらの活動を通じて地域への帰属意識・繋がり力の強化（コミュニティの活性化）を図ることが主たる目的となっている。

また、まちづくりには、住民はもとより、地元の多くは中小企業や外部資本の大企業等、様々な関係者が関与している。多くの場合、地域活性化事業では自治体や企業が主体となり、地域おこしの事業では、企業や住民有志が主体になって実践されている。さらに、まちづくりについては、活動実践の中で、その定義は多様に用いられるが、共通しているのは、地域の人々が安心して暮らせる環境整備のために自ら発意し、行政や多くの団体と協働して進める活動であるという点であり、都市計画が行政主導で実施されることに対して、まちづくりは、住民主体で遂行する点に大きな特徴があるとされている。

本稿においても、敢えて平仮名表記にした「まち」を、地方自治体が主体として関与する、建物、土地を中心とした区画としての町、街と区別して、そこに住み活動し生活しているすべての人々の心の中に宿るふるさと、生まれ故郷などといった、むしろ文化的な視点から捉え、そうした地域のハード面、ソフト面、時にはハート面の充実に関わる活動をまちづくりと表現することとする。そして、さらにその中でも市街地再開発地域（以下、再開発地域）におけるまちづくりについて、その現状と課題について考察していくこととする。

再開発地域におけるまちづくりは商店街近代化事業などのように商業者中心の経済的基盤のみでなく、住民、新住民を含む社会的、文化的基盤に関わる事業であり、多様な価値観を持った複数の行為者が関与し、しかも長期間にわたる再開発事業と連動して行われる活動となるために、その運営には、企業経営における単一組織とは異なる、独自のマネジメント力が必要になる。

本稿では、これまで35年以上に亘り、さらに今後、完了まで10年にわたる再開発事業に関与し、新たな地域のまちづくりに取り組んでいるまちづくり組織の代表者、事業者そして中核となる企業へのヒアリング調査を実施し、まちづくりの現状と課題を明らかにし、その方向性について提示する。

1. 地域におけるまちづくり

(1) 地域商店街のまちづくり事業

地域のまちづくりは、地域の商店街が主体となって行うのが基本で、そこには商店街が住民の暮らしを支え、文化をはぐくみ、街の機能を維持する施設と共存しながらコミュニティを形成する重要な役割を果たしてきた歴史がある。そのため、商店街を軸として行われる商店街活性化事業や近代化事業は、まちづくりの第一歩として長年実施されてきた。

商店街活性化事業は、地域のコミュニティ機能や住民の生活基盤を担う商店街を対象に、国や自治体（都道府県・区市町村）が施設整備や活性化の取り組みに

対して補助金を交付する事業として実施されてきた（全国商店街振興組合連合会　商店街まちづくり事業事務局『商店街まちづくり事業　応募申請ガイドブック』他参照）。具体的には、施設整備・環境・防災（歩車道の整備、街路灯のLED化、アーケードの改修、防災備蓄品や防犯カメラの設置など）などのハード面の事業と各種イベント、キャッシュレス決済環境の整備、空き店舗の活用事業など、地域連携（町会・自治会やNPO等の地域団体と連携した賑わい創出）などのソフト面の事業、担い手育成（青年部や女性部が中心となって実施する小規模事業の支援）などの人材・組織に関する事業が実施されている（補助金の性格により、イベントが除外される場合もある）。

次に、商店街近代化事業では、中小小売業者が共同で行う店舗の近代化や共同施設の整備、防災性の向上と商店街の振興を図る事業が実施されてきた。自治体ごとに補助金や国による支援制度を活用し、街づくりや環境整備を推進している。具体的には、共同店舗の建設（中高層の耐火建築物などの共同建設）によって、防災街区の形成を図る、近代化設備の導入（アーケード、街路灯、共同駐車場、防災設備などのインフラの整備）、まちづくり協定（将来の商店街像をビジョンに、個店改装と行政の都市計画との連携）など、商店街の集客力を強化しつつ、地域づくり、地域のインフラ整備、強化を目指す取り組みが行われてきた。

一方で、これらの事業運営の母体となる組織の面では、公的支援の活用を視野に、法人格を持つ商店街振興組合の組織づくりが推進され（昭和37年商店街振興組合法公布）てきた。

これらの活動を通じて、商店街は、単なる「買い物の場」から地域住民の生活を豊かにする「暮らしの広場」としての役割を担うという性格を強め、地域社会の発展にも寄与してきた。

このように、地域の商業者を中心として行われてきた地域のまちづくりは、近年、当該地域の規模、特性を踏まえ、再開発という新たな手法によって地域の大規模改造計画として遂行される例が活発化している。ここでは、地域商業者や既存の住民による商店街の近代化、活性化の枠を超えて、新たな関係者、行為者を含めた地域全体を視野に入れたまちづくりが行われる。

(2) 市街地再開発事業によるまちづくり

国土交通省報告（令和6年3月）によれば、日本の市街地再開発事業（以下、再開発事業）は、昭和44年に制度が創設されて以来、実施地区は増加し、令和4年度までに、既に、1190地区で実施されている（内1021地区は完了）。

再開発事業の目的は、「都市再開発法に基づき、市街地内の老朽木造建築物が密集している地区等において、細分化された敷地の統合、不燃化された共同建築物の建築、公園、広場、街路等の公共施設の整備等を行うことにより、都市における土地の合理的かつ健全な高度利用と都市機能の更新を図る」（国土交通省のホームページより）こととしている。今回対象とする神奈川県の運用目的は、「老朽化した建築物が密集する地域や土地が細分化された場所を統合し、防災性の高い建物や公園、道路などを一体的に整備する都市計画手法で、安全性・利便性を高め、地域の活性化を図る」こととしている（神奈川県ホームページ他）。

再開発の具体的な事業内容は、①防災性の向上（木造住宅の密集地域を不燃化し、広場や避難経路となる道路の確保）、②土地の合理的利用（細分化された敷地をまとめ、中高層の共同建築物を建てることで、オープンスペースの創出）、③都市機能の更新（商業施設や住宅、公共施設などを立体的に配置し、魅力ある街並みの形成）などの事業行為である。

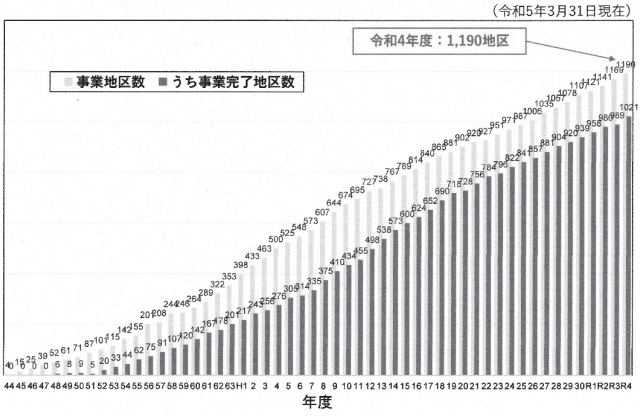


図１市街地再開発事業の実績

国土交通省「最近の再開発事業の動向について」令和６年３月資料より

具体的な事業の仕組みとしては、「第一種市街地再開発事業（権利変換方式）」と「第二種市街地再開発事業（用地買収方式）」がある。前者は、主として民間主導、個人施工で実施され、既存の土地や建物の所有権が、新しく建てられた再開発ビルの専有床（権利床）に変換されることによって、生み出された余剰床（保留床）

を処分し、建築費用や公共施設整備費用の資金に充当するものである。一方、後者は、公共性が特に高い駅前広場や幹線道路の整備を伴う事業に適用され、施行者が土地や建物を買い取り、公共施設や再開発施設を大規模に整備する手法が取られている（国土交通省ホームページより）。

(3) 市街地再開発地域のまちづくりの特性

いずれの場合であっても、再開発事業におけるまちづくりは、老朽化した建築物や細分化された土地を統合し、高層ビルや公共施設を一体的に整備する手法によって、土地の合理的・健全な高度利用と、防災性の向上や都市機能の更新を同時に実現する点が大きな特徴とされている。商店街の近代化事業は、1968年に創設されて以降、1994年の大店法の撤廃を経て、商業者が顧客となる住民や来街者（一般的には消費者）を対象に、大型店、郊外のショッピングモールなどに機能面での遅れを取らないように、設備の近代化を目指した環境整備を行うという、比較的ミクロレベルの経済的行為を主眼としてきた。これに対して、再開発事業は、現代の社会課題を背景に地域全体を大改造するメソ・マクロに及ぶ経済的、社会的、文化的行為にまで拡大された、異なる視点でのまちづくりの考え方である。

より具体的な事業内容としては、①低層の木造住宅などの密集エリアや複数の敷地を統合し高層マンションや商業・業務ビルを建設し、生活・都市機能の複合化（高層ビルに住居、オフィス、低層部に商業施設、医療機関、保育・福祉施設の集約）を図り、コンパクトなまちとしての利便性を向上、②この結果、空地や緑地を確保し、多目的使用可能な空間や場を創出し、道路拡幅や広場、公園などの公共施設、歩行者デッキなどの整備による一体的なインフラの整備を実現し、利便性、回遊性を向上、③新たな建築基準に沿った建物として、不燃・耐震化の促進の結果、防災性と安全性を向上、等々、都市機能の向上と住民、利用者のための利便性向上のメリットが指摘されている。同時に、地域固有のブランド力も向上し、他地域にない魅力度を高め、地域の総合力を強化するという狙いもある。

また、権利変換制度の場合、既存の地権者にとっても新たなビル内の区分所有権（床）の活用によって、立ち退くことなく再開発後の施設に再入居できるなどのメリットも指摘されている。

2. 市街地再開発事業のマネジメントにおける課題

こうした再開発事業の対象となる地域内に、既存の商業者組織が存在する場合は、当然のことながら商業活動の継続も含めて、より複雑な調整が必要となる。これまでも地域まちづくりにおいては、郊外型大型店の台頭やシャッター通りの問題等への対応策として、商店街活性化・地域活性化への取り組みが行われてきた。そうした活動は、地方公共団体中心の行政主導から、住民や民間企業を巻き込んだ「官民協働」へと主体が移行し、自治体や商店街、民間企業、住民が出資して独立した運営組織として「まちづくり会社」を立ち上げ、タウンマネジメントを一元化する手法などが多くの自治体で採用されるようになってきた。しかし、法人としての収益の確保、補助金依存、主導主体のマネジメント力の格差などがその成否を分ける壁となっている。

一方、商業者と顧客である住民を対象とした商店街活性化を包含する形での再開発事業は、地方公共団体、開発に関わるデベロッパーらが、地権者、地域の既存の住民、商店街の商業者を含む事業者等を巻き込んで、複数の関係者・行為者によって事業が遂行される特性がある。さらに、完成した新たなまちには、新たな住民、テナント商業者・事業者等、さらにその魅力に注目する来街者も含め、多くの人々が関わり、それぞれの期待をもって関与する。そうした様々な関与者がそれぞれ求める価値に応えていかなければならない。しかも、開発期間は商店街の活性化や近代化事業に比して、はるかに長期に亘るために、その管理、まちづくりマネジメントは非常に緻密な計画と強固な意志、そして事業の進捗に連れて変化する事象に柔軟な対応力をもって進められていく必要がある。特に、1964年の新潟地震、1995年阪神・淡路大震災、2011年東日本大震災など、進行途上で発生した大規模自然災害を契機に各地域で防災再開発促進区の指定等国土強靭化が推進されている。不燃化や防災広場を備えた再開発事業が増加傾向にあり、その結果、新たに関心を持つ事業者、新住民の地域選定条件は増加し、市街地再開発地域間の競争がさらに激しくなることも十分に予想される。このことは、長期に亘る再開発事業も戦略的な発想を持って臨む必要があることを意味している。そこで、現実にこれらに長期関与した地元のまちづくり協議団体の代表者らへのヒアリング調査から、その

現状と課題を確認した。

3. 市街地再開発地域のまちづくりの現状…上大岡マスタープランの会代表者へのヒアリング結果

(1) 運営組織代表者へのヒアリング調査

本調査は、横浜市の副都心として位置づけられている上大岡地区の再開発事業に、1991年の事業開始時期から、協議組織「上大岡マスタープランの会」の活動を通じて、地元での合意形成の中心的な役割を担ってきた2名（山野井氏、横尾氏）へのインタビューを通じて行った。

「上大岡マスタープランの会」は、横浜市南部の中核拠点である上大岡駅周辺地区（約18ha）を対象に、共同建築、建築物用途、建築デザインなどを、事前協議として行ってきた地域のまちづくり協議組織である。地元町内会、商店街、住民、企業が一体となって段階的な再開発と街並みルール作りを検討するため、1990年代に発足された。現在、上大岡地域では駅周辺のＡ～Ｃ南の3地区の開発を終え、第4地区（Ｃ北地区）の開発が始まろうとしている、大規模な開発事業を推進中である。会では、横浜市、横浜商工会議所の支援を得て、地域関係者を集め、シンポジュウムを開催し、意見を収集する、勉強会を連続して実施するなど、まちの将来像を探索する活動に取り組んでいる。

代表者らへのヒアリング調査は、事業の黎明期から現在に至るまでの経緯、関係者間の複雑な利害調整の実情、そして事業を成功に導いた要因と今後の展望について、具体的なエピソードを確認しながら行った。

(2) ヒアリング調査の結果

①再開発事業の黎明期は三位一体での始動

上大岡地区の再開発事業は1990年代に入ってすぐに始まった。地元側の機運が高まった直接的なきっかけは、地域の商店街内の営業店の駐車場に、相続税対策を目的とした賃貸マンションの建設計画が持ち上がったことであった。当時、商店街の建物は木造建築の腐食など老朽化が深刻化しており、以前から再開発に期待する気運は存在していたが、このマンション建設が再開発の事業化を急がせる引き金となった。

別途、京浜急行電鉄にヒアリングしたところ、「再開発の機運上昇と並行し、京急電鉄内でも鉄道ビルと開発を、地域活性化と一体で推進する方針を固め、当地区の再開発計画が動き出した」といい、その結果、横浜市、京浜急行電鉄社、地元商店街による「三位一体」の協力体制が構築された。横浜市側には、鎌倉街道の慢性的な交通渋滞を解消するため、駅前にバスターミナルを整備したいという強い動機があり、各関係者の利害が一致したことが、事業を強力に推進する原動力となった。この枠組みのもと、京浜急行電鉄の線路移設を含む駅舎改良工事と、商店街の再整備を同時に進めることが可能になった。

②事業推進における多様な関係者との利害調整

再開発事業の推進には、地権者、デベロッパー、住民など多様な関係者が関わるが、多くの場合、もっとも困難を極めるのが権利関係の調整であろう。当該事業の対象となる地権者の権利割合は、土地所有者「3」、借地人「7（そのうちまたがし（転貸）2）」という比率で構成され、さらに土地・建物の所有形態や営業実態によって権利が細分化されていた。この複雑な権利調整と立ち退き交渉を円滑に進めるため、市の専任者の配置があり、さらに、市と地権者の間に立ち、対立を防ぎながら合意形成を促す媒体役として、再開発事業専門のコンサルタント事業者が地権者の間を奔走した。交渉が難航し、最終的に代執行が視野に入るケースもあったが、感情的な対立を避け、事前に代替住居を手配するなど、粘り強く調整を継続した。このような困難な業務を担った担当者には、高い調整能力が求められるが、その点で「非常に優秀な人材に恵まれたことも、事業の進行を可能にした大きな要因である」（山野井氏）。

③成功の要因：合意形成とイノベーションの促進手法

まさに地域の未曽有の事業にあって、それぞれの立場と利害意識を持つ関係者に対して、互いの強固な結束と合意形成を促すことは最重要事項である。当該事業においては、いくつかの独自の工夫と手法が用いられた。その中でも象徴的な取り組みは、山野井・横尾氏によれば、10年間に亘り駅前再開発協議会で行ってきた国内や海外視察の体験である。これまでに経験したこともなく、我が国では事例が少なかった未来の姿を共有するために欧米を含む先進的な都市開発やショッピングセンターを視察し、都市開発の意義や具体的な手法、そして現実の都市の姿を確認し、イノベーションの将来を視覚的にイメージできたことは、その後の事業運営に有意義な影響を与えた。また、この共同体験の中で、立場を超えた強固な団結力が育まれたことも、長期にわ

たる事業運営の中では、意思疎通をなだらかにし、互いの関係に風通しを良くする上で大きな収穫であった。

事業のもう一つの成功要因は、前例にとらわれないイノベーションへの挑戦である。「当初、百貨店の運営経験がない京急電鉄社が自社で百貨店を手掛けることに、地元からは反対の声も上がった。しかし、大阪市阿倍野の近鉄百貨店の視察を機に、百貨店建設への合意の決断ができた」(山野井・横井氏)。百貨店は、開業当初は直営方式で成功を収めたが、時代の変化に対応するために、進行過程でヨドバシカメラのような強力な専門店を導入するテナントミックス型へ事業モデルを転換するなど、環境変化に柔軟に対応している。この変革は、近年、百貨店の新たな行き方を示す先駆的な事例となり、結果としてまちの競争力を大きく高める効果につながっている。

④事業の継続と発展：A 地区から C 地区、そして未来へ

初期の A 地区[1]再開発が完了した後も、B 地区(camio[2]の整備)、C 南地区(mioka[3]整備)を完成し、さらには次の C 北地区に継続する継続的なまちづくり計画へと発展している。

A 地区での成功体験は後続地区開発のモデルケースとなったが、再開発事業は長期に亘るために、一度建てて終わりではなく、それぞれの関与者(組織)間での合意形成のため、長期的なマネジメントが不可欠であるとの認識が共有されている。そのため、ハード面の整備に留まらず、新たな住民やテナントが入れ替わる中で、街全体の魅力を高めるソフト面、ハート面の取り組みを重視している。具体的には、複数の商店街や商業施設が一体となって開催する「熱祭(ねつまつり)」のようなイベントを通じた文化的な側面を強化し、共通の目的、価値観、そして地元への帰属意識や継続的な相互作用を創出するコミュニティの醸成を図っていくことを重視しており、地元でのマネジメント役として、マスタープランの会の役割は継続している。再開発によって新しい住民が増えるにつれ、古くからのイベントに対する騒音クレームが発生するなど、新旧住民間の価値観の相違という新たな課題も浮上しており、ハード面だけではない心のつながりをいかに構築していくかが新たな課題となっている。

⑤今後の課題と展望：地域間競争を勝ち抜くための戦略

高輪ゲートウェイシティをはじめ全国で大規模な再開発が進む中、上大岡が独自の魅力を保ち、地域間競争に勝ち抜くためには新たな戦略が求められる。今後の最大の課題は、「上大岡に行ったら何があるのか」という問いに応える明確なオリジナリティを確立することである。具体的には、「高齢者などが気軽に立ち寄り休息できる「止まり木」のような癒しの空間や、人々が自然に集える広場の創出が不可欠である」(山野井・横尾氏)。特に、天候に左右されず誰もがアクセスしやすい1階レベルの集積場所の確保は、B・C 南地区以降の再開発における重要なテーマである。

(3) 開発行為主体からの活動報告

地元での事業調整を遂行するマスタープランの会代表者らへのヒアリングに加え、メンバーである、京浜急行電鉄と京急百貨店、連合町内会、商店街の代表者からも活動指針が示されている。①京浜急行電鉄からは、地域と共に、「上大岡地区を含む沿線エリアマネジメント構想によって、沿線の人々を含む価値共創戦略によって、エリア価値の向上を目指している」、②京急百貨店からは、「長年上大岡地区で培ってきた商業ノウハウを活かしてさらに住みたくなる街づくりに寄与できるような提案をしたい」、③連合町内会からは、「住み続けたいまちづくりにハード面整備後のソフト面の充実をしたい」、④中央商店街からは、「住みやすい街づくりを目指して、人間関係づくりを重視したい」といった、それぞれの関係者が、代表者からのヒアリングを裏付ける具体的な活動(事業)指針を提示している。

これらから、当該再開発事業において、最も重視されていることは、2つの視点に集約される。一つは居住空間としての住みやすさ、住み続けたいまちづくりであり、もう一つは京急電鉄沿線の他地域の中での上大岡地域のエリア価値の向上である。

(4) シンポジュウム参加者の要望

そこで、マスタープランの会では、一つ目の課題である住みやすさの追求のため、住民を中心としたシンポジュウムを開催し、意見を聴取した。そこでは、①防災センターへの要望(安全性)、②人が集まれるみんなにやさしいまちづくりを希望(利便性)、③座る場、オープンスペース、電柱の地中化など住みやすいまちづくり(開放性、快適性)、④若者の集まる核施設(文化性)、⑤生まれ育ったことを誇れるまちづくり(文

1　駅直結の「オフィスタワー」や「京急百貨店」、「ウィング上大岡」などの開発
2　多様な店舗や住宅が入る複合施設
3　映画館や商業施設、住宅からなる

化性)、⑥将来を見据えたまちづくり(戦略性)、⑦若者のまちづくり組織への参加(組織力)、⑧共生・共創をキーワードにしたい(エコシステム)、などの具体的な要望があげられた。

4. 市街地再開発によるまちづくりの課題

ヒアリング調査で示されたように、再開発事業には多大なメリットもあるが、従来の商店街の近代化、まちの活性化とは異なる次のような問題や解決していくべき課題がある。

①建物などのハード面の事業に想像以上に長期間を要する事業であること

②比較的同質的な目標を持つ商業者中心の商店街事業に比べ、複雑な権利関係の調整が必要であること

③初期の地権者との関係だけでなく事業の過程で入居する新規の事業者、新規の住民を含む異質の関係者が関与する事業となるため、事業の経過とともに変化する関係者のそれぞれの立場、価値観の相違を前提に、組織的に運営していかなければならないこと

これらの問題に対応するため、段階ごとに関係者の合意形成が重要であり、事業に対する意識改革をはかり、関係者のスキルやナレッジを高め、関係者間の価値の共有のために調整し、協働してそれを共に創造していく強固な体制づくりが必要である。

まちづくりとは、まさに地域の問題解決のプロセスでもある。とりわけ再開発事業を組み込んでのまちづくりでは、想像を超える多くの関係者と、それぞれの立場、利害の調整に忙殺される。具体的な建設計画一つをとっても、法令順守のための手続きや長期にわたる工期中の安全確保、まちの構造自体の変化が住民の利便性を損なうことなどへの対応に多くの労力が求められる。しかし、まちづくりは建築して終わりではなく、その後に、いかに本来のまちづくりの指針が活かされていくかが重要である。このため、地域関係者との綿密な情報交換、情報収集を行い建築後のまちの維持・発展のソフト面の事業に尽力していく、つまり、心のつながり、コミュニティ性を高めるというハート面の充足に留意が必要である。ハード・ソフト・ハート面のマネジメントに注力し、特色ある個性的な魅力を創造し、まちの競合優位性を高めていかなければならない。事業が長期に亘る特徴から、関係者の量的・質的変化をとらえ、将来を見据えた戦略的な視点を持つことが重要である。

5. まちづくりの課題と新たな方向性

再開発事業の手法を用いたまちづくりは地域の既存の事業者、住民の枠を超えて多様な関係者が関与する長期的、組織的な事業である。したがって、事業推進には複数の関係者を包含する独自のマネジメント力が必要である。複数の行為者が関与する組織的活動は、社会的実践理論でも課題となる「社会構造」と「生活者をはじめとした関与する人々」が、どちらかが一方的に行為を行うのでなく、共生し、価値を共に創造することを重視することをもって実現されなければならない。そのため、ハード面の事業のみならず、ハート面を重視する事業の強化によって、互いの価値を共に創造する活動が求められる。そのためには、複数の関係者、行為者が将来の存続、発展を目指した価値の創造のために事業プロセスに協同で参画していることが重要である。そして、これら関係者との間で長期的に調整し続ける組織としてのマネジメント力が、まちづくりに関与する運営団体に求められることである。地元の運営団体にとっては、行政との調整、建設計画の円滑な遂行は大きなプロジェクトではあるが、それが最終目的ではないことが、本調査事例からも明らかになったといえる。そしてこれらのことは、マーケティング研究の分野から発し、現在話題となっている S-D ロジックで明らかにされた、多様な行為者が、互いのスキル、ナレッジ等の資源を交換し、相互作用しながら行うサービス志向の価値共創のプロセスを示唆しているともいえる。



上大岡駅前再開発地域：京急上大岡駅・京急百貨店側から撮影

総合研究センター出版物情報

■『国府台経済研究』

●第31巻第1号「オリンピック復興運動に関する社会文化史的考察特集号」2021年3月
執筆担当者：大賀紀代子・師尾晶子・藤野奈津子・荒川敏彦・沖塩有希子・朱珉

●第31巻第2号「安全で公平な金融システムの実現に資するFinTechフレームワークの提案特集号」2021年3月
執筆担当者：大矢野潤・鎌田光宣・小林直人・宮田大輔・柏木将宏・長尾雄行・橋本隆子・平井友行

●第32巻第1号「防災についての学際的な研究」2023年3月
執筆担当者：山田武・榎戸敬介・榊沢順・五反田克也・吉羽一之・渡辺恭人

●第32巻第2号「産官学連携による社会の課題解決型アクティブ・ラーニングに関する研究」2023年3月
執筆担当者：小口広太・朝比奈剛・小寺徹・勅使河原隆行

●第33巻第1号「高等教育機関の教育・研究に対する非政府部門の資金贈与に関する研究」2024年3月
執筆担当者：朱全安・平原隆史

●第33巻第2号「訪日外国人旅行客により新婚旅行の特徴と発展可能性に関する考察」2024年3月
執筆担当者：山田耕生・今井重男

●第34巻「労働観の表象と変遷に関する比較歴史社会学的研究」2025年3月
執筆担当者：荒川敏彦・松下幸生・奥寺葵・朱珉・師尾晶子

■『CUC View&Vision』

●第51号「特集ー社会科学におけるモデル分析」
2021/ MAR., 全58ページ。

●第52号「特集ーCUCの倫理教育」
2021/ SEP., 全62ページ。

●第53号「特集ー社会科学におけるデータ分析」
2022/ MAR., 全54ページ。

●第54号「特集ーCUCのアクティブ・ラーニング」
2022/ SEP., 全62ページ。

●第55号「特集ー社会科学における歴史分析」
2023/ MAR., 全48ページ。

●第56号「特集ー社会科学を総合した未来のデザインにむけて」
2023/ SEP., 全48ページ。

●第57号「特集ーCUC学術研究紹介」
2024/ MAR., 全48ページ。

●第58号「特集ー科学研究費にサポートされた研究の報告」
2024/ SEP., 全72ページ。

●第59号「特集ー千葉商科大学とESD」
2025/ MAR., 全68ページ。

●第60号「特集ー防災・エネルギーセンター設置」
2025/ SEP., 全100ページ。

●第61号「千葉商科大学の教養～特集①哲学思想編～」
2026/ MAR., 全78ページ。

●第62号「千葉商科大学の教養～特集②言語文化編～」
2026/OCT., 全96ページ。

■各研究所の最新情報、活動中の研究プロジェクトの概要や研究成果及び刊行物の内容は、Webサイト（https://www.cuc.ac.jp/institute/）でもご覧いただけます。

2026年度より、『View&Vision』は10月31日の年一回発行となります。

編集後記

今号の巻頭特集「千葉商科大学の教養」は、前号の「哲学・思想編」に続く第２弾として、「言語文化編」をお届けしました。言語をどのように学ぶのか、言葉と文化はどのように結びついているのか、そして異なる言語を知ることによって私たちの世界の見え方がどのように広がるのか。それぞれのご専門やご経験から論じられた寄稿を、興味深く拝読しました。

振り返ってみれば、外国語を学ぶための環境は大きく変わりました。かつては語学学校に通ったり、テレビやラジオの語学講座を視聴したりすることが中心でしたが、その後、オンラインで海外の人々と会話できるようになり、現在では生成 AI を相手に、自分の関心や習熟度に応じた学習さえ可能になっています。外国語の習得に苦労してきた者としては、少し羨ましくも感じる変化です。

しかし、今回の特集を読みながら、道具や環境がどれほど便利になっても、それだけでは十分ではないのだろうとも感じました。外国語を「習得すべきもの」としてだけ捉えるのではなく、言葉の違いを面白がり、その背景にある文化や歴史、人々のものの見方に関心を向ける。そうした好奇心こそが、学びを続ける力になるのかもしれません。

考えてみれば、外国語を学ぶことは、単に使える言葉を一つ増やすことではありません。それまで当たり前だと思っていた自分自身の言葉や文化を、少し離れたところから眺め直す機会でもあります。本特集が、読者の皆様にとって、言葉を入り口に未知の世界を「面白がる」きっかけとなれば幸いです。

また本号では、2025 年度のプロジェクト活動について 11 件の報告ならびに、中小企業経営研究所の客員研究員による市街地再開発地域のまちづくりに関する論考を掲載しています。それぞれのページから新たな発見や気づきを得ていただきながら、本号をお楽しみいただければ幸いです。

千葉商科大学総合研究センター長
サービス創造学部 教授
安藤　和代



【表紙のことば】

『千葉商科大学の教養―言語文化編―』をふまえ、言語や文化が持つ柔軟性や多様性を、滑らかな連続した曲線と複数色のグラデーションによって視覚化しました。途切れることのない曲線は、過去から未来へと受け継がれてきた知の継承や、人と人、異なる文化を結びつける言葉の繋がりを表現しています。また、緩やかに変化する色彩は、多様な価値観や文化が交わりながら新たな知を育み、視野を広げていく学びの姿を象徴しています。

千葉商科大学　総合政策学部
教授　吉羽　一之

CUC
CHIBA UNIVERSITY
OF COMMERCE

千葉商科大学総合研究センター

〒272-8512　千葉県市川市国府台1丁目3番1号
[TEL] 047 (372) 4863　[FAX] 047 (373) 0019
[URL] https://www.cuc.ac.jp/institute/